

円田盆地の遺跡群 1

経営体育成基盤整備事業（県営ほ場整備事業）に伴う緊急発掘調査
＜総括編＞



十郎田遺跡の材木堀区画（飛鳥時代）

都遺跡
新城館跡
窪田遺跡
十郎田遺跡
西小屋館跡
西屋敷遺跡
前戸内遺跡
戸ノ内遺跡
六角遺跡
原遺跡
磯ヶ坂遺跡
車地蔵遺跡
鍛冶屋敷遺跡
上葉の木沢遺跡

2014年3月

宮城県刈田郡蔵王町教育委員会

円田盆地の遺跡群 1

経営体育成基盤整備事業（県営ほ場整備事業）に伴う緊急発掘調査
＜総括編＞

都遺跡
新城館跡
窪田遺跡
十郎田遺跡
西小屋館跡
西屋敷遺跡
前戸内遺跡
戸ノ内遺跡
六角遺跡
原遺跡
磯ヶ坂遺跡
車地藏遺跡
鍛冶屋敷遺跡
上葉の木沢遺跡

2014年3月

宮城県刈田郡蔵王町教育委員会





巻頭写真 円田2期地区航空写真（平成11年撮影、縮尺：約1/10,000）

序 文

蔵王連峰の東麓に抱かれた蔵王町には、蔵王火山の造り出した変化に富む地形・地質と、四季折々の豊かな自然に育まれた山麓文化が息づいています。蔵王の山と、そこに暮らす人々が創り出した蔵王山麓の風景は、私たち町民の誇りであると同時に、将来へ守り伝えるべき大切な財産でもあります。

蔵王町には約 200 か所の遺跡が発見されており、先人の生活文化を伝える貴重な文化遺産として保護されています。遺跡は、古文書などの文字資料だけでは知ることのできない地域の実情や、まだ文字がなかった時代の人びとの暮らしぶりを、私たちにありのままに教えてくれるものです。

蔵王町の北東部に位置する円田盆地では、平成 8 年度に大規模なほ場整備事業が計画されました。事業の計画区域には多くの遺跡が含まれていたことから、保存についての協議が重ねられました。この結果、水田・畑となる部分は盛土によって遺跡を保存し、道路や水路などの工事によってやむを得ず破壊される部分については事前に発掘調査を行なって記録保存を図ることになりました。

平成 13 年度から平成 23 年度にかけての 11 年間に及ぶ発掘調査の成果は、各遺跡の発掘調査報告書で報告してきました。これらの遺跡は、円田盆地北部という地域的なまとまりの中で、互いに関連しながら残された遺跡群です。本書では、これまでの発掘調査成果を総括し、円田盆地の遺跡群の歴史的な意義について考察しています。本書は、今回の発掘調査成果の保存・活用を図っていく上での基礎資料となるものです。ここにまとめた学術的成果が広く町民の皆さまや各地の研究者に活用され、地域の歴史解明の一助となれば幸いです。

最後になりましたが、ほ場整備事業計画の策定と実施にあたっては、宮城県大河原地方振興事務所、蔵王町土地改良区、地元行政区、地元地権者の皆さまより文化財保護の重要性について深いご理解を賜り、事業計画との調整や発掘調査の実施等にご協力いただきました。地元作業員の皆さまにはさまざまな気象条件の下、野外での発掘作業にあたっていただきました。また、発掘調査・整理作業の実施に際して、宮城県教育委員会をはじめ多くの方々からご指導とご協力を賜りました。ここに心より深く感謝申し上げます、序といたします。

平成 26 年 3 月

蔵王町教育委員会
教育長 佐藤 茂 廣

例言

1. 本書は、経営体育成基盤整備事業（県営ほ場整備事業・円田2期地区）に伴う緊急発掘調査報告書の総括編である。
2. 本書は、これまでに発掘調査報告書を刊行してきた各遺跡の調査成果の概要をまとめ、円田盆地の遺跡群の内容と特質について考察することを目的としている。これにより、一連の発掘調査成果の包括的な理解と活用が可能になると考えている。
3. 発掘調査は、平成13・14年度に宮城県教育委員会が遺構確認調査、平成15～23年度に蔵王町教育委員会が本発掘調査を担当した。
4. 各遺跡の本発掘調査の整理・報告書作成作業は、蔵王町教育委員会が実施し、平成16～25年度に発掘調査報告書を刊行した。
5. 本書の作成は蔵王町教育委員会が実施し、教育総務課文化財保護係が担当した。平成25年度の職員体制は下記のとおりである。
教育長 佐藤 茂廣 教育総務課長 佐藤 則之 課長補佐 佐藤 浩明 主幹兼文化財保護係長 佐藤 洋一 主事 鈴木 雅
文化財専門職臨時職員 庄子 善昭 渡邊 香織 我妻 なおみ 鈴木 和美 海藤 元
文化財室内整理作業員 我妻 英子 我妻 智子 岩佐 若菜 大庭 慶志郎 菅野慶一 小杉 佐和子 小林 四郎 小林 美智子
佐藤 かおる 佐藤 貴美子 佐藤 恵子 佐藤 里栄 松崎 祐二 松田 律子
6. 本書の作成に際して行なった遺物写真の撮影およびデジタル画像の現像処理は、庄子善昭が担当した。
7. 本書の執筆・編集は、鈴木雅が担当した。
8. 本書に関わる発掘調査成果の詳細については、下記の発掘調査報告書を参照していただきたい。
宮城県文化財調査報告書 第188集（2002）「窪田遺跡・都遺跡・新城館跡」『名生館遺跡ほか』
宮城県文化財調査報告書 第195集（2003）「十郎田遺跡ほか」『壇の越遺跡ほか』
蔵王町文化財調査報告書 第3集（2005）『都遺跡ほか』
蔵王町文化財調査報告書 第4集（2006）『車地蔵遺跡・鍛冶屋敷遺跡ほか』
蔵王町文化財調査報告書 第6集（2008）『六角遺跡—経営体育成基盤整備事業（県営ほ場整備事業）に伴う緊急発掘調査—』
蔵王町文化財調査報告書 第8集（2009）『戸ノ内遺跡—経営体育成基盤整備事業（県営ほ場整備事業）に伴う緊急発掘調査—』
蔵王町文化財調査報告書 第11集（2011）『窪田遺跡—経営体育成基盤整備事業（県営ほ場整備事業）に伴う緊急発掘調査—』
蔵王町文化財調査報告書 第13集（2011）『十郎田遺跡1—経営体育成基盤整備事業（県営ほ場整備事業）に伴う緊急発掘調査—』
蔵王町文化財調査報告書 第14集（2011）『十郎田遺跡2—経営体育成基盤整備事業（県営ほ場整備事業）に伴う緊急発掘調査—
SE66 井戸跡出土木製遺物編 附 十郎田遺跡出土木製遺物に関する自然科学的分析』
蔵王町文化財調査報告書 第15集（2012）『西屋敷遺跡—経営体育成基盤整備事業（県営ほ場整備事業）に伴う緊急発掘調査—』
蔵王町文化財調査報告書 第16集（2013）『前戸内遺跡—経営体育成基盤整備事業（県営ほ場整備事業）に伴う緊急発掘調査—』
蔵王町文化財調査報告書 第17集（2014）『磯ヶ坂遺跡—経営体育成基盤整備事業（県営ほ場整備事業）に伴う緊急発掘調査—』
9. 本書に関わる発掘調査の写真・図面等の記録資料と出土遺物は、蔵王町教育委員会が一括して永久保管している。

凡例

1. 各図の方位は座標北を示している。
2. 測量図および測量成果は宮城県大河原地方振興事務所より提供を受けた。
3. 地図・航空写真は下記の図幅を使用して作成した。
巻頭写真：円田2期地区航空写真（蔵王町土地改良区、平成11年撮影）
第4図：円田2期地区現況測量図（宮城県大河原地方振興事務所、平成11年測量）
第5図：円田2期地区確定測量図（宮城県大河原地方振興事務所、平成22年測量）
第6図：円田2期地区字界変更図（平成25年9月議会資料・再トレース）
第9図：5万分の1地形図「白石」（大日本帝国陸地測量部、明治40年測量）
第12図：5万分の1都道府県土地分類基本調査 地形分類図「白石」（宮城県、昭和58年調査）
第13図：電子地形図25000（国土地理院、自由図郭版・平成24年図式・平成25年4月9日調製）
写真1：空中写真「白石」（国土地理院、昭和31年米軍撮影 [USA-M517-44・USA-M517-142]）
4. 遺跡記号は、下記のとおりである。
NR：都遺跡 SC：新城館跡 TS：窪田遺跡 TZ：十郎田遺跡 UB：西小屋館跡 UL：西屋敷遺跡
UA：前戸内遺跡 UC：戸ノ内遺跡 UE：六角遺跡 UF：原遺跡 IS：磯ヶ坂遺跡 UG：車地蔵遺跡
UN：鍛冶屋敷遺跡 UH：上葉の木沢遺跡 UJ：中葉の木沢遺跡
5. 遺構記号は、下記のとおりである。
SI：竪穴住居跡 SB：掘立柱建物跡 SE：井戸跡 SK：土坑 SD：溝跡 SX：その他・性格不明遺構
6. 遺構表記は、「遺構記号＋遺構番号」とした。但し、窪田遺跡については平成15(2003)・20(2008)年度の調査で重複した遺構番号を使用しているため、遺構記号の前に調査年次を示す西暦の下2桁を付加して表記した。
7. 各図の縮尺は、それぞれ図中にスケールを付して示した。
8. 報告書抄録に記載した各遺跡の緯度・経度は、電子国土配信データ上で取得した調査地点中央付近の緯度・経度（世界測地系）である。
9. 引用文献および執筆にあたり参考にした文献・報告書については巻末に一括して掲載した。

目次

序文
例言
凡例
目次

第1章	はじめに	1
第1節	調査の経過	1
第2節	本書の構成	9
第2章	位置と環境	11
第1節	遺跡の位置と地理的環境	11
第2節	周辺の遺跡と歴史的環境	12
第3章	基本層序	19
第1節	基本層序	19
第2節	遺構の確認状況	19
第4章	調査の成果	21
第1節	都遺跡	21
第2節	新城館跡	25
第3節	窪田遺跡	27
第4節	十郎田遺跡	31
第5節	西屋敷遺跡・西小屋館跡	39
第6節	前戸内遺跡	44
第7節	戸ノ内遺跡	48
第8節	六角遺跡・原遺跡	50
第9節	磯ヶ坂遺跡	56
第10節	車地藏遺跡・鍛冶屋敷遺跡・上葉の木沢遺跡	58
第5章	考察	61
第1節	円田盆地における遺跡群の動態と特質	61
第2節	円田盆地の土器様相—律令期土器集成〈飛鳥・奈良時代〉—	69
第6章	総括	81

参考・引用文献
報告書抄録



遺構確認作業（戸ノ内遺跡、北から）

第1章 はじめに

第1節 調査の経過

(1) 調査に至る経緯

蔵王町北東部の円田盆地に広がる水田地帯を対象とした経営体育成基盤整備事業（県営ほ場整備事業）では、昭和63年度に盆地南部（円田1期地区）の事業計画が策定され、同年に埋蔵文化財保存協議が実施された。この結果を受け、同年から平成2年度にかけて事業実施区域内に存在する埋蔵文化財包蔵地の遺構確認調査および事前調査が宮城県教育庁文化財保護課により実施された（宮城県教育委員会1989・1990・1991）。一方、盆地中・北部（円田2期地区）の事業計画は平成8年度に策定され、平成12年度には事業年次計画が提示された。約1,325,000㎡に及ぶ広大な事業実施予定区域には多数の埋蔵文化財包蔵地が含まれていたことから、平成8年度にはほ場整備事業計画と埋蔵文化財の関わりについての協議書が宮城県大河原地方振興事務所より蔵王町教育委員会を經由して宮城県教育委員会に提出され、関係四者（事業主側：宮城県大河原地方振興事務所・蔵王町土地改良区、文化

財保護側：宮城県教育委員会・蔵王町教育委員会）による埋蔵文化財保存協議が開始された。

平成11年度の協議において、事業実施区域内における埋蔵文化財包蔵地の詳細な分布調査が必要であるとの認識で合意したことを受け、平成12年度に町教育委員会が農閑期を利用した地表面観察による分布調査を実施した。この結果、周知の埋蔵文化財包蔵地の範囲が大きく広がることが判明した（第1図）。これを受けた協議の結果、埋蔵文化財が破壊される面積をできるだけ少なくするよう事業計画を大幅に見直すことが決定した。平成13年度には地方振興事務所より、水田および畑地となる部分については、地下の遺構を保護するよう適宜盛土を行なうとともに、幹線農道以外の作業用道路については未舗装の砂利道として事前調査対象となる破壊範囲をできるだけ減少させる見直し案が提示され、基本方針で合意に達した。

平成13・14年度には、事業計画区域のうち町道小村崎中央線以南の各遺跡の遺構分布状況と遺構面深度



調査前の遺跡範囲と分布調査の結果（平成12年4月踏査）

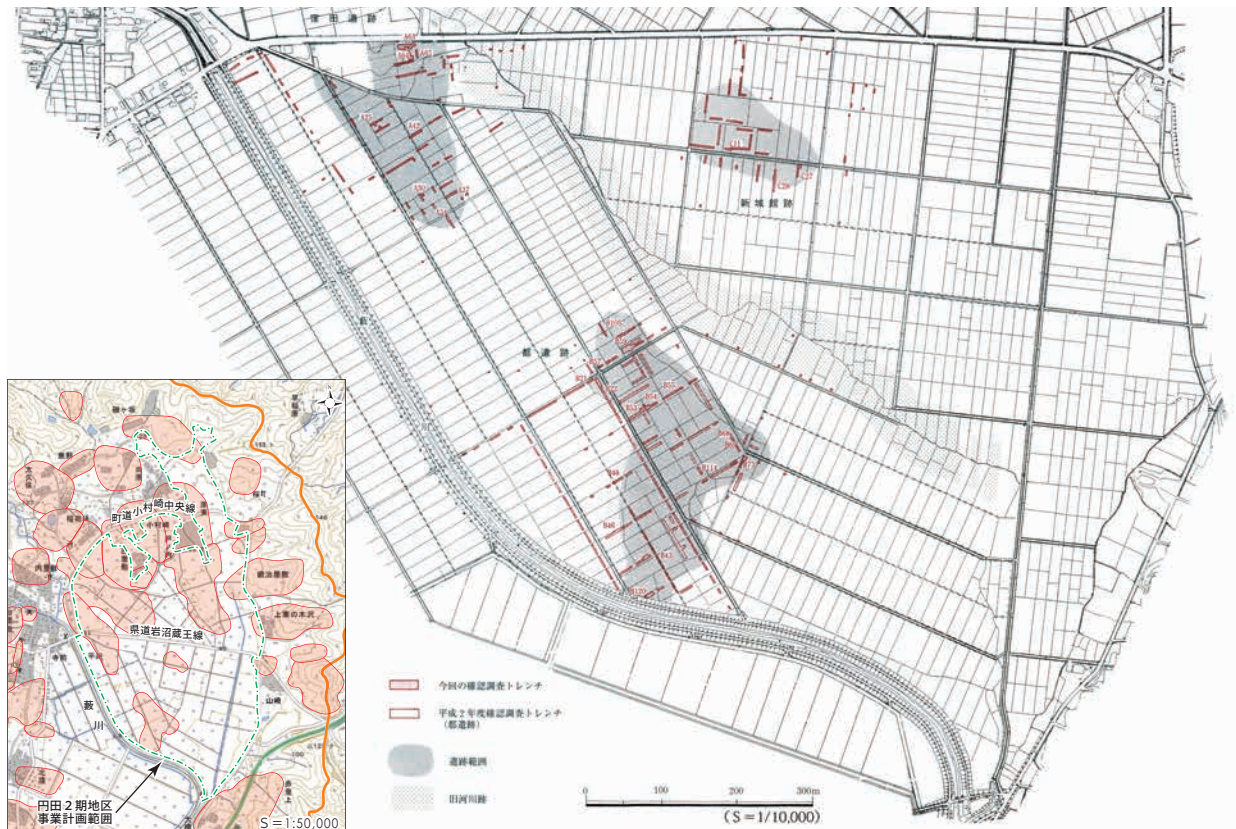


分布調査結果に基づく遺跡範囲（遺構確認調査・本調査の結果を反映した現在の範囲とは異なる）

第1図 分布調査による遺跡範囲の変更



平成14年度の遺構確認調査(県195集)



円田2期地区の事業計画範囲

平成13年度の遺構確認調査(県188集)

第2図 平成13・14年度の遺構確認調査

の把握を目的とした遺構確認調査が県文化財保護課と町教育委員会によって実施された（第2図、宮城県教育委員会2002・2003）。対象面積1,325,000㎡のうち、分布調査で遺物の散布が確認された範囲を中心として幅約2mのトレンチ557か所を設定し、計17,629㎡（全体の1.3%）を調査した。この結果、事業実施区域内の大まかな遺構の分布状況が明らかとなった。これを踏まえた協議の結果、遺構の存在する範囲については基本的に盛土による現状保存を図り、計画田面が遺構面よりも低くなる切土範囲と、幹線農道・作業道・水路の建設に伴って遺構面が掘削される範囲については、工事着手前に事前調査を実施して文化財保護法上必要な措置としての記録保存を図るという基本方針で合意に達した。また、作業道のうち未舗装の砂利道とする計画で遺構面に掘削が及ばない範囲については、確認調査を実施して遺構の分布状況を記録した上で盛土による現状保存を図ることになった。

平成14年度には事業実施区域のうち県道岩沼蔵王線の南側を平成15・16年度、北側を平成17~21年度に順次施工する事業計画が地方振興事務所より提示され、これを受けて平成15年度に県道南側の3遺

跡、平成17~21年度（その後の事業計画見直しなどにより平成25年度まで延長することで合意）に北側の13遺跡の計16遺跡を対象とする事前調査計画（室内整理を含む）を町教育委員会が策定した。これに基づいて、県道南側については平成15年度、北側については平成16年度に土木工事等に伴う文化財発掘調査についての依頼書が地方振興事務所より蔵王町へ提出され、事前調査に着手する運びとなった。



第3図 平成17年度の遺構確認調査（町4集）

（2）調査の経過

事前調査は平成15年度に着手し、平成23年度に完了した。事前調査対象となった15遺跡の発掘調査面積は、合計90,795㎡に及んだ（第1表、第4・5図）。調査では基本的に工事中測量基準杭を根拠として設定した3mグリッドにより遺構図等の記録を作製した。

なお、前述の保存協議における合意事項に基づき、未舗装の砂利道として整備される作業道部分では基本的に遺構分布状況の記録に留めた。各報告書に記載の通り、当該箇所では未精査の遺構が保存されており、今後の保護調整において注意を要する。

整理作業は発掘調査と並行して進め、作業の完了したもののから順次報告書を刊行した。確認した遺構・遺物の事実記載と、それらの年代的位置づけおよび遺跡の性格について考察し、特に重要と認められる成果についてはやや踏み込んだ検討・考察を行なった。また、平成19年度以降に刊行した報告書では、巻末に調査成果の概要を平易にまとめた解説を付した。

①平成15年度

県文化財保護課の協力を得ながら都遺跡・窪田遺跡・新城館跡の調査を実施した。都遺跡では微高地の辺縁部に沿って古代の区画施設などを確認したが、調

査前から予想されていた通り、後世の地形改変の影響が大きく、中枢部の遺構の大半は消滅していることが判明した。窪田遺跡では古墳時代～古代の住居跡などを確認した。新城館跡では古代の可能性のある建物跡などを確認したが、城館に関わる遺構・遺物はまったく確認されなかった。

②平成16年度

設計変更に伴う窪田遺跡の追加調査を実施した。

また、平成15・16年度調査分（都遺跡・窪田遺跡・新城館跡）の整理作業を実施し、報告書（町3集）を刊行した。都遺跡では昭和30年代に奈良時代の軒平瓦などが採集されており、本遺跡の性格を考える上で重要な資料であることから発掘成果の報告と合わせて資料紹介を行なった。

③平成17年度

県文化財保護課の協力を得ながら車地蔵遺跡・鍛冶屋敷遺跡・原遺跡・上葉の木沢遺跡・中葉の木沢遺跡の調査を実施した。車地蔵遺跡・鍛冶屋敷遺跡では近世の屋敷跡などを確認した。原遺跡・上葉の木沢遺跡では縄文時代とみられる落とし穴群などを確認した。中葉の木沢遺跡では遺構が確認されなかった。

第1表 発掘調査一覧

調査年度	遺跡名	調査面積 (㎡)			所収報告書
		事前調査	確認調査	合計	
H13	窪田遺跡・都遺跡・新城館跡	0	5,960	5,960	県188集
H14	窪田遺跡・十郎田遺跡・前戸内遺跡・西屋敷遺跡・西小屋館跡・戸ノ内遺跡・原遺跡・六角遺跡・三の輪遺跡・車地蔵遺跡・鍛冶屋敷遺跡・上葉の木沢遺跡・中葉の木沢遺跡	0	11,669	11,669	県195集
H15	都遺跡	4,420	0	4,420	町3集
	新城館跡	1,890	0	1,890	町3集
H16	窪田遺跡	585	1,445	2,030	町3集
	窪田遺跡	150	0	150	町3集
H17	中葉の木沢遺跡	650	0	650	町4集
	上葉の木沢遺跡	1,700	0	1,700	町4集
	鍛冶屋敷遺跡	4,700	0	4,700	町4集
	車地蔵遺跡	2,500	0	2,500	町4集
	原遺跡	1,400	0	1,400	町4集
	磯ヶ坂遺跡	0	1,165	1,165	町4集
H18	六角遺跡	16,700	9,100	25,800	町6集
H19	戸ノ内遺跡	7,715	1,520	9,235	町8集
	十郎田遺跡	3,852	3,647	7,499	町13・14集
H20	十郎田遺跡	1,600	0	1,600	町13集
	窪田遺跡	2,848	1,181	4,029	町11集
	前戸内遺跡	3,030	0	3,030	町16集
	戸ノ内遺跡	390	510	900	町8集
H21	前戸内遺跡	527	0	527	町16集
	西屋敷遺跡	4,025	2,191	6,216	町15集
	磯ヶ坂遺跡	8,075	0	8,075	町17集
H22	西小屋館跡	0	165	165	町15集
H23	六角遺跡	1,628	0	1,628	町17集
	原遺跡	1,486	0	1,486	町17集
合 計		69,871	38,553	108,424	

※平成13・14年度は宮城県教育委員会、平成15年度以降は蔵王町教育委員会が調査主体となって発掘調査を実施した。

また、遺構の分布状況が把握されていなかった町道小村崎中央線以北に位置する磯ヶ坂遺跡の遺構確認調査を実施した(第3図)。幅約2mのトレンチ23か所を設定し、計1,165㎡を調査した。遺構の分布密度は希薄で、遺物も確認されなかった。

これらの整理作業は県文化財保護課が担当して年度内に実施し、報告書(町4集)を刊行した。また、車地蔵遺跡出土の木製遺物の保存処理を実施した。

④平成18年度

町文化財専門職員を1名から2名に増員し、さらに県文化財保護課の協力を得て六角遺跡の調査を実施した。縄文時代とみられる落とし穴群、古墳時代・古代の集落跡、近世墓群などを確認した。

まとまった遺構群が確認されたことから、一般町民向けの見学会を開催し、約50名の参加があった。

なお、遺跡南端部の計画田面の比高差を軽減するため、切土工事の要望が出されたことから、県文化財保護課との協議を経て事前調査範囲に追加した。

⑤平成19年度

戸ノ内遺跡・十郎田遺跡の調査を実施した。戸ノ内遺跡では古代の集落跡、中世の屋敷跡などを確認し

た。十郎田遺跡では古墳時代・古代の集落跡、中世の屋敷跡などを確認した。飛鳥時代の集落は材木堀・大溝による区画施設を伴っている。中世の屋敷跡では廃絶して埋没の進んだ井戸跡から木製挽物未製品などが大量に出土した。

十郎田遺跡では想定を大きく上回る遺構が確認され、さらに長雨の影響も受けて年度内に調査を完了できなかったことから、一部の調査を翌年度に持ち越すことになった。

また、六角遺跡の整理作業を実施し、報告書(町6集)を刊行した。六角遺跡の奈良時代の集落には、関東系移民の存在を示す関東型カマドを持つ住居や、関東系土師器を伴うことが明らかになった。

⑥平成20年度

十郎田遺跡・窪田遺跡・戸ノ内遺跡・前戸内遺跡・西屋敷遺跡の調査を実施した。十郎田遺跡では飛鳥時代の集落に伴う材木堀の南東隅周辺を調査し、密集する住居跡と建物跡などを確認した。窪田遺跡では古墳時代・古代の集落跡などを確認した。奈良時代の集落には企画性のある建物群が見られ、関東系土師器を伴っている。戸ノ内遺跡では幹線農道の仮施工を受けて現道部分の追加調査を実施した。前戸内遺跡では平

安時代の集落跡などを確認した。企画性のある建物群が見られ、墨書土器を伴っている。

前戸内遺跡では設計により土砂溜部の調査が追加されたことや、想定を上回る遺構が確認されたことから年度内の調査完了が困難となり、一部の調査を翌年度に持ち越すこととなった。西屋敷遺跡についても年度内の実施が不可能となったことから、遺構密度を把握する試掘に留め、翌年度に改めて調査を実施することとなった。

十郎田遺跡では調査成果の重要性を鑑みて、一般市民のほか考古学関係者にも調査成果を広く公表するため報道発表と見学会を開催し、見学会には約100名の参加があった。また、古代城柵官衙遺跡検討会などで調査成果の報告を行なった。

また、戸ノ内遺跡の整理作業を実施し、報告書(町8集)を刊行した。戸ノ内遺跡でも奈良時代の住居に関東系土師器を伴うことが明らかになった。円田盆地内での類例が増加していることから、当該期の円田盆地の土器様相について整理し、古代律令国家との関係について見通しを述べた。

このほか、十郎田遺跡出土の柱材・木製遺物にの樹種同定と放射性炭素年代測定、前戸内遺跡出土の炭化物の放射性炭素年代測定を実施した。十郎田遺跡出土の木製品、戸ノ内遺跡・窪田遺跡出土の金属製品については保存処理を実施した。

⑦平成21年度

前戸内遺跡・西屋敷遺跡・磯ヶ坂遺跡の調査を実施した。前戸内遺跡では古代の集落跡、近世墓群などを確認した。前年度の調査成果と合わせて検討した結果、平安時代の集落のうち企画性のある建物群などを配した一角は有力者層の居宅と考えられることが判明した。西屋敷遺跡では西小屋館跡西辺土塁の外側に沿う堀跡を確認し、これに隣接して中世の屋敷跡を確認した。屋敷跡では多数の柱穴が密集して確認され、建物群の複雑な変遷が窺われた。磯ヶ坂遺跡では、縄文～弥生時代の落とし穴群・貯蔵穴群、古代の住居跡、近世墓群などを確認した。

並行して調査を実施していた前戸内遺跡・西屋敷遺跡でまとまった遺構群が確認されたことから、一般市民向けの見学会を開催し、約50名の参加があった。

また、窪田遺跡・十郎田遺跡の整理作業を実施した。

⑧平成22年度

集落道1号工事に伴う六角遺跡・原遺跡の調査を

予定したが、施工計画が検討中であることから翌年度に持ち越すこととした。西小屋館跡では南辺部の遺構確認調査を実施した。

窪田遺跡・十郎田遺跡の整理作業を実施し、窪田遺跡の報告書(町11集)を刊行した。また、窪田遺跡・十郎田遺跡出土の柱材、西屋敷遺跡出土の炭化物の放射性炭素年代測定を実施した。

整理作業中の平成23年3月11日に東日本大震災が発生した。町文化財整理室でも一部の遺物や備品等に若干の被害があったほか、ライフラインの復旧まで業務の中断を余儀なくされた。本事業に関わる出土遺物・調査資料類への被害はなかった。

⑨平成23年度

集落道1号工事に伴う六角遺跡・原遺跡の調査を実施した。六角遺跡では古墳時代・古代の住居跡など、原遺跡では古墳時代の住居跡などを確認した。

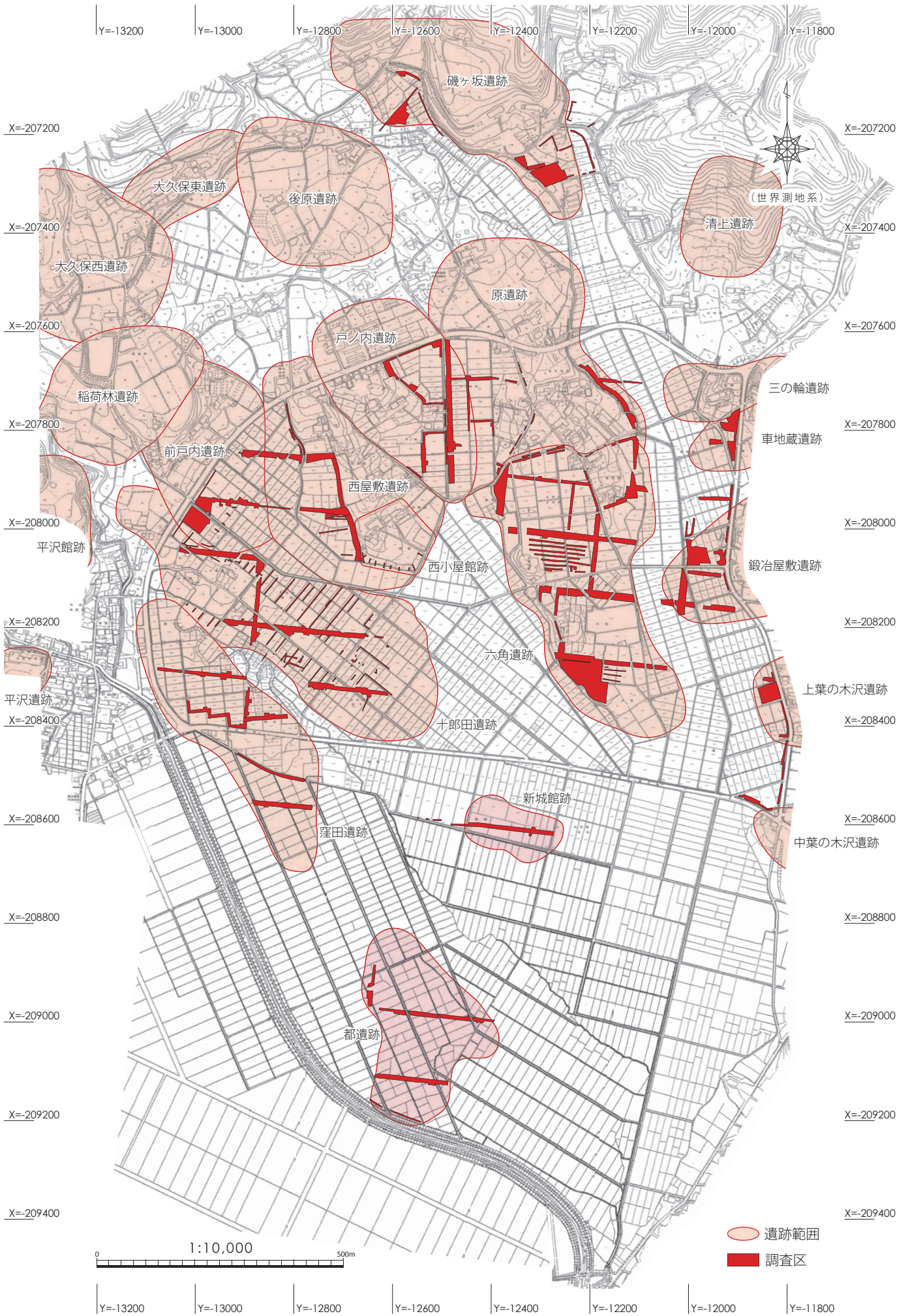
十郎田遺跡・西屋敷遺跡・西小屋館跡・前戸内遺跡の整理作業を実施し、十郎田遺跡(町13・14集)・西屋敷遺跡・西小屋館跡(町15集)の報告書を刊行した。十郎田遺跡については2分冊とし、第1分冊(町13集)では遺跡全体の報告と、材木堀・大溝による区画施設を伴う飛鳥時代の集落の意義について考察し、宮城県南西部における律令制導入期の歴史的動向について予察を述べた。第2分冊(町14集)では中世の井戸跡から大量に出土した木製挽物未製品などについての詳細報告を行ない、製作技術などについて考察した。

⑩平成24年度

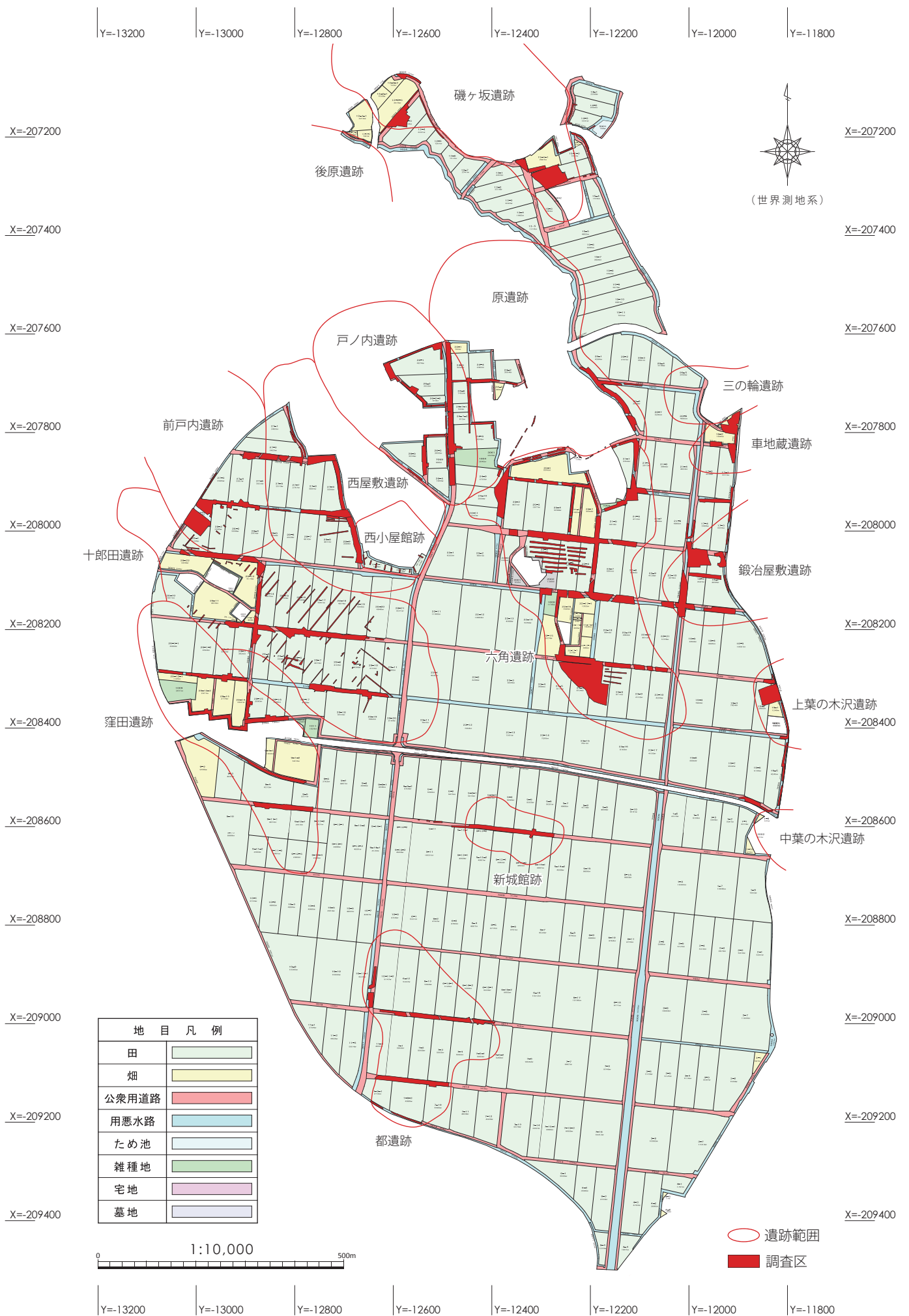
前戸内遺跡の整理作業を実施し、報告書(町16集)を刊行した。平安時代の集落の遺構配置について検討し、企画性のある建物群が配置される一角は有力者層の居宅の可能性が高いことが判明した。墨書土器28点を確認し、「草手」「苺田」などの文字が確認された。「苺田」は当時の郡名を記したとみられ、当時の円田盆地北部が苺田郡域に属したこと裏付けている。

⑪平成25年度

磯ヶ坂遺跡と集落道1号工事に伴う六角遺跡・原遺跡の整理作業を実施し、報告書(町17集)を刊行した。合わせて六角遺跡の平成18年度調査で確認したが未報告となっていた近世墓群について報告した。これを踏まえて、磯ヶ坂遺跡・六角遺跡・前戸内遺跡の近世墓の内容を検討し、円田盆地における近世村落墓制について考察した。



第4図 発掘調査区配置図（調査前現況測量図）



第5図 発掘調査区配置図 (施工後確定測量図)

第2節 本書の構成

(1) 本書の性格

本書は県営ほ場整備事業（円田2期地区）に伴う緊急発掘調査報告書の総括編である。本書では、これまでの円田盆地北部における各遺跡の発掘調査成果を集約し、遺跡群の概要を明らかにすることを目的としている。よってすべての遺構・遺物について記載の対

象とせず、各遺跡を構成する主要な遺構・遺物について記述し、各遺跡の概要が把握できるよう配慮した。既に刊行した各遺跡の本報告書の内容を必要に応じて本書で再掲しているが、各遺構・遺物の詳細はそれぞれの一次報告書を合わせて参照していただきたい。

(2) 本書で扱う成果

発掘調査は、下記の3つの目的と方法により実施した。本書ではこれらの成果を包括的に扱う。

- ① 工事の設計に必要な遺構の分布範囲・密度および遺構面標高の把握を目的とした遺構確認調査
(平成13・14・17年度)
 - ② 工事の施工と関わりを持つ遺構の記録保存を目的とした事前調査・遺構確認調査
(平成15～21・23年度)
 - ③ ②で確認した性格把握を目的とした遺構確認調査
(平成18～21年度)
- 主体的な調査成果となる②では、基本的に工事用測

量基準杭を根拠として設定した3mグリッドにより遺構図等の記録を作成しているが、遺構の分布状況に応じて一部平板測量を併用したことがある。①・③については、基本的に幅2m程度のトレンチ調査である。遺構図等は現況の地境等を根拠とした簡易的な測量により作製している。本書に掲載した各遺跡の遺構配置図は、これらを複合的に図示したものである。

なお、工事で整備される区画の基準線は南北軸で座標北から東に6.3度傾いており、発掘調査のグリッドもこれに倣っている。各報告書の遺構図等は便宜的にグリッド北を上にして提示してあるが、本書ではグリッドを省略し、座標北を上にして提示した。

(3) 遺構・遺物の年代観

出土遺物の主体である古代の土師器・須恵器の土器編年については、下記の主要参考文献に挙げた研究成果を参照し、ここで提示された年代観に従って記述している。ただし、個々の資料についての分類・型式比定の責はすべて報告者に帰する。

また、関東系土師器の認定については、平成21年度に開催した第1回蔵王町出土遺物検討会（主催：町教委・宮城県考古学会古墳古代研究部会）での意見交換などを踏まえている。円田盆地の土器群に顕著な事象として、例えば関東系土師器の器形に黒色処理が施される場合など、在地・関東系土師器の要素が共存する資料については、域外との交渉関係を評価する視点から積極的に取り上げた。こうした観点から、報告者が関東系土師器として認識したものについては実測図に▲印を付したが、利用者の方が不必要と考える場合は適宜削除してご利用いただきたい。

なお、遺物の編年観とこれに伴う遺構の年代観およびその性格等の位置づけについては、遺跡群の調査の進展や近年の研究状況を踏まえて、一次報告書で記述した見解を修正した部分がある。これについてはできるだけ文中に明記したが、記載の及ばない部分についても報告者による現段階での再検討の結果として捉えていただければ幸いである。

<古代の土器編年に関する主要参考文献>

東北古代土器研究会 2005『東北古代土器集成—古墳後期～奈良・集落編—<宮城>』研究報告2

東北古代土器研究会 2008『東北古代土器集成—須恵器・窯跡編—<陸奥>』研究報告3

村田晃一 2007「宮城県中部から南部」「東北・北海道における6～8世紀の土器変遷と地域の相互関係」『古代東北・北海道におけるモノ・ヒト・文化交流の研究』（研究代表者：辻秀人）東北学院大学文学部

(編著者名五十音順)



円田盆地から西に高木丘陵と青麻山、新雪の蔵王連峰を望む
(右手前の道路部がほ場整備工事後の十郎田遺跡4区東部付近)

第2章 位置と環境

第1節 遺跡の位置と地理的環境

蔵王町は宮城県南西部にあり、奥羽山脈に連なる蔵王連峰の東麓に位置する。町域は東西 23km、南北 13km で面積は 152.85km² を占め、北は柴田郡川崎町、東は柴田郡村田町・大河原町、南は白石市、西は山形県上市市と境を接する（第7図）。海拔標高は最高点が西端の屏風岳で 1,825m、最低点が南東部の松川と白石川の合流点で 20m を測る。

町域の6割を山林原野が占めており、西部は高原・山岳地帯、東部は平野・丘陵地帯である。西部は蔵王火山の活動による溶岩台地が発達し、火砕流堆積物からなる扇状地地形も見られる。東部の松川流域には盆地や段丘群が形成されており、沖積平野での稲作と丘陵部での果樹栽培が盛んである。

蔵王連峰は、火口湖（御釜）・溪谷・湿原など変化に富んだ地形を擁し、高山植物をはじめとする多様な動植物が生息・生育する。蔵王国立公園・蔵王高原県立自然公園の指定地域となっているほか、成層火山群の活火山である蔵王火山は地質学的に貴重なフィールドとして「日本の地質百選」に選定されている。

蔵王連峰から東流する松川は、独立峰をなす青麻山の東麓で流路を南へ向けて白石川に注ぐ。町域の東部では2～3段のやや広い段丘面を形成し、北東部では支流の藪川流域に円田盆地を擁する（第8・12図）。

円田盆地は東西 1.2km、南北 3.5km の底面を持ち、南を除く三方を丘陵で画されている。これらの丘陵は

主として第三紀白沢層を基盤とする高館丘陵の一角をなし、盆地西側から北側にかけては高木丘陵、東側は愛宕山丘陵と通称されている。盆地内を蛇行しつつ南流する藪川は自然堤防が未発達で、流域に湿地帯を形成している。

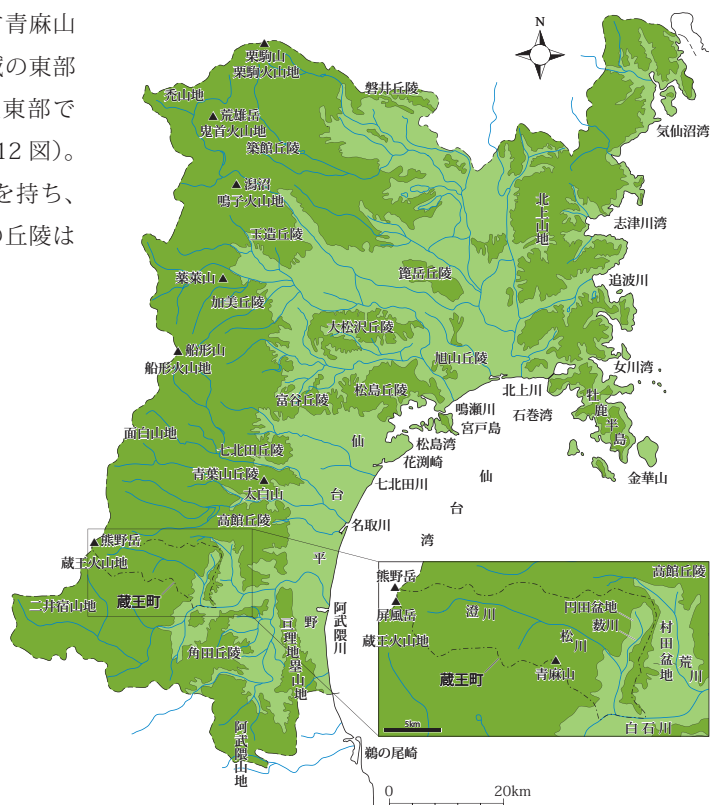
高木丘陵は雁柄川、鎌倉川、藪川、堀の内川、高木川などの小河川によって開析され、盆地西縁部に東西方向、北縁部には北西－南東方向に延びる舌状小丘陵が連なる。北縁部の舌状小丘陵は微高地状となって盆地中央部まで長く延びる。やや急峻な傾斜を持つ愛宕山丘陵の西斜面は小規模な谷によって開析され、盆地東縁部に蒲鉾形の舌状小丘陵を連ねている。

遺跡は盆地を取り巻く舌状小丘陵上に連続的に確認されており、盆地内の丘陵や微高地が余すところなく人間活動の場として利用されたことを示している。

明治40年代及び昭和20年代以降に行なわれた耕地整理の結果、切り盛り工法による造成で遺跡の立地する地形の多くが消失し、円田盆地の盆底面の大半は



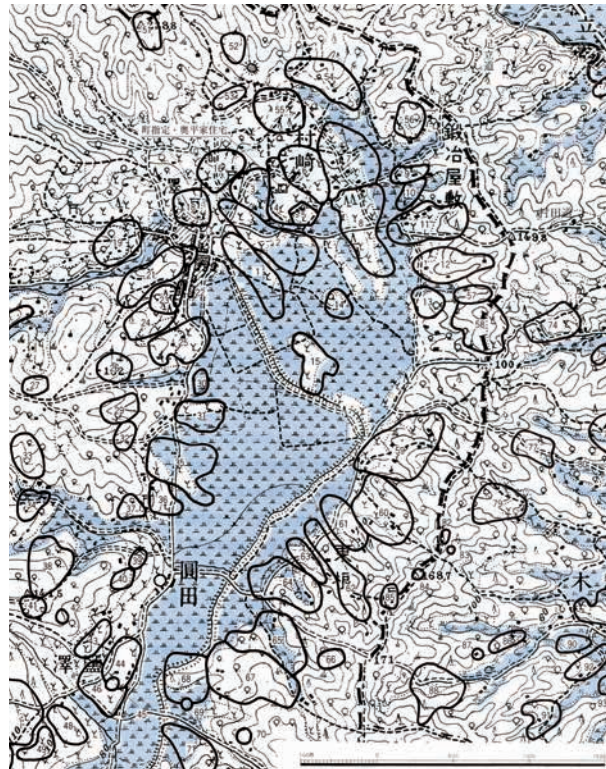
第7図 蔵王町の位置



第8図 蔵王町と周辺の地形

水田地帯となった。特に昭和37～38年の藪川堤防改修工事と耕地整理によって、ほぼ現在の景観が形成された。耕地整理が行なわれる前の明治40年測量図との対比から、盆底面に分布する遺跡の多くが低平な丘陵及び微高地上の畑地として利用され、一部が沖積地の水田に及んでいることが確認できる(第9図)。このように、大半が水田として利用されている現在の盆底面は、地形的な変化に乏しい景観を呈しているが、本来は微高地と小規模な沢地形とが複雑に入り組んだ景観であった。

今回の県営ほ場整備事業(円田2期地区)事業区域は盆地北部の盆底面にあたり、低平な舌状小丘陵や微高地上に多くの遺跡が立地する。前述の地形環境との関係で見ると、盆地西縁の高木丘陵から派生する舌状小丘陵及び微高地上に都遺跡・窪田遺跡・新城館跡・十郎田遺跡・前戸内遺跡・西小屋館跡・西屋敷遺跡・戸ノ内遺跡・六角遺跡・原遺跡、盆地東縁の愛宕山丘陵から派生する舌状小丘陵及び微高地上に磯ヶ坂遺跡・車地藏遺跡・鍛冶屋敷遺跡・上葉の木沢遺跡が立地する(第12・13図)。



明治40(1907)年大日本帝国陸地測量部測量
第9図 円田盆地の旧地形と遺跡分布(県195集)

第2節 周辺の遺跡と歴史的環境

(1) 歴史的環境

蔵王町と七ヶ宿町からなる刈田郡は、かつては白石市を含む宮城県南西部の広い地域を占めていた。この刈田・白石地方の地形がつくりだす景観について「刈田郡誌」では「郡下下るところ連丘連山起伏し、谿谷溪流を見る。この一圓の水を聚めて阿武隈川に運ぶもの即ち水清く、石白き白石川にして、其本流支流に沿って、管内各村を往訪すべき諸道開けたり…」と記している(刈田郡教育会1928)。

蔵王東麓の広大な山地・丘陵と、これを隈なく開析する大小の河川は、多種多様な動植物を生息・生育させ、先史時代には人類の豊かな生活基盤となっていたことが濃密な遺跡分布から窺える。このような複雑な地形環境から、歴史時代には軍事上の要衝地域として数多くの城館が構築され、しばしば戦乱の舞台ともなったが、一方で土着の耕作者にとっては耕地が狭小である上に低地は洪水の常襲地帯で、時折集落や耕地の流失もあり、交通の難所でもあった。

刈田郡に関する最古の記録は、「続日本紀」に記された養老5年(721年)の陸奥国刈田郡建置に関する記事である。これによると刈田郡は柴田郡のうち二

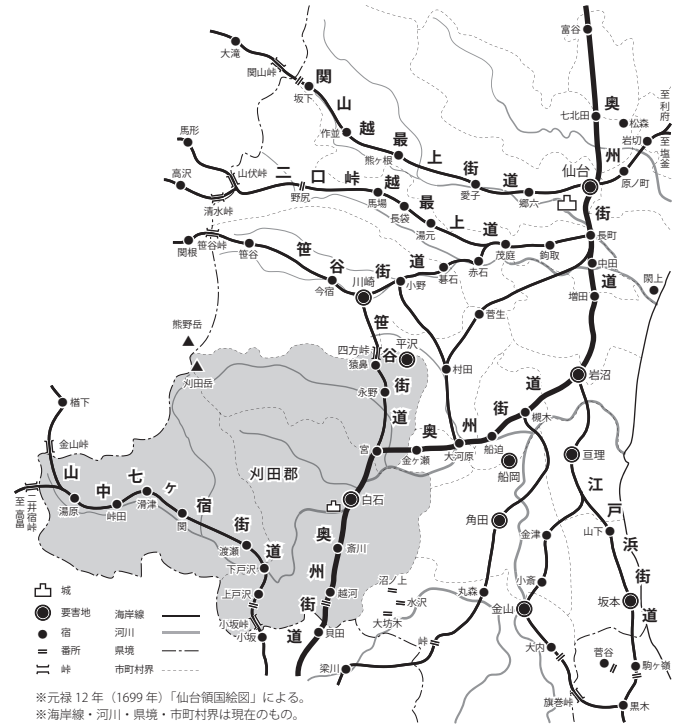
郷を分割して設置され、仙南地方では最も遅い建郡であった。陸奥国は7世紀半ばに亘理・伊具地方を北辺として成立し、7世紀後半頃には大崎平野周辺までその範囲を広げていたと考えられている。このため、柴田・刈田郡周辺は陸奥国成立後の早い段階で律令政府の安定した統治下に置かれていたであろう。

平安時代末期には奥州藤原氏の支配下にあったとみられ、丈六阿弥陀如来坐像を安置する阿弥陀堂が建立された。また、奥州合戦について「吾妻鏡」の伝えるところでは、文治5年(1189年)に藤原泰衡軍は刈田郡根無藤(蔵王町円田)に城郭を構え、四方坂(同平沢)との間で源頼朝軍と進退七度に及ぶ戦いの末に敗退したという。このことから、この地域が軍事上重要視されており、根無藤から四方坂を経る道筋が、出羽国へ至る出羽道の一部であったことが窺える。

鎌倉時代以降は白石氏(刈田氏)が刈田郡の中心勢力であった。白石氏は南隣の伊達郡を本拠とする伊達氏との関係が深く、戦国時代には伊達氏の傘下に組み込まれた。天正18年(1590年)に豊臣秀吉による奥州仕置で刈田郡は伊達領と確定されたものの、翌年の再仕置で伊達政宗が岩出山城へ移封され、刈田

郡は長井・信夫・伊達などの各郡とともに会津黒川城に入封した蒲生氏郷に与えられた。慶長3年（1598年）には蒲生氏に代わって会津に入封した上杉景勝の領地となり、家臣甘粕備後景継が白石城主となったが、政宗は慶長5年（1600年）に徳川家康の命を受けて上杉氏を押さえるため白石城を攻めて奪還し、刈田郡は仙台藩領となった。政宗は慶長7年（1602年）に重臣・片倉景綱を白石城主とし、藩境西南の固めを任せた。以後は代々片倉氏が白石城主を務め、江戸時代を通じて刈田郡の過半は片倉氏の知行地であった。

江戸時代には奥羽山脈を挟んで陸奥国を奥州街道、出羽国を羽州街道が縦貫しており、刈田郡内にも奥州街道が白石城下を通過していた。また、奥州街道の宮宿（蔵王町宮）から分岐して永野宿・猿鼻宿・四方峠（蔵王町円田）を經由し、笹谷峠を越えて山形の羽州街道へ抜ける笹谷街道も設けられていた（第10図）。



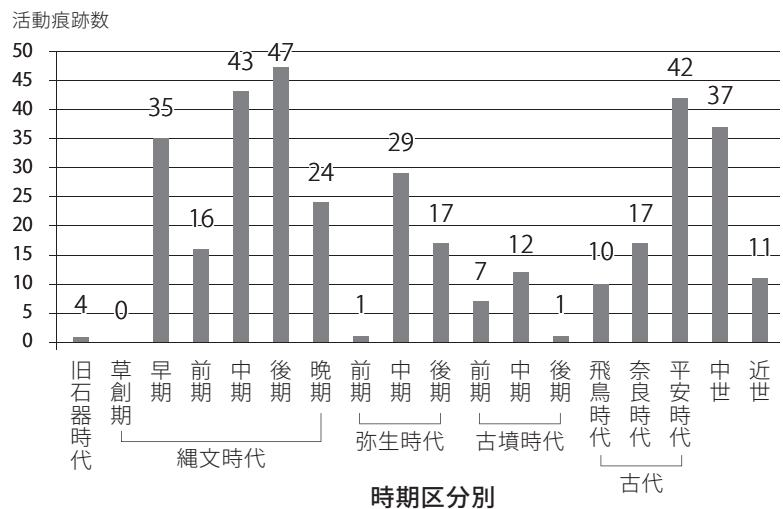
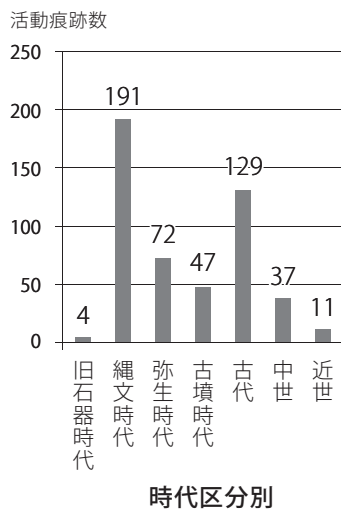
第10図 刈田郡周辺の街道（風間1983原図）

（2）遺跡の概況

蔵王町内における周知の遺跡は現在192か所を数える（第12図）。その多くは町域東部の平野・丘陵地帯に分布し、①青麻山東麓の丘陵と段丘上、②松川北岸の段丘と高木川など支流流域の丘陵上、③円田盆地に接する丘陵上に集中域を形成する。なお、町域西部の高原地帯では七日原扇状地の扇端部に少数の遺跡が分布する。これらの遺跡のほとんどは、複数の時代や時期区分に比定される活動痕跡が重複する複合遺跡であるが、時代や時期ごとの分布には一定の傾向が認められ、主に生業形態の変化を反映している。

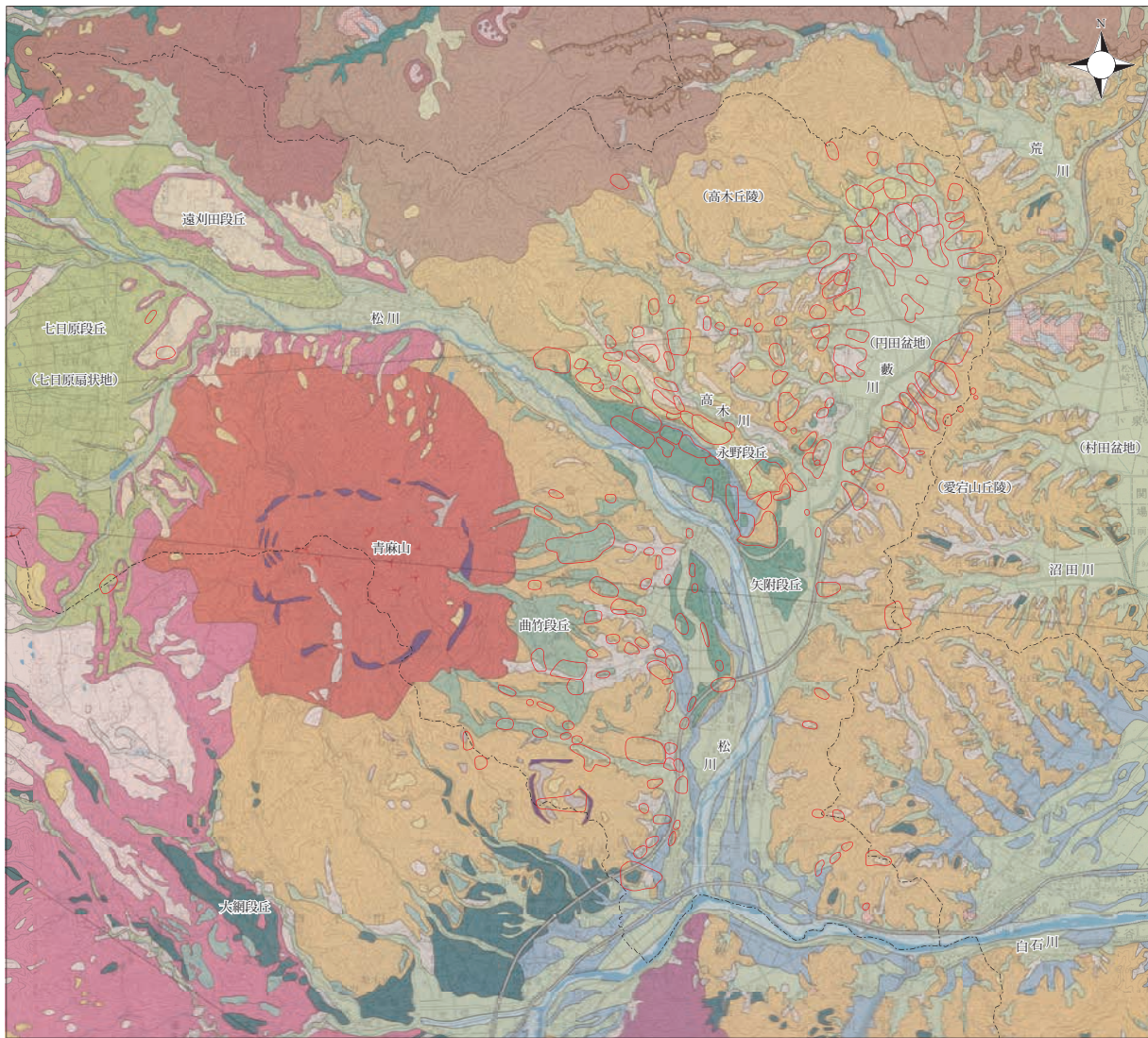
各遺跡に残された活動痕跡を時期区分別に集計するとその総数は491か所を数え、時代・時期ごとの人間活動の動態を窺い知ることができる（第11図）。

旧石器時代から縄文時代草創期にかけての活動は低調であるが、早期になると激増する。前期には半減するが中期に再び増加傾向を示し、後期には活動痕跡が最多となる。晩期には再び半減し、弥生時代前期の活動は低調である。中期には回復するが、その後は段階的な減少傾向が見られ、古墳時代後期の活動は低調である。飛鳥時代以降、再び活動は活発化するが、平安時代の活動痕跡はほとんどが9世紀代に比定される



※各時代・時期区分の時間幅は均等ではない。※時期区分が不明な活動痕跡があるため、時期区分別の合計と時代別の活動痕跡数は一致しない。

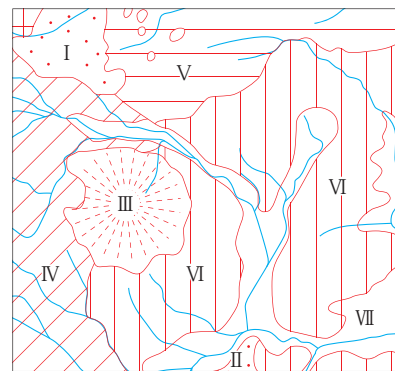
第11図 蔵王町の遺跡における活動痕跡の動態



- 山地及び丘陵地**
- (蔵王火山)
 - 山麓丘陵地
 - (青麻山)
 - 山地
 - 尖頂峰
 - 火山性急崖
 - (非火山性山地)
 - 奥羽山脈の山地(峩々)
 - 大鳥谷山地
 - 山頂平坦地(大森付近)
 - 大萩山地
 - (非火山性丘陵地)
 - 高い丘陵地
 - 低い丘陵地
 - 頂部平坦地
 - 高位谷底
 - 旧火山性急崖
 - 低地**
 - 河岸平野・谷底平野
(後背湿地を区別した区域では自然堤防)
 - 後背湿地
 - 河原及び堤内地

- 台地及び段丘**
- 高位段丘
 - (蔵王東麓段丘群)
 - 火山泥流台地(弥治郎泥流台地)
 - 遠刈田段丘
 - 七日原段丘
 - 川原子段丘
 - 蔵本段丘
 - 大網段丘
 - (松川段丘群)
 - 永野段丘
 - 曲竹段丘
 - 矢附段丘
 - 低位段丘
 - その他**
 - 人工平坦地(主として切土による部分)
 - 人工平坦地(主として盛土による部分)
 - 支倉川流域と荒川流域の間の崖線
 - 遺跡**
 - 遺跡範囲(蔵王町内)
 - 行政界**
 - 市町の境界

1:100,000
 2000m 0 2000 4000
 (5万分の1 都道府県土地分類基本調査 地形分類図「白石」)



- 地形区分図**
- I 大鳥谷山地
 - II 大萩山地
 - III 青麻火山
 - IV 蔵王山麓丘陵地
 - V 高い丘陵地
 - VI 低い丘陵地
 - VII 白石川河岸平野
- 行政区分図**
-

第12図 蔵王町の地形区分と遺跡の分布

もので占められており、中世に入って13世紀代の活動痕跡が見られるようになるまでの期間は考古学的には空白期となっている。なお、前述のとおり12世紀には奥州藤原氏の影響下で阿弥陀堂が建立されたとみられる。近世に関しては周知の遺跡数は少ない現状にあるが、奥州街道の宮宿をはじめ街道筋を中心に活発な活動があった。

以下、各時代・時期における活動痕跡を概観する。

旧石器時代 ナイフ形石器が出土した持長地遺跡など、低位段丘上で4か所の活動痕跡が認められる。いずれも単独出土・採集資料のため、帰属時期や活動の内容には不明な点が多い。

縄文時代 青麻山東麓の丘陵・段丘上や松川北岸の段丘・丘陵上などに191か所の活動痕跡が認められる。

草創期は明確な活動痕跡が発見されていない。

早期は青麻山東麓の明神裏遺跡・上原田遺跡・沢入D遺跡、松川北岸の手代木遺跡・三本槻A遺跡、七日原扇状地の北原尾遺跡などがあり、比較的小規模とみられる活動痕跡が広範囲に点在する。明神裏遺跡は明神裏Ⅲ式（林1962）の標識遺跡である。

前期は青麻山東麓の上原田遺跡・長峰遺跡、松川北岸の西浦遺跡・上曲木B遺跡、七日原扇状地の七日原遺跡などがあり、青麻山東麓から松川北岸にかけての段丘上に多く分布する。

中期は青麻山東麓の上原田遺跡・二屋敷遺跡、松川北岸の谷地遺跡・寺門前遺跡・高木遺跡・鞘堂山遺跡・湯坂山B遺跡などがあり、松川北岸の段丘上に多く分布する。中期前葉の谷地遺跡では住居跡11軒、貯蔵穴50基、遺物包含層などを確認している。土偶などを含む多量の遺物が出土し、拠点的な集落跡と考えられる。鞘堂山遺跡では中期中葉の住居跡5軒、貯蔵穴23基などを確認し、住居は貯蔵穴・柱穴群を囲むように配置されていた可能性がある。湯坂山B遺跡では中期後葉の住居跡17軒、貯蔵穴16基などを確認し、土笛などを含む多量の遺物が出土している。

後期は青麻山東麓の二屋敷遺跡・山田沢遺跡、松川北岸の西浦B遺跡などがあり、青麻山東麓の自然堤防上から松川北岸の段丘上に多く分布する。二屋敷遺跡では後期初頭～前葉の炉跡2基、土器埋設遺構2基、配石遺構1基などが確認されている。西浦B遺跡では広場を囲むように弧状に配置された後期初頭～前葉の建物跡23棟、貯蔵穴31基などが確認されている。

晩期は青麻山東麓の下別当遺跡・願行寺遺跡・鍛冶沢遺跡などがあり、青麻山東麓の沢地形に面した段丘上に多く分布する。鍛冶沢遺跡では後期末～晩期末に

かけての土坑墓・土器埋設遺構・建物跡・住居跡などの遺構群が確認され、建物群は広場を囲むように弧状に配置されていた。また、鍛冶沢遺跡では中空土偶、願行寺遺跡では屈折土偶が採集されている。

弥生時代 72か所の活動痕跡が広範囲に点在する。

前期は明確な活動痕跡に乏しいが、青麻山東麓の鍛冶沢遺跡では、縄文時代晩期から継続する墓域で再葬墓が確認されている。

中期は松川北岸の西浦遺跡、円田盆地の大橋遺跡・立目場遺跡・都遺跡などがある。この時期になると、松川北岸から円田盆地にかけての丘陵・段丘・微高地上に多く分布するようになり、本地域における遺跡分布の大きな画期となっている。西浦遺跡は円田式（伊東1955）の標識遺跡である。都遺跡では籾殻圧痕のある土器片が出土している。

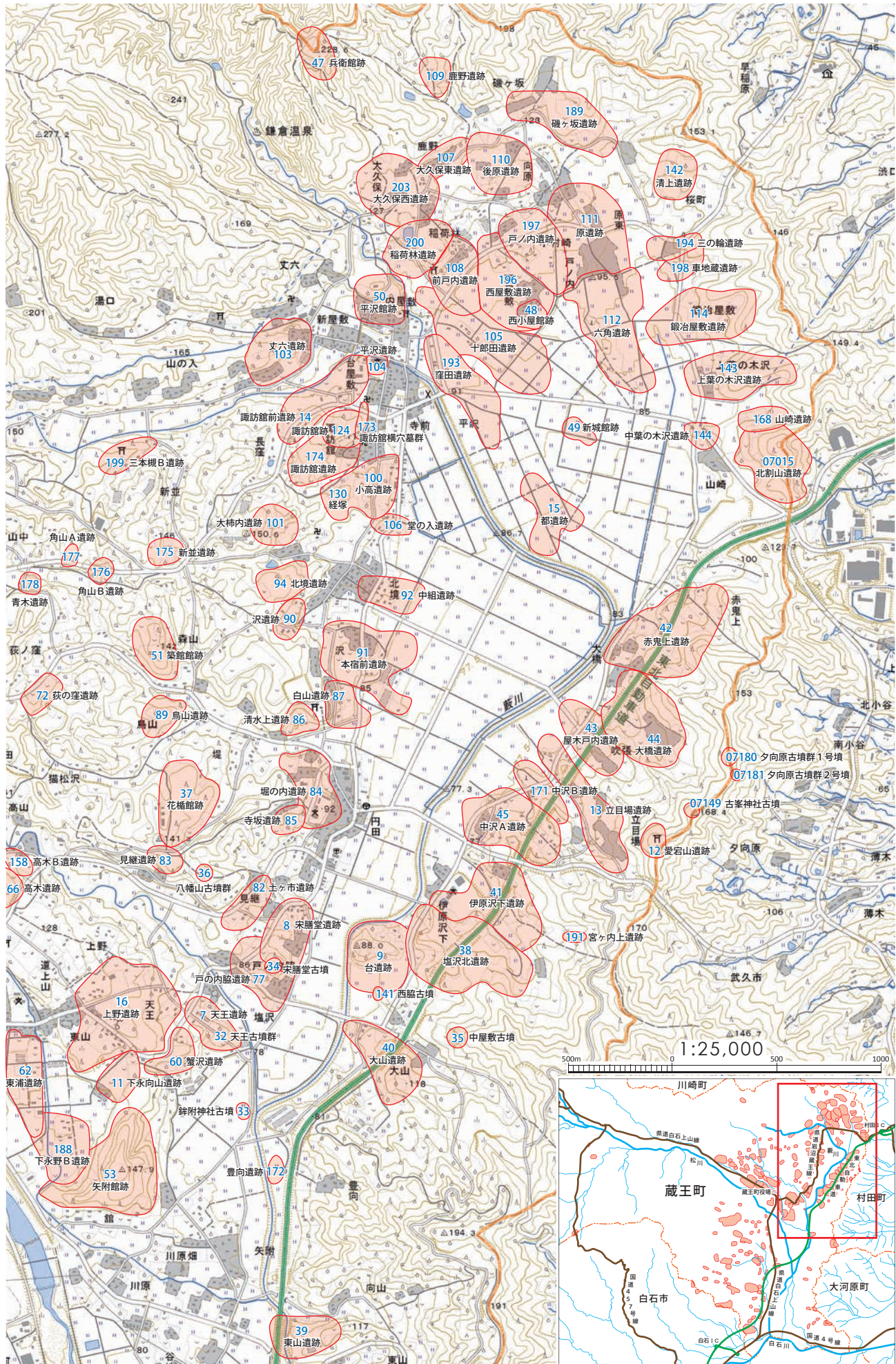
後期は円田盆地の愛宕山遺跡・天王遺跡・赤鬼上遺跡・磯ヶ坂遺跡などがあり、円田盆地の微高地から丘陵上にかけて多く分布する。

古墳時代 47か所の活動痕跡が認められる。その分布は円田盆地の丘陵・微高地上にほぼ限定され、一部が青麻山東麓の微高地上に分布する。

集落跡を見ると、前期は円田盆地の大橋遺跡・堀の内遺跡・伊原沢下遺跡・六角遺跡などがあり、丘陵尾根上に立地する。大橋遺跡では住居跡3軒が確認され、県内における塩釜式最古段階の集落跡とみられる。中期は円田盆地の中沢A遺跡・台遺跡・都遺跡・窪田遺跡などがあり、丘陵尾根・微高地上に立地する。中沢A遺跡では住居跡9軒が確認され、県内における南小泉式最古段階の集落跡とみられる。台遺跡では盛土と筏地業による水田跡が確認されている。後期は円田盆地の窪田遺跡で陶器MT15型式期の須恵器が出土しているが、明確な活動痕跡は未確認である。

高塚・横穴古墳を見ると、円田盆地の丘陵上に夕向原古墳群・古峯神社古墳・宋膳堂古墳・天王古墳群・西脇古墳・中屋敷古墳・八幡古墳、青麻山東麓の松川・白石川の合流点付近の微高地上に明神裏古墳がある。古峯神社古墳は主軸長約38m、夕向原1号墳は主軸長約57mの前方後円墳、宋膳堂古墳は直径約30mの円墳である。明神裏古墳は墳丘が残存しないが、凝灰岩板石を用いた箱式石棺が確認されている。

古代 129か所の活動痕跡が認められる。その分布は円田盆地の丘陵・微高地上に拠点的なものを含む活動痕跡が密集し、青麻山東麓から松川北岸にかけての丘陵・段丘・微高地上の広範囲には比較的小規模とみられる活動痕跡が点在する。



第13図 円田盆地の遺跡

青色数字：遺跡番号（第2表に対応）

第2表 円田盆地の遺跡一覧

番号	遺跡名	種別	時代
7	天王遺跡	散布地	縄文早・中、弥生中・後、古代
8	宋膳堂遺跡	散布地	弥生中・後、古墳、平安
9	台遺跡	散布地・水田	弥生中、古墳中・後、平安、中世・近世
11	下永向山遺跡	散布地	縄文中、弥生中・後、古代
12	愛宕山遺跡	散布地	弥生中・後、古墳前・中
13	立目場遺跡	散布地	縄文、弥生中・後、古墳
14	諏訪館前遺跡	集落・散布地	縄文晩、弥生、古墳前・中、平安
15	都遺跡	集落	縄文後、弥生中・後、古墳前～後、飛鳥～平安、中世
16	上野遺跡	散布地	縄文中、弥生中、平安
32	天王古墳群	円墳	古墳
33	鉾附神社古墳	円墳?	古墳?
34	宋膳堂古墳	方墳	古墳
35	中屋敷古墳	円墳	古墳
36	八幡山古墳群	円墳・方墳	古墳
37	花桶館跡	城館	中世
38	塩沢北遺跡	集落	弥生中・後、古墳中・後、飛鳥、平安
39	東山遺跡	集落	縄文早、平安
40	大山遺跡	集落	縄文早、弥生中、古墳前
41	伊原沢下遺跡	集落	古墳
42	赤鬼上遺跡	集落	弥生中・後、平安、中世
43	屋木戸内遺跡	散布地	弥生中、古代
44	大橋遺跡	集落	縄文後、弥生中・後、古墳前、平安
45	中沢A遺跡	散布地	縄文早、弥生中・後、古墳中・後、古代～中世
47	兵衛館跡	城館	縄文、弥生、古代、中世
48	西小屋館跡	城館	平安、中世
49	新城館跡	散布地・城館	縄文、弥生、古墳後～古代、中世
50	平沢館跡	城館	中世
51	築館館跡	城館	中世
53	矢附館跡	城館	中世
60	蟹沢遺跡	散布地	弥生中
62	東浦遺跡	散布地	縄文中・後、弥生中、古墳、古代
66	高木遺跡	散布地	縄文中
72	荻の窪遺跡	散布地	縄文晩、弥生
77	戸の内脇遺跡	散布地	縄文早・中、弥生中、古墳、平安、中世
82	土ヶ市遺跡	散布地	弥生、古代
83	見継遺跡	散布地	縄文
84	堀の内遺跡	集落・散布地	縄文、弥生中・後、古墳前～後、奈良
85	寺坂遺跡	散布地	平安
86	清水上遺跡	散布地	弥生、平安
87	白山遺跡	集落・散布地	弥生、古墳中
89	鳥山遺跡	散布地	縄文中、古代
90	沢遺跡	散布地	古代
91	本宿前遺跡	集落・散布地	縄文早、弥生中、平安、中世
92	中組遺跡	集落・散布地	縄文早・中、弥生、平安、中世、近世

番号	遺跡名	種別	時代
94	北境遺跡	散布地	縄文早、弥生後、古代
100	小高遺跡	散布地	縄文、弥生、古代
101	大柿内遺跡	散布地	弥生
103	丈六遺跡	散布地	古代
104	平沢遺跡	散布地	古代
105	十郎田遺跡	散布地	縄文、古墳中～後、飛鳥～平安、中世、近世
106	堂の入遺跡	散布地	弥生、古代、中世
107	大久保東遺跡	散布地	古墳、奈良、平安
108	前戸内遺跡	散布地	旧石器、縄文後、弥生中・後、古墳中、奈良、平安、中世、近世
109	鹿野遺跡	散布地	古代
110	後原遺跡	散布地	縄文、古墳、奈良、平安
111	原遺跡	散布地	古代
112	六角遺跡	散布地	縄文早、弥生中・後、古墳前・後、奈良、平安、中世、近世
114	鍛冶屋敷遺跡	散布地	縄文中～晩、古代、近世
124	諏訪館跡	城館	中世
130	経塚	経塚	中世
141	西脇古墳	円墳	古墳
142	清上遺跡	散布地	古代
143	上葉の木沢遺跡	散布地	縄文、古墳、古代
144	中葉の木沢遺跡	散布地	縄文、弥生、古代
158	高木B遺跡	散布地	縄文
168	山崎遺跡	散布地	縄文早
171	中沢B遺跡	散布地	弥生中、古墳、古代
172	豊向遺跡	散布地	古墳
173	諏訪館横穴墓群	横穴墓?	古墳
174	諏訪館遺跡	散布地	弥生、古墳
175	新並遺跡	散布地	縄文中
176	角山B遺跡	散布地	縄文
177	角山A遺跡	散布地	古代
178	青木遺跡	散布地	平安
188	下永野B遺跡	散布地	奈良、平安
189	磯ヶ坂遺跡	散布地	縄文、弥生、奈良、平安、近世
191	宮ヶ内上遺跡	製鉄?	近世
193	窪田遺跡	集落・散布地	縄文、弥生後、古墳中・後、飛鳥～平安、中世
194	三の輪遺跡	散布地	古墳、奈良、平安
196	西屋敷遺跡	集落	縄文、飛鳥～平安、中世、近世
197	戸ノ内遺跡	集落	縄文、弥生、飛鳥～平安、中世
198	車地蔵遺跡	散布地	古代、中世、近世
199	三本槻B遺跡	散布地	縄文、平安
200	稲荷林遺跡	散布地	縄文早、古墳～平安
203	大久保西遺跡	散布地	古墳、奈良、平安
07015	北割山遺跡	散布地	縄文、弥生
07149	古峯神社古墳	前方後円墳	古墳
07180	夕向原1号墳	前方後円墳	古墳
07181	夕向原2号墳	円墳	古墳

※番号は宮城県遺跡台帳登録番号のうち、蔵王町の市町村番号05を省略した下三桁を記載している(第13図の青色数字に対応)。

※07で始まる五桁の番号は村田町登録分である。

飛鳥時代は塩沢北遺跡・十郎田遺跡・窪田遺跡・諏訪館横穴墓群などがあり、円田盆地の丘陵・微高地上に分布する。塩沢北遺跡では住居跡3軒が確認され、陶器TK217型式期の須恵器が出土している。十郎田遺跡では、材木堀による大規模な長方形区画施設と住居跡27軒、建物跡5棟などが確認され、出土した土器群には福島～関東地方との関係を窺わせるものが含まれている。諏訪館横穴墓群は所在を確認できない。

奈良時代は堀の内遺跡・六角遺跡・都遺跡・窪田遺跡・戸ノ内遺跡・前戸内遺跡などがあり、円田盆地の丘陵・微高地上に分布する。六角遺跡では大溝による区画施設と住居跡などが確認されている。住居跡には短い煙道をもつカマドを付設するものがみられ、出土した土器群は福島～関東地方との関係を窺わせるものが主体的である。こうした土器群は円田盆地の複数の遺跡で確認され、移民を伴った外来勢力の移入を強く示唆している。都遺跡では材木堀・大溝による区画施設と建物跡などが確認され、多賀城創建期とみられる軒平瓦が採集されていることから官衙関連施設の可能性が考えられている。これらの活動痕跡の多くは奈良時代前半～中頃に位置づけられ、奈良時代後半の明確な活動痕跡は未確認である。

飛鳥～奈良時代の活動痕跡が円田盆地にほぼ限定されるのに対し、平安時代の活動痕跡は青麻山東麓から松川北岸にかけての地域を含めた広範囲に分布する。円田盆地では東山遺跡・十郎田遺跡・前戸内遺跡・赤鬼上遺跡・六角遺跡・磯ヶ坂遺跡・戸ノ内脇遺跡、松川北岸では西浦B遺跡、青麻山東麓では観音堂山遺跡・青竹遺跡・二屋敷遺跡・下原田遺跡などがある。東山遺跡・西浦B遺跡・観音堂山遺跡・赤鬼上遺跡などでは、燃焼部から煙道までの全体を河原石組みで構築したカマドを付設する住居跡が確認されている。東山遺跡では土器溜遺構が確認され、「万田」などの墨書土器が多量に出土している。前戸内遺跡では、住居跡14軒、建物跡21棟などで構成される拠点的な集落跡が確認されている。集落内には建物跡が逆L字形に配置される一角があり、郷長・百姓クラスの豪族居宅と考えられている。「苜田」「草手」などの墨書土器が出土している。これらの活動痕跡の多くは平安時代前葉に位置づけられ、平安時代中葉以降の明確な活動痕跡は未確認である。なお、平安時代末葉には円田盆地の丘陵上に「丈六阿弥陀如来坐像」（県指定文化財）を安置した阿弥陀堂が建立されたとみられ、現存する「平沢弥陀の杉」（県指定天然記念物）は阿弥陀堂の参道杉並木として植えられたものと伝えられている。

中世 37か所の活動痕跡が確認されている。このうち15か所は城館跡で、青麻山東麓の松川に面した丘陵上、松川北岸の丘陵上、円田盆地西縁の丘陵上に分布する。また、城館跡に隣接する段丘・微高地上で屋敷跡が確認されているが、集落跡は未確認である。

城館跡は、青麻山東麓の宮城館跡・山家館跡・館の山城跡・青竹遺跡・曲竹小屋館跡、松川北岸の棚村館跡、円田盆地の矢附館跡・花楯館跡・築館館跡・兵衛館跡・西小屋館跡などがある。これらの機能時期・内容については詳らかでないが、概ね2km前後の間隔で丘陵突端部を繋ぐように分布することから、相互に関連を持ちながら機能したとみられる。兵衛館跡は円田盆地最奥部にあり、丘陵頂部の平場を画する土塁・空堀が良好に残存する。西小屋館跡は円田盆地北部の微高地上にあり、土塁と水堀を伴う方形館である。

城館跡以外では、青麻山東麓の持長地遺跡・二屋敷遺跡、円田盆地の西屋敷遺跡・十郎田遺跡・前戸内遺跡・六角遺跡・戸の内脇遺跡・本宿前遺跡・中組遺跡・堂の入遺跡・窪田遺跡・戸ノ内遺跡などがある。持長地遺跡は山家館跡、西屋敷遺跡は西小屋館跡に隣接し、武士階級とみられる屋敷跡が確認されている。十郎田遺跡では屋敷跡の一角で確認された井戸跡から多量の木製挽物荒型が出土し、屋敷内で木器生産が行われていたことが窺われる。

近世 遺跡登録上では11か所の活動痕跡が確認されている。円田盆地の車地蔵遺跡・鍛冶屋敷遺跡では、近世前半の屋敷跡、六角遺跡・磯ヶ坂遺跡・前戸内遺跡では近世中頃～後半の墓場が確認されている。宮ヶ内上遺跡は製鉄遺跡とみられる。松川北岸の岩崎山金窟址では、江戸初期には仙台藩主伊達家の命により採掘されていた。伊達家家臣の高野家が拝領した平沢要害は遺構が現存しないが、「平沢要害屋敷絵図」には本丸・二の丸・水堀と、南側に屈折する大手が見え、小規模ながらも近世城郭的な構造が窺える。

現存する近世の建造物としては、青麻山東麓の我妻家住宅（江戸中期、国指定文化財）、刈田嶺神社本殿（江戸中期、県指定文化財）、円田盆地の奥平家住宅（江戸後期、町指定文化財）、日吉神社本殿（江戸中期）などがある。日吉神社は高野家の領地替えの時に伊達郡より遷座され、刈田嶺神社は刈田郡総鎮守として白石城主片倉家の保護を受けた。また、街道に関わるものとして青麻山東麓の笹谷街道に曲竹一里塚があり、四方峠付近には古道の一部が保存されている。

このほか、近代遺構として遠刈田製鉄所高炉跡があり、明治時代後期の高炉の基礎部分が現存している。

第3章 基本層序

第1節 基本層序

各遺跡・調査区ごとの立地条件により土層の堆積状況に違いが見られるが、基本層序はⅠ～Ⅷ層に大別される(第3表)。Ⅰ層は表土ないしは現耕作土で、層厚は15~25cm程度である。Ⅱ層は旧表土ないしは旧耕作土で、層厚は10~30cm程度である。近世~近代の陶磁器片などを含む。Ⅲ層はクロボクあるいはノボクと称される黒色火山灰土で、層厚は20~60cm程度である。丘陵斜面部から沢地に堆積し、斜面下部では複数の再堆積層を形成する。Ⅳ層はⅢ層下部とⅤ層上部に形成された漸移層で、層厚は20cm程度である。Ⅴ層は黄褐色ロームで、層厚は30~40cm程度、Ⅵ層は白色粘土の水成堆積物で、層厚は30~50cm程度である。Ⅶ層は猿岩と通称される青灰色凝灰質シルトで、層厚は20~40cm程度である。川崎スコリア(板垣ほか1981)に相当するとみられる。Ⅷ層は砂礫を含む白色粘土層で、層厚は20cm以上である。

調査区内ですべての層位を確認した地点はなく、丘陵部ではⅢ・Ⅳ層が流出・削平により消失している。

遺構はⅢ層上面およびⅣ~Ⅵ層の削平面で確認し

第3表 基本層序

層名	土性	性格	層厚(cm)	備考
Ⅰ層	黒褐色シルト	表土・現耕作土	15~25	
Ⅱ層	黒色シルト	旧表土・旧耕作土	10~30	近世~近代の陶磁器片を含む
Ⅲ層	黒色シルト	黒色火山灰	20~60	遺構掘り込み面
Ⅳ層	暗褐色シルト	漸移層	20	
Ⅴ層	黄褐色粘質シルト	黄褐色ローム	30~40	
Ⅵ層	白色粘土	水成堆積物	30~50	
Ⅶ層	青灰色凝灰質シルト	スコリア堆積物	20~40	川崎スコリア(Za-Kw)
Ⅷ層	白色粘土	水成堆積物	20~	砂礫を含む

た。大半の遺構の確認面はⅣ・Ⅴ層の削平面である。調査区壁面などで本来の遺構の掘り込み面が確認できたものはいずれもⅢ層上面である。

第2節 遺構の確認状況

各遺跡の調査前の現況は大半が水田で、一部が畑地であった。現耕作土・旧耕作土下に旧来の地形を良好に保存している地点は少なく、漸移層以下の土層の削平面が露出する状況であった。

削平による地形改変の影響が著しいのは都遺跡・新城館跡・十郎田遺跡・前戸内遺跡南部・西屋敷遺跡北部・戸ノ内遺跡東部・六角遺跡西部で、これらの遺跡では旧耕作土下が黄褐色ロームまたは白色粘土層の削平面となっている。より下位の白色粘土層まで削平が及ぶ範囲では、周囲の遺構分布から見て削平により遺構が消失したと考えられる地点が多く、過去の造成による遺構・遺物の損失の大きさを示している。

都遺跡の立地する丘陵は明治40年測量図(第9図)や昭和31年の航空写真(写真1)などからも確認されるように、畑地として利用された小高い残丘状の地形であったが、明治中頃と昭和37・38年の藪川築堤

工事の土取り場となり、大規模な削平を受けた。当時の土取り工事では「土を掘るほどにたくさんの土器や石、大きな瓦などがザク、ザクと出た」との話も残されているが、学術調査に至らなかったのは大変残念であった。採集された遺物には古代の瓦も含まれており、古代荏田郡に関連する遺跡として注目されてきた。遺跡はほぼ壊滅したものと見られていたが、県営ほ場整備事業の計画を受けて先行して平成2年度に県文化財保護課と町教育委員会が実施した小規模な遺構確認調査(宮城県教育委員会1991)で丘陵辺縁部に遺構が残存していることが判明した。

六角遺跡では遺跡範囲中央西部の共同墓地が小高く残り、現在の丘陵平坦面がやはり耕地整理による造成で形成されていることを窺わせる。なお、遺跡の立地する舌状丘陵の尾根筋は西寄りにあり、東斜面がなだらかに傾斜しながら盆底面と接しているのに対して、

西斜面は急落しており、尾根筋周辺では川崎スコリア層が露出している箇所も見られた。これについては近代以降の造成によるものとは見られず、北西側の西屋敷遺跡と戸ノ内遺跡の間で確認した埋没谷地形を流れた小河川が六角遺跡の立地する舌状小丘陵の西側を開析した結果と考えられる。同様の状況は磯ヶ坂遺跡南東部に張り出す舌状小丘陵でも確認され、こちらについては南側を流れる現在の雁柄川による開析作用によるものと考えられる。

このような条件下において、都遺跡では丘陵辺縁部に残存する材木堀や溝跡などの区画施設や住居跡、建物跡などの遺構を確認した。丘陵内部の削平は著しく、遺構の残存状況は壊滅的と言って良い(写真2)。しかし、遺構確認調査で大型の建物跡などが確認された地点もあり、今後も発掘調査によって本遺跡に関する重要な情報が得られる可能性は依然残されている。



写真1 昭和31年の円田盆地

盆地中央に逆く字形に白く見える部分が畑地として利用されていた都遺跡の丘陵部。藪川の堤防工事が下流側から都遺跡手前の屈曲部まで進行している。

もとより低平な微高地状の地形あるいはなだらかな緩斜面で、耕地整理による改変の度合いが比較的小さかった窪田遺跡・前戸内遺跡・西屋敷遺跡南部・六角遺跡東部・車地蔵遺跡・鍛冶屋敷遺跡では、一定の広がりを持つ濃密な遺構の分布を確認した。十郎田遺跡では、削平・切土による遺構の消失範囲がモザイク状に見られたものの(写真3)、遺跡全体に広範囲に分布する住居跡や建物跡などの遺構群のほか、材木堀と大溝による大規模な区画施設を確認した。

以上、各遺跡の遺構の確認状況について概略を述べた。発掘調査範囲は遺跡全体のごく一部であることは当然として、発掘調査範囲であっても上述のように後世の地形改変によって遺構の消失域が生じている。このため、各遺跡の遺構の分布状況から遺跡の全体像を復元するにあたっては、遺構の消失域と本来の遺構分布上の空白域とを区別して考える必要がある。



写真2 都遺跡の遺構確認状況

丘陵辺縁部(写真手前)には黒色土の堆積が見られ竪穴住居跡などが残存するが、丘陵頂部(写真奥)では過去の耕地整理や土取りによる削平がローム層まで及んでいる。



写真3 十郎田遺跡の遺構確認状況

過去の耕地整理によって階段状に造成され、白色粘土層まで削平が及んでいる。辛うじて削平を免れた丘陵頂部(写真左手前)では竪穴住居跡などが濃密に分布する。

第4章 調査の成果

第1節 都遺跡

(1) 遺構と遺物の分布

平成15年度の調査区は遺跡範囲北西部に南北方向のA区、中央～南部を横断するB～D区を設定した。また、平成13年度の遺構確認調査トレンチは遺跡範囲の全域を対象に設定されている。この結果、遺跡範囲外周の各調査区・トレンチで湿地性堆積土を確認し、削平された丘陵部の旧地形が把握できた。遺構は削平を免れた丘陵辺縁部の落ち際に多く残存し、B・C区中央部など丘陵頂部だった部分では著しい削平により遺構面が消失していた。ただし、確認調査トレンチでは丘陵内部でも散発的に遺構の分布が捉えられ、旧地

形の起伏と削平の度合いによって、遺構の残存部と削平部がモザイク状に分布することが把握された。

遺構は本調査区で竪穴住居跡4軒、材木堀跡2条、溝跡9条、井戸跡3基、落とし穴1基、土坑、柱穴などを確認し、確認調査トレンチでは竪穴住居跡、掘立柱建物跡、材木堀跡などの分布を確認した(第14図)。

遺物は土師器、須恵器、瓦などが出土し、土師器は南小泉式、栗圀式、表杉ノ入式(ロクロ土師器)がある。

遺構・遺物の主体は古墳時代中期(5世紀中頃)、飛鳥時代～奈良時代前半(7世紀後半～8世紀前半)である。

(2) 各時期の様相

縄文時代 落とし穴1基(SK8)がある。遺物は出土していないが、弥生時代中期以降には遺物が散漫に分布し生産および生活の場となっていたことが窺われるので、それ以前に狩猟場として利用されていたことを示すものと考えられる。

弥生時代中期～後期 弥生土器(円田式・天王山式)が出土している。円田式の土器片には籾殻圧痕の見られるものがある。遺構は確認していないが、丘陵部に生活拠点を持ち、低地部で生産活動を営んでいた可能性が考えられる。

古墳時代中期(5世紀中頃) 竪穴住居跡2軒(SI2・3)、溝跡2条(SD6・7)、土坑1基(SK9)があり、

ほかに確認調査トレンチでも住居跡数軒が確認されている(注1)。南小泉式土師器、石製模造品などが出土しており、SI2住居跡では良好な一括資料を伴う(写真5)。住居跡は広範囲に分布し、比較的まとまった集落が営まれていた可能性を考えて良い。

飛鳥～奈良時代前半(7世紀後半～8世紀前半)

7世紀後半の竪穴住居跡2軒(SI1a・b)、7世紀後半～8世紀初頭の材木堀跡2条(SA1・2)、溝跡4条(SD2・3・5・12)、土坑1基(SK11)などがある(注2)。材木堀は丘陵辺縁部にあり、遺跡東側ではSA1・2堀跡が接続して不整形の区画を形成していたと考えられる。また、SA2堀跡が同位置でSD3溝跡に造り替えられていることから、SD2溝跡もSA1堀跡に後

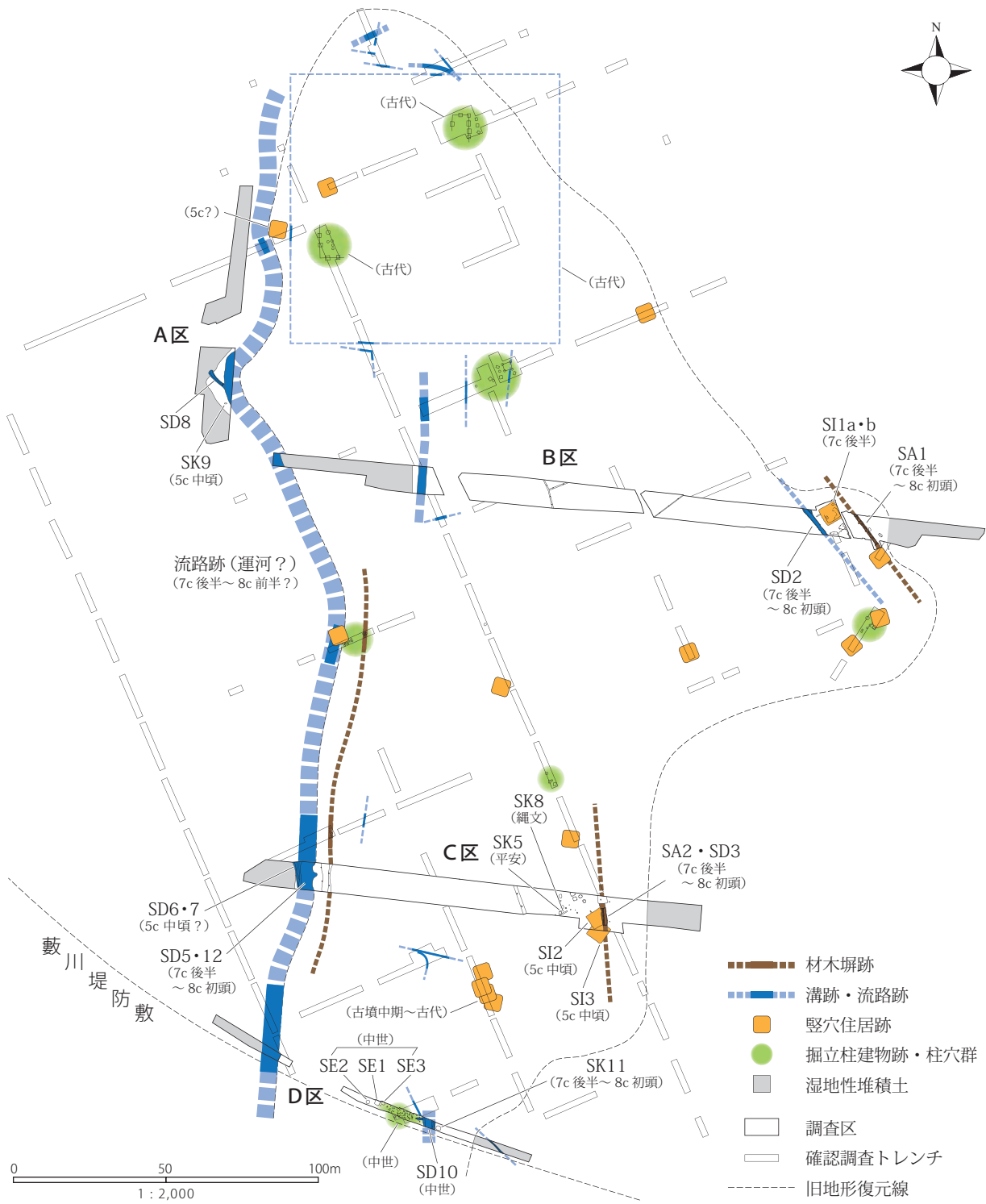


写真4 都遺跡 SI2 住居跡 (5世紀中頃)

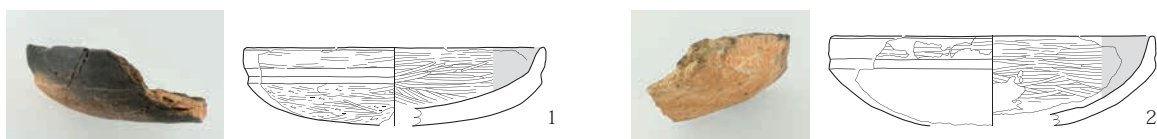


写真5 都遺跡 SI2 住居跡出土遺物 (同左)

注1：SI3住居跡・SK9土坑および確認調査トレンチの住居跡の一部は一次報告書(町3集)で古墳時代前期～中期の年代観で扱っていたが、本遺跡では明確な塩釜式期の遺物が見られないことからとりあえずここに一括した。



第14図 都遺跡 遺構配置図



S=1/3

No.	遺構名	層位	種類	器種	器面調整・特徴	法量 (cm)			残存	登録
						口径	底径	器高		
1	SI1b	床面直上	土師器	坏	外面：(口) ヨコナデ・(底) ヘラケズリ→(口~底) ミガキ 内面：ミガキ→黒色処理	(12.0)	-	(3.1)	1/5	M043
2	表採	-	土師器	坏	外面：(口) ミガキ (底) ケズリ→ミガキ 内面：ミガキ→黒色処理 底面：被熱痕跡	(12.9)	-	(3.6)	1/6	NR-1

第15図 都遺跡出土土器 (7世紀後半、関東系土師器)

1：町3集掲載資料を再実測

出し、区画施設は材木堀から溝に置き換わったと考えられる。SD5・12 溝跡は西側の丘陵辺縁部に沿って南北に流れる流路跡で、運河の可能性が考えられる。

このほか、確認調査トレンチでは遺跡南部に古代の竪穴住居跡、遺跡北部に大型の方形柱穴（一辺 1.1～1.3m）を持つ掘立柱建物跡（柱間寸法約 2.4m）の分布が見られる。北部の 2 か所で確認された大型建物はいずれも概ね正方位で、これらを取り囲む正方位の方形溝区画（一辺約 88m）が推定できる。

遺物は少量だが、住居跡・溝跡などから栗罎式土師器（7 世紀後半～8 世紀初頭）、瓦（7 世紀末～8 世紀前半）、石製紡錘車などが出土している。また、昭和 30 年代後半に採集された資料（写真 6、「蔵王町史資料編 I」所収）に土師器、須恵器、瓦があり、これらも今回出土した遺物の年代観と一致する。

SI1b 住居跡出土土器のうち、有段丸底で口縁部が短く直立する内黒土師器杯（第 15 図 1）は会津盆地の福島県喜多方市内屋敷遺跡（塩川町教育委員会 2004）などに類例が見られ、関東地方東部の鬼高系土師器杯の系譜にある関東系土師器と考えられる（菅

原 2004）。同様の資料は採集資料（第 15 図 2）にも見られるほか、窪田遺跡（第 21 図 2）・十郎田遺跡（第 24 図 F）でも出土している。

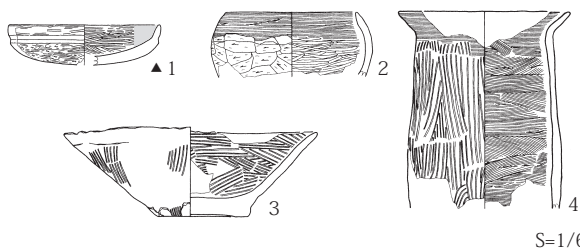
瓦は発掘・採集資料を合わせて軒平瓦 2 点、平瓦 11 点、丸瓦 1 点がある（写真 7）。軒平瓦は瓦当面に手描き三重弧文を施し、凸面に格子叩き目を持つもの



写真 6 都遺跡出土土器（7 世紀後半～8 世紀初頭、すべて採集品）



写真 7 都遺跡出土瓦（7 世紀末～8 世紀前半、採集品を含む）



S=1/6

1・3：SI1b 住居跡 2・4：SA1 材木堀跡抜き取り溝 ▲ 関東系土師器

第 16 図 都遺跡出土土器（7 世紀後半～8 世紀初頭）



写真 8 都遺跡 SA1 材木堀跡（同右） 写真 9 都遺跡 SD2 溝跡（同右）



写真 10 都遺跡 SD5・6・7・12 溝跡（7 世紀後半～8 世紀初頭）

注 2：SI1 住居跡・SD5 溝跡については一次報告書（町 3 集）で 7 世紀前半に位置づけていたが、遺物の再検討の結果 SI1 住居跡出土土器を 7 世紀後半、SD5 溝跡出土土器を 7 世紀末～8 世紀初頭と修正し、遺構の年代観もこれに従う。SD12 溝跡については細砂を含むクロスラミナ状の堆積が観察されたことから一次報告で河川跡としていたが、自然流路であればより低地側に位置することが自然であり、逆台形に近い横断面形も観察されていることから人工的に開削された水路あるいは運河の可能性も含めて検討する必要がある。

と、瓦当面に手描き二重弧文を施し、凸面に柂目板による叩き目を持つものがある。後者は断面三角形の顎部を持ち、顎部の凸面に沈線による鋸歯文を施文する。各1点のみではあるが、両者は形態的特徴と製作技法を異にしており、技法的には後者が後出的である。近隣では柴田町兎田窯跡、白石市兀山窯跡・大畑遺跡で同時期の瓦が出土しているが、本遺跡の資料とは特徴が異なり、未発見の窯跡の製品と考えられる。

遺跡の性格について考えると、7世紀後半頃に造営される遺構群は材木堀・溝による区画施設および運河の可能性のある流路を伴っており、一般的な集落と異なる性格を持つことは明らかである。区画は正方位によらず地形に合わせた不整形を呈する。内部施設については断片的な残存状況ながら住居主体のように窺われ、6世紀に国造が置かれなかった阿武隈川河口以北の地域で城柵に先行あるいは並行して造営された囲郭



写真 11 都遺跡北部の掘立柱建物跡（古代、県 188 集）

集落（村田 2000）と考えられる。

一方、遺跡北部の正方位の溝区画と建物群については未精査のため遺構の年代観を押し量ることが難しいが、7世紀末～8世紀前半の瓦を伴った遺構群の可能性のあるものと考えている。なお、丘陵部の削平により礎石等の存否は不明であるが、本遺跡に関わる江戸期の記録に礎石についての記述は見られない（注3）。後世の耕作や造成によってどの程度の遺構・遺物が消失したか定かでないが、発掘調査や採集で得られた瓦が十数点に止まることからすれば、掘立柱建物の一部に瓦が葺かれた可能性も考えられようか。その性格については官衙あるいは寺院の可能性が考えられるが、囲郭集落に後続して出現するものとするならば官衙の可能性が濃厚と言えるのではないだろうか。

平安時代（9世紀） 土坑1基（SK5）があるが、性格は不明である。遺物は表土・土坑からロクロ土師器などが出土しており、「大寺」・「造舎」などの墨書土器も見られる。あるいは前述の正方位の溝区画や建物群との関連も想起されるが、現時点においてその検討材料はあまりに少ない。

中世前半（13世紀中頃～14世紀） 遺跡南端部に溝跡1条（SD10）、井戸跡3基（SE1～3）、小柱穴群が分布する。小規模な屋敷跡とも考えられるが、調査区が狭小なため性格は不明である。遺物は表土・溝跡から中世陶器20点、青磁1点が出土している。中世陶器は在地産・常滑産が見られる。

（3）まとめ

盆地中央部に張り出す残丘状の微高地上で、縄文時代から中世にかけての活動痕跡を確認した。主体となるのは飛鳥～奈良時代前半（7世紀後半～8世紀前半）の活動である。なお、丘陵部は後世の改変が著しく、遺構・遺物の残存状況は良好でない。

縄文時代のある時期には狩猟場、弥生時代中期以降には生活および低湿地を利用した稲作による生産の場として利用されていたと考えられる。古墳時代前期の活動痕跡は不明瞭であるが、中期（5世紀中頃）には比較的まとまった集落が営まれたと考えられる。後期（6世紀～7世紀前半）は空白期である。

飛鳥時代（7世紀後半～8世紀初頭）には不整形の区画施設を伴う囲郭集落が造営された。区画施設は材

木堀から溝への造り替えが見られ、丘陵西縁には運河の可能性のある流路を伴う。内部施設の状況は詳らかでないが、住居主体のように窺われる。また、遺跡北部には正方位の溝区画を伴う掘立柱建物群が造営されており、周辺の出土遺物などから飛鳥～奈良時代前半（7世紀末～8世紀前半）の瓦を用いた官衙（推定「柴田郡衙」）の可能性が考えられる。

奈良時代後半（8世紀後半）は空白期となる。平安時代前葉（9世紀）には不明瞭ながら活動痕跡が見られ、「大寺」・「造舎」の墨書土器が出土している。平安時代後葉以降は空白期となり、中世前半には遺跡南部に小規模な屋敷が営まれた可能性があるが、概ね畑作・稲作による生産の場となったと推定される。

注3：「人皇七十代後冷泉天皇第二宮の幽閉せられし地なり。志津摩信濃守の家人、村上左近の諫により宮殿を造り皇子の居処と定め呼んで都と云ふ。高野倫兼日記曰、予が館の南二十三丁、都と呼ぶ所あり、古昔皇子の居給ふ所と云ふ。今は畑なり。干今瓦器、瀬戸物のツボ類ありて、農夫等掘出すこと度々なり」とある（昭和3年「刈田郡誌」）。高野倫兼日記は平沢領主高野家19代倫兼による江戸中期の記録。

第2節 新城館跡

(1) 遺構と遺物の分布

平成15年度の調査区は遺跡範囲中央部を東西方向に横断するA区、さらに西側にB区を設定した。また、平成13年度の遺構確認調査トレンチは遺跡範囲の全域を対象に設定されている。この結果、遺跡範囲外周の各調査区・トレンチで湿地性堆積土を確認し、削平された丘陵部の旧地形が把握できた。遺構は削平を免れた丘陵南東側の落ち際に多く残存し、北西側の大部

分は著しい削平により遺構面が消失していた。

遺構は本調査区で掘立柱建物跡7棟、溝跡1条、落とし穴2基、土坑、柱穴などを確認し、確認調査トレンチでは掘立柱建物跡、溝跡、井戸跡などの分布を確認した(第18図、注4)。

遺物は土師器、須恵器などが少量出土し、土師器は南小泉式、栗罌式、表杉ノ入式(ロクロ土師器)がある。

遺構・遺物の主体は概ね古代(7~9世紀)である。

(2) 各時期の様相

縄文時代 落とし穴2基(SK1・3)がある。都遺跡、窪田遺跡などと同様に狩猟場として利用されていたことを示すものと考えられる。

弥生~古墳時代 ごく少量の弥生土器・南小泉式土師器が出土しているが、遺構は確認していない。

古代(7~9世紀) 掘立柱建物跡5棟、溝跡1条(SD1)があり、ほかに確認調査トレンチでも建物跡数軒が確認されている。建物跡はいずれも調査区外へ展開しているが、2~4間の規模が確認できる。柱間寸法は最大2.5mである。柱穴掘方は方形基調で大型のものは

長辺で1.5mに及ぶものがある。溝跡は幅4.5mで断面が逆台形を呈する。幅3.7mの土橋状部分を伴う。

遺物はこれらの遺構や表土からごく少量の栗罌式・国分寺下層式土師器(7世紀後半~8世紀前半)、ロクロ土師器(9世紀)、須恵器などが出土している(第17図)。

遺構配置から見ると建物跡は10度前後、溝跡は約24度東偏し、時期差が想定される。遺物との関係で見ると建物跡は7世紀後半~8世紀前半、溝跡は9世紀と推定できるが、確定的ではなく、具体的な年代や性格については不明である。

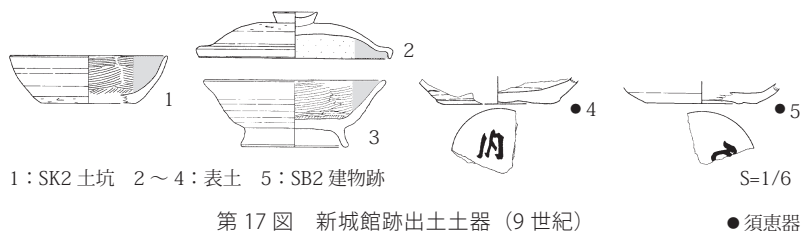
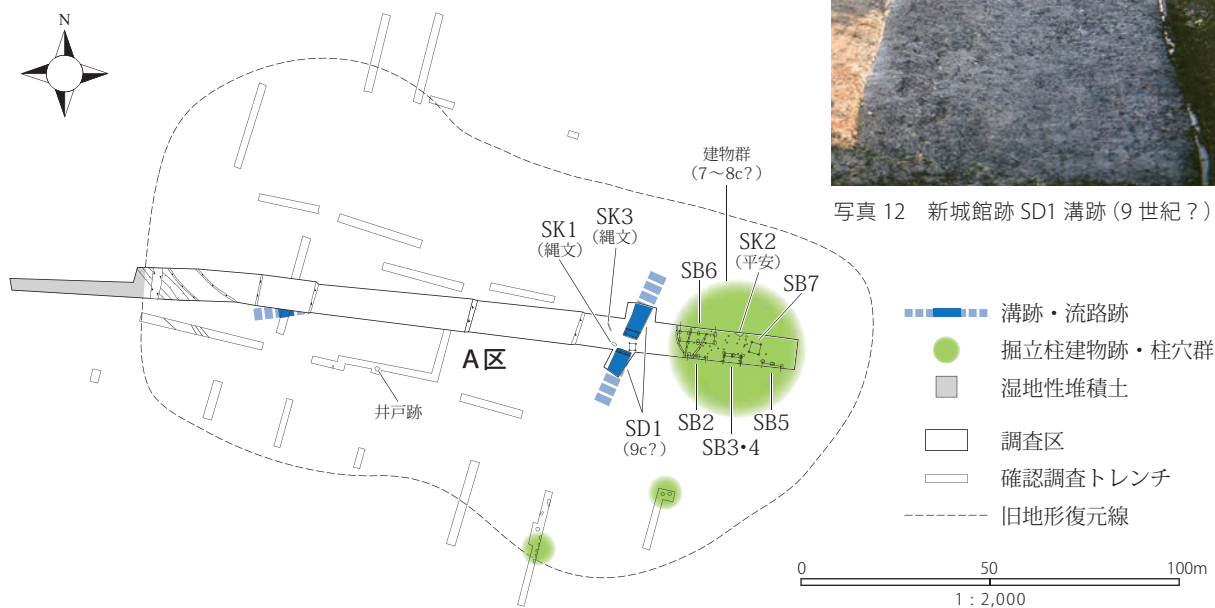


写真12 新城館跡SD1溝跡(9世紀?)



第18図 新城館跡遺構配置図



写真13 新城館跡 SB2・SB6 掘立柱建物跡 (7～8世紀?)



写真14 新城館跡 SB2 掘立柱建物跡 (同左)

(3) まとめ

盆地中央部に張り出す残丘状の微高地上で、縄文時代から古代にかけての活動痕跡を確認した。主体となるのは古代の活動である。なお、丘陵部は後世の改変が著しく、遺構・遺物の残存状況は良好でない。

縄文時代のある時期には狩猟場として利用され、不明瞭ながら弥生時代・古墳時代中期の遺物散布も見られる。古代には掘立柱建物群と溝跡が造営されているが、両者には時期差があると見られる。それぞれの性

格については明らかにできなかったが、建物群については周辺の都遺跡・窪田遺跡で確認されて律令系施設と推定されるものと時期的に並行する可能性があり、関連性があるものと考えられる。

なお、本遺跡については江戸期の記録や昭和初期に記録された伝承(注5)などから古代の散布地および中世の館跡として周知されてきたが、これに関連する遺構・遺物は確認されなかった。



十郎田遺跡の発掘調査



竪穴住居跡の調査(窪田遺跡)

注4：一次報告書(町3集)で性格不明としたSK1土坑は平面形が小判形、横断面形が箱形を呈し、自然堆積により埋没している。こうした特徴の土坑は原遺跡(町4集)で落とし穴としての機能を推定しており、これに従う。

注5：注3の記述に続けて「高野倫兼日記曰、(中略)此処より辰巳に當りて新城と云ふ所あり。其邊土居立廻り此の處を館の内と云ふなり」とあり、「新城館址 南新城にあり。傳へ云ふ、後冷泉天皇第二の皇子の宮潜謀顯れ奥羽へ配流の身となり、探題志津摩信濃の守警衛申上ぐる為にこの城を造るものなり」、「鐘撞田 新城館の傍に鐘撞田と稱する所あり。往昔藤原秀衡新城の傍に鐘樓を設け事変ある毎に之を撞かしめたりと云ふ。又他説に曰く、秀衡の代、白河より平泉に至る間に於て信号の用に供したるなり」とある(昭和3年「刈田郡誌」)。

第3節 窪田遺跡

(1) 遺構と遺物の分布

平成15年度の調査区は遺跡範囲南部を東西方向に横断するA・B区を設定し、平成20年度の調査区は北部～中央部を東西方向に横断する1・3・4区、中央部を南北方向に縦断する2区を設定した。また、平成13・14年度の遺構確認調査トレンチは遺跡範囲の全域を対象に設定されている。この結果、遺跡範囲外周の各調査区・トレンチなどで湿地性堆積土を確認し、削平された丘陵部の旧地形および微地形が把握できた。丘陵部は全般に削平の影響が見られるものの、広範囲に遺構の分布が確認された。

遺構は本調査区で竪穴住居跡26軒、竪穴状遺構1

基、掘立柱建物跡28棟、柱列跡8条、井戸跡10基、溝跡23条、水溜状遺構1基、焼成遺構1基、落とし穴2基、土坑、柱穴、河川跡などを確認し、確認調査トレンチでも同様の遺構の広がりを確認している(第20図)。

遺物は土師器、須恵器、赤焼土器、中世陶器、木製品、漆器などが出土し、土師器は引田式、栗罎式、表杉ノ入式(ロクロ土師器)がある。

遺構・遺物の主体は古墳時代中期(5世紀中頃～後半)、飛鳥～奈良時代前半(7世紀後半～8世紀中頃)、平安時代初頭(8世紀末～9世紀初頭)、中世前半(13世紀中頃)である。

(2) 各時期の様相

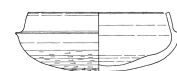
縄文時代 遺跡北部に落とし穴2基('08-SK115・234)があり、確認調査トレンチでも2基を確認している。また、遺跡中央部の確認調査トレンチで竪穴住居跡などを確認している。住居跡は短軸3.6m、長軸10m以上の隅丸長方形を呈する。遺物は縄文土器(後期末～晩期)、石器が出土している。縄文時代のある時期には狩猟場として利用され、後期末～晩期には集落が形成されたと考えられる。

弥生時代 遺跡北西部に土坑1基('08-SK232)があるが、性格は不明である。弥生土器(円田式)の小片が出土している。

古墳時代中期(5世紀中頃～後半) 竪穴住居跡3軒('03-SI9・18、'08-SI101)があり、確認調査トレンチでも2軒を確認している。引田式土師器が出土しており、'08-SI101住居跡では良好な一括資料を伴う(写真15・16)。住居跡は広範囲に分布し、比較的まとまった集落が営まれていたと考えられる。

古墳時代後期(6世紀前半) 遺構は確認されていないが、陶邑田辺編年(田辺1966・1981)Ⅱ期MT15型式の須恵器坏(第19図)が出土している。

飛鳥～奈良時代前半(7世紀後半～8世紀中頃) 竪穴住居跡22軒、掘立柱建物跡25棟、井戸跡3基、焼成遺構1基、土坑、溝跡、水溜状遺構などがあり、遺跡全域に濃密な遺構群が分布する。住居跡と建物跡の割合はほぼ半々で、大型住居跡(8.0m四方、'08-SI3)や、やや大型の方形柱穴(長辺60～88cm)を持つ建物跡(柱間寸法2.2～2.6m、'08-SB308)も見られる。住居や建物は①正方位を基調、②やや西偏、③やや東偏、④大きく東偏するものがある。調査区の制約から建物配置の変遷は捉え難いが、7世紀後半～



S=1/6

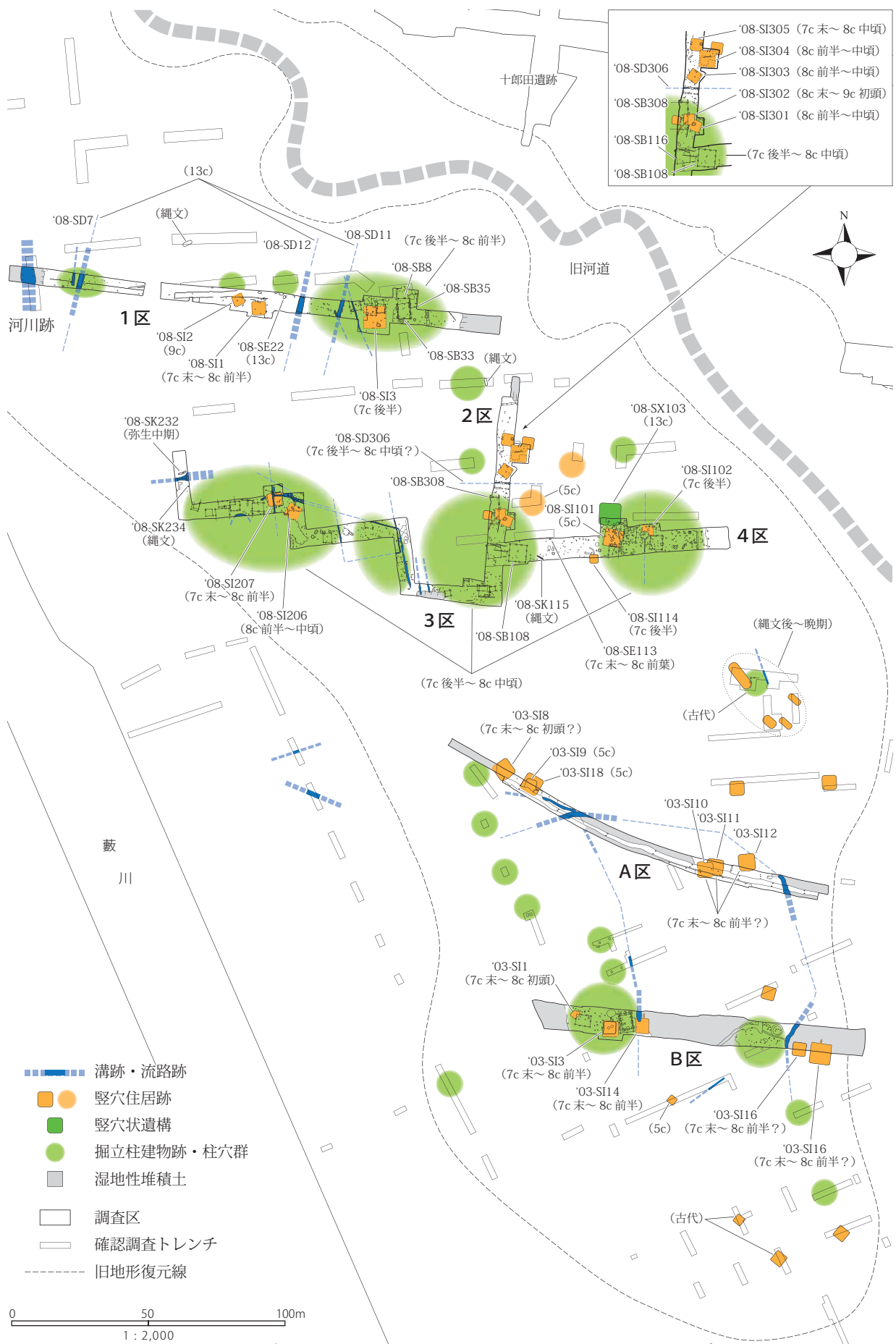
第19図 窪田遺跡出土須恵器(6世紀前半)



写真15 窪田遺跡'08-SI101住居跡(5世紀中頃～後半)



写真16 窪田遺跡'08-SI101住居跡出土土器(同左)



第20図 窪田遺跡 遺構配置図

8世紀中頃にかけて変遷していると考えられる(注6)。

遺物は住居跡・井戸跡などから栗罌式・国分寺下層式土師器、須恵器、土製紡錘車などが出土している。'08-SI1 住居跡では関東系土師器坏を主体的に含む良好な一括資料を伴う(写真20、第21図)。また、関東地方の常総型甕を祖形とする胴張形の甕が見られ、ハケメ調整を取り入れて在地化の進んだ関東系土師器

と考えられる(第21図)。

遺跡の性格については、住居に加えて掘立柱建物が多く配置されることから、一般的な集落ではなかったと考えられる。また、関東系土師器の存在からは、集落の構成員に関東系移民が含まれていたことが窺える。このことから、律令制下の移民政策や官衙施設と密接にかかわる施設が営まれていた可能性が考えられる。



写真17 窪田遺跡 '08-SI1 住居跡 (7世紀末～8世紀前半)



写真18 窪田遺跡 '08-SI1 住居跡 遺物出土状況 (同左)



写真19 窪田遺跡 '08-SI3 住居跡出土土器 (7世紀後半)



写真20 窪田遺跡 '08-SI1 住居跡出土土器 (同左上)



1:表土 2:'03-SI3 住居跡 3~6・9:'08-SI1 住居跡 7・8:'03-SI3 住居跡 10:'08-SE113 井戸跡 S=1/6

第21図 窪田遺跡出土土器 (7世紀後半～8世紀中頃、関東系土師器)

注6: 一次報告書(町11集)では住居跡の方位に基づいて建物跡を分類し、「正方位→やや西偏→やや東偏・大きく東偏」の変遷を考えた。大まかな前後関係としては大過ないと思われるが、有意な建物配置を抽出できたわけではない。同一方位の建物群が必ずしも一斉に整備されたのではなく、施設が順次拡充され、その後も個別の必要に応じて建て替えや改修が行なわれた可能性を考慮しておきたい。

平安時代初頭（8世紀末～9世紀初頭） 竪穴住居跡1軒（'08-SI302）、土坑1基があり、ほかに竪穴住居跡1基（'08-SI2）、掘立柱建物跡1棟、土坑2基、溝跡1条も平安時代と考えられる。'08-SI302住居跡は、トンネル状に掘り抜かれた住居南西隅から外延溝が伸びており、排水施設と考えられる。同様の施設は同時期の十郎田遺跡の住居跡にも見られ、住居内の湧水処理を意図したものと考えられる。遺物はロクロ土師器・須恵器などが出土している。

中世前半（13世紀中頃） 遺跡北部に竪穴状遺構1基、溝跡3条（SD7・11・12）があり、ほかに土坑1基、井戸跡1基（SE22）が中世と考えられる。溝跡はいずれも方位が一致する。遺物は竪穴状遺構、井戸跡、溝跡などから中世陶器17点、漆器椀1点、曲物2点、木製鋤1点、鎌2点、砥石1点などが出土している。鎌2点、曲物1点はSE22井戸跡底面付近から出土した。中世陶器は在地産・常滑産が見られる。建物跡は未確認だが、屋敷地などとして利用されたと考えられる。



写真21 窪田遺跡'08-SB8・SB33・SB35 建物跡(7世紀後半～8世紀中頃)

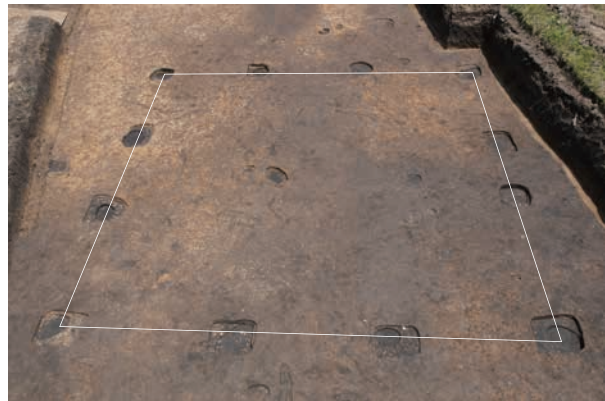


写真22 窪田遺跡'08-SB108 建物跡(同左)



写真23 窪田遺跡'08-SB308 建物跡(同上)・SI302住居跡(同右)



写真24 窪田遺跡'08-SI302住居跡外延溝(8世紀末～9世紀初頭)

(3) まとめ

盆地西縁から南東方向に延びる舌状の微高地上で、縄文時代から中世にかけての活動痕跡を確認した。主体となるのは飛鳥～奈良時代前半（7世紀末～8世紀前半）の遺構群である。このほか、縄文時代のある時期には狩猟場として利用され、後期末～晩期には集落が形成されたと考えられる。古墳時代中期（5世紀中頃～後半）、平安時代初頭（8世紀末～9世紀初頭）にも集落が営まれている。中世前半（13世紀）には溝で区画された屋敷が営まれた可能性がある。

飛鳥～奈良時代の遺構群の存続期間は7世紀後半～8世紀中頃と考えられ、周辺で営まれる十郎田遺

跡（7世紀後半）、都遺跡（7世紀後半～8世紀初頭）、六角遺跡（8世紀前半～中頃）の集落と並存関係にあったと考えられる。住居に加えて掘立柱建物が多く配置され、一般集落とは異なる様相を呈する。また、都遺跡北部で確認されている正方位の溝区画と建物群に推定される官衙（7世紀末～8世紀前半、推定「柴田郡衙」）との近接した位置関係から、本遺跡には都遺跡の官衙と一体的な機能を担う施設が営まれていた可能性が考えられる。さらに推論を重ねれば、本集落では明瞭な区画施設を伴っていないと考えられることや、住居群と掘立柱建物が混在する状況から、官衙の実務的な機能を担った施設が営まれたと考えられる。

第4節 十郎田遺跡

(1) 遺構と遺物の分布

平成19・20年度の調査区は北西—南東方向に舌状に延びる微高地の基部側にあたる北西部を東西方向に横断する1区、中央部を東西・南北方向に横断・縦断する2～4区、微高地先端部の南東部を東西方向に横断する5区を設定した。これに先立つ平成14年度の遺構確認調査トレンチは遺跡範囲の全域を対象として、微高地中央部と周縁部を中心に設定されている。また、平成19年度の調査で材木堀・大溝による区画施設を確認したことから、区画の規模・形状などを確認する目的で微高地周縁部などに遺構確認調査トレンチを設定した。この結果、遺跡範囲外周の各調査区・トレンチなどで湿地性堆積土を確認し、削平された丘陵部の旧地形および微地形が把握できた。丘陵部

は全般に削平の影響が見られ、段状の造成による著しい削平箇所がモザイク状に分布するものの、広範囲に遺構の分布が確認された。

遺構は本調査区で竪穴住居跡41軒、掘立柱建物跡66棟、柱列跡38条、井戸跡10基、溝跡47条、水溜状遺構1基、土坑、柱穴、流路跡などを確認し、確認調査トレンチでも同様の遺構の広がりを確認している(第22図)。

遺物は土師器、須恵器、中世陶磁器、木製品、金属製品などが出土した。土師器は引田式、栗囲式、表杉ノ入式(ロクロ土師器)がある。

遺構・遺物の主体は古墳時代中期(5世紀中頃～後半)、飛鳥時代(7世紀後半)、平安時代初頭(8世紀末～9世紀初頭)、中世前半(13世紀中頃)である。

(2) 各時期の様相

縄文～弥生時代 縄文土器片、石鏃、石匙、石鍬が出土しているが、遺構は未確認である。

古墳時代中期(5世紀中頃～後半) 遺跡北西部に竪穴住居跡1軒(SI163)がある。引田式土師器が出土しており、床面および貯蔵穴に一括廃棄された良好な資料である(写真25・26)。

飛鳥時代(7世紀後半) 竪穴住居跡27軒、掘立柱建物跡5棟、柱列跡2条、材木堀跡、大溝跡、区画溝跡、土坑などがある(第23図)。遺跡範囲の全域に分布し、本遺跡の遺構・遺物の主体をなしている。微高地上の平坦面を材木堀・大溝で区画し、内部に竪穴住居と掘

立柱建物を配置する集落が営まれたと考えられる。

材木堀(SA28・76・235)は直線的に延びてほぼ正確な長方形を描き、長方形の西区画(東西約312m、南北約144m)の南東側に方形の東区画(東西約56m、南北約58m)が付属し、東西の総延長は368mに及ぶ(注7)。区画の造営方向は正方位によらず、真北から約23°東偏する。舌状に延びる微高地の尾根筋方向に合わせたものと考えられ、区画は微高地平坦面を最大限に取り込む形で造営されたことが窺える。なお、確認調査トレンチでは材木堀区画の北西隅で材木堀ラインの食い違いが見られ、南辺中央では材木堀ラインが内側にL字形に屈曲して柵形状となる箇所を確

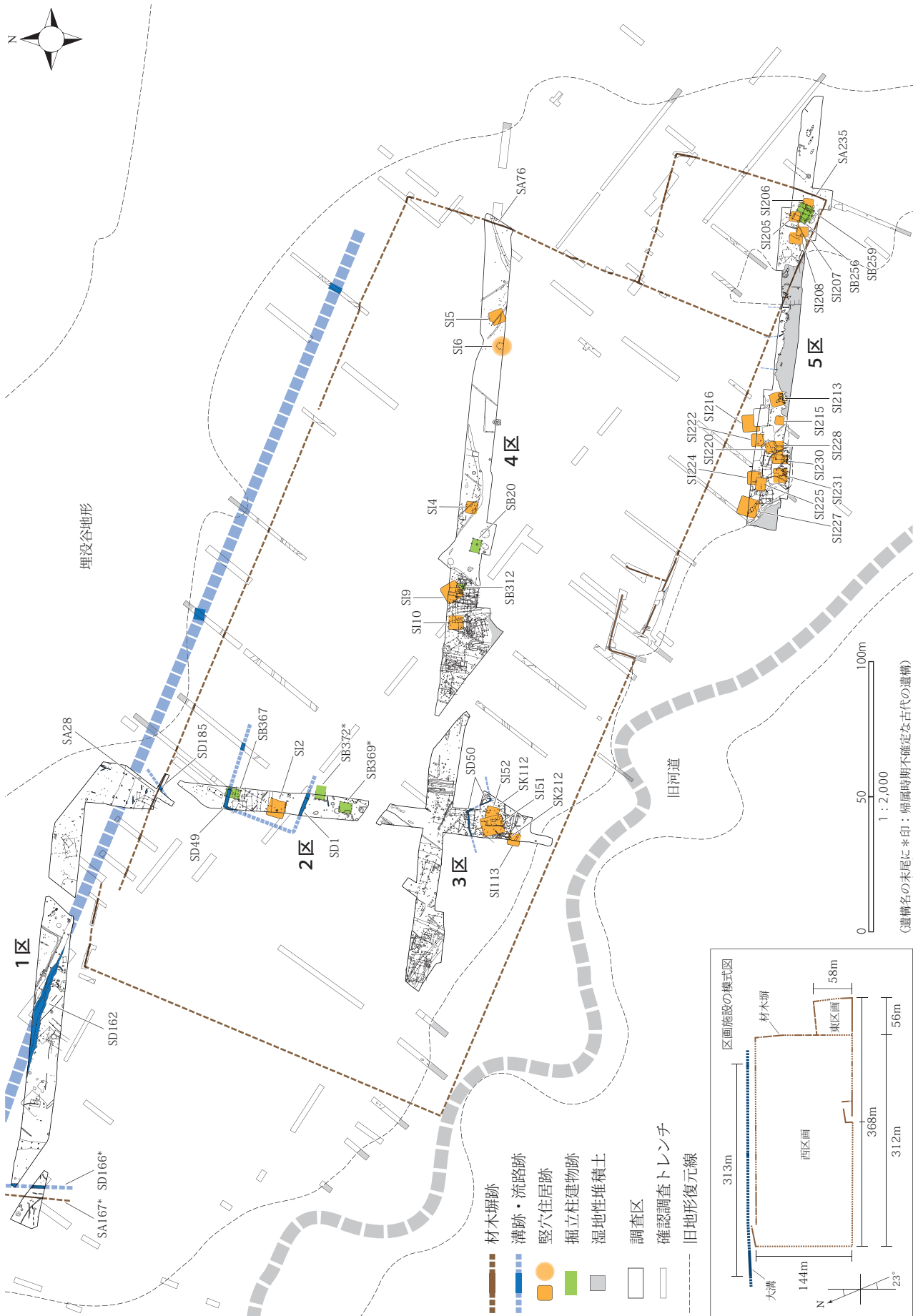


写真25 十郎田遺跡 SI163 住居跡貯蔵穴 (5世紀中頃～後半)



写真26 十郎田遺跡 SI163 住居跡出土土器 (同左)

注7：材木堀・大溝の規模・構造については、遺構確認調査トレンチの図面・写真の再検討の結果に基づき一次報告書(第13集)記載の内容を本書記載のとおり修正する。これにより、①ややいびつな形状となっていた材木堀区画東辺ラインが概ね直線的と理解され、②材木堀区画南辺中央部では柵形状の開口部を持つ可能性が指摘される。また、③材木堀区画北西側の一部で確認していたSD162大溝跡が区画北辺を全通していた可能性が指摘される。なお、②・③についてはいずれも未精査遺構に対する位置付けの変更であり、確定的ではない。



第23図 十郎田遺跡遺構配置図(7世紀後半)

認している。未精査のため詳細な構造に言及することは難しいが、区画の開口部である可能性が考えられる。また、微高地の基部側を断ち切るように配置された上幅 3.5m の大溝 (SD162、写真 30) は延長約 53m を確認した。東側で新しい溝と重複するため位置付けには課題を残すが、確認調査トレンチでは材木堀区画北辺の外側に沿って溝跡を確認しており、北辺は材木堀・大溝で区画されていたと考えられる。

材木堀は幅 40cm 前後の布掘り状の掘方内に直径 20cm 前後の柱材を芯々約 45cm 間隔で配列し、傾斜地では掘方底面が階段状となる。柱材下部が残存するものが多く、断面観察から廃絶後は柱材の地上部が切り取り撤去されたと考えられる (写真 28・29)。柱材は 95% がクリ材 (注 8) で、ほとんどが割材 (芯去材) であることから、用材の調達が計画的になされ、規格的な製材技術を持つ集団によって造営されたことが窺える。大溝は横断面形が逆台形を呈する。自然流入土により埋没し、最上層に灰白色火山灰の堆積を確認した。

内部施設は住居と掘立柱建物、区画溝などがあり、住居主体である。住居は材木堀区画内の各所に分布

し、南東部では材木堀区画外側にも分布する。一辺 4～6m 程度の中型のものが主体だが、長辺 8.0m、短辺 6.4m の大型住居 (SI51、写真 32) も見られる。方位は概ね正方方位を基調とし、東偏・西偏するものもある。重複も多く確認され、数時期の変遷が考えられる。カマドはほとんどが北壁に付設され、その形態は長く伸びる煙道を持つ在地型カマド (SI51・52・205・206・225 など、写真 33)、燃烧部奥壁が住居壁面より張り出し、煙道を持たない関東型カマド (SI4・5・207・215 など、写真 34) があり、その比率は概ね半々である。こうした住居方位やカマド形態のあり方に材木堀区画内外の住居で際立った違いは見られないようである。掘立柱建物は材木堀区画内に少数分布する。小規模な側柱建物が主体であるが、東区画南東隅の SB256 掘立柱建物跡は桁行 4 間 (6.81m)、梁行 2 間 (5.07m) の総柱建物で、倉庫の可能性が考えられる (写真 31)。区画溝は上幅 150cm で南北 29m、東西 24m 以上の方形区画と見られるもの (SD1・49)、上幅 80cm で SI51 大型住居の北・東側を東西 10.5m 以上の鉤形に巡るもの (SD50) がある。



写真 27 十郎田遺跡 SA235 材木堀跡 (東区画南東隅、7 世紀後半)



写真 28 十郎田遺跡材木堀跡 (左:北辺・SA28、中:南辺・SA235、右:東辺・SA235)



写真 29 十郎田遺跡 SA235 材木堀跡断面 (南辺、同上)



写真 30 十郎田遺跡 SD162 大溝跡 (7 世紀後半)

注 8 : SA28 の 11 点、SA76 の 2 点、SA235 の 26 点の柱材から採取した合計 39 試料を対象とした樹種同定分析の結果、2 試料 (コナラ節、ケヤキ) を除く 37 試料がクリと同定され、耐久性の高い用材を選択していることが指摘されている (町 14 集)。

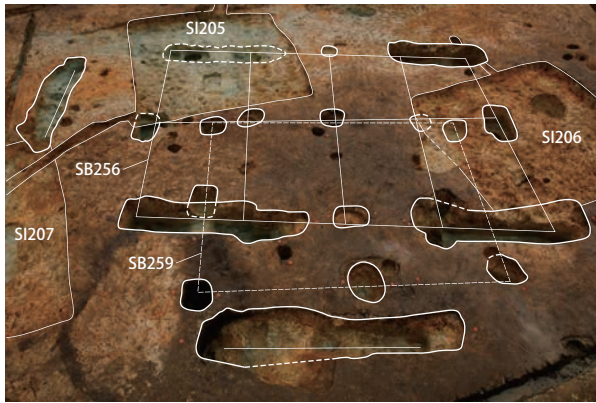


写真 31 十郎田遺跡 SB256・SB259 掘立柱建物跡 (7 世紀後半)



写真 32 十郎田遺跡 SI51 大型住居跡 (同左)



写真 33 十郎田遺跡 SI52 住居跡 (同上)



写真 34 十郎田遺跡 SI4 住居跡 (同左上)



写真 35 十郎田遺跡 SI52 住居跡出土遺物 (7 世紀後半)



写真 36 十郎田遺跡 SI4 住居跡出土遺物 (同左)



写真 37 十郎田遺跡 SI9 住居跡出土遺物 (同上)

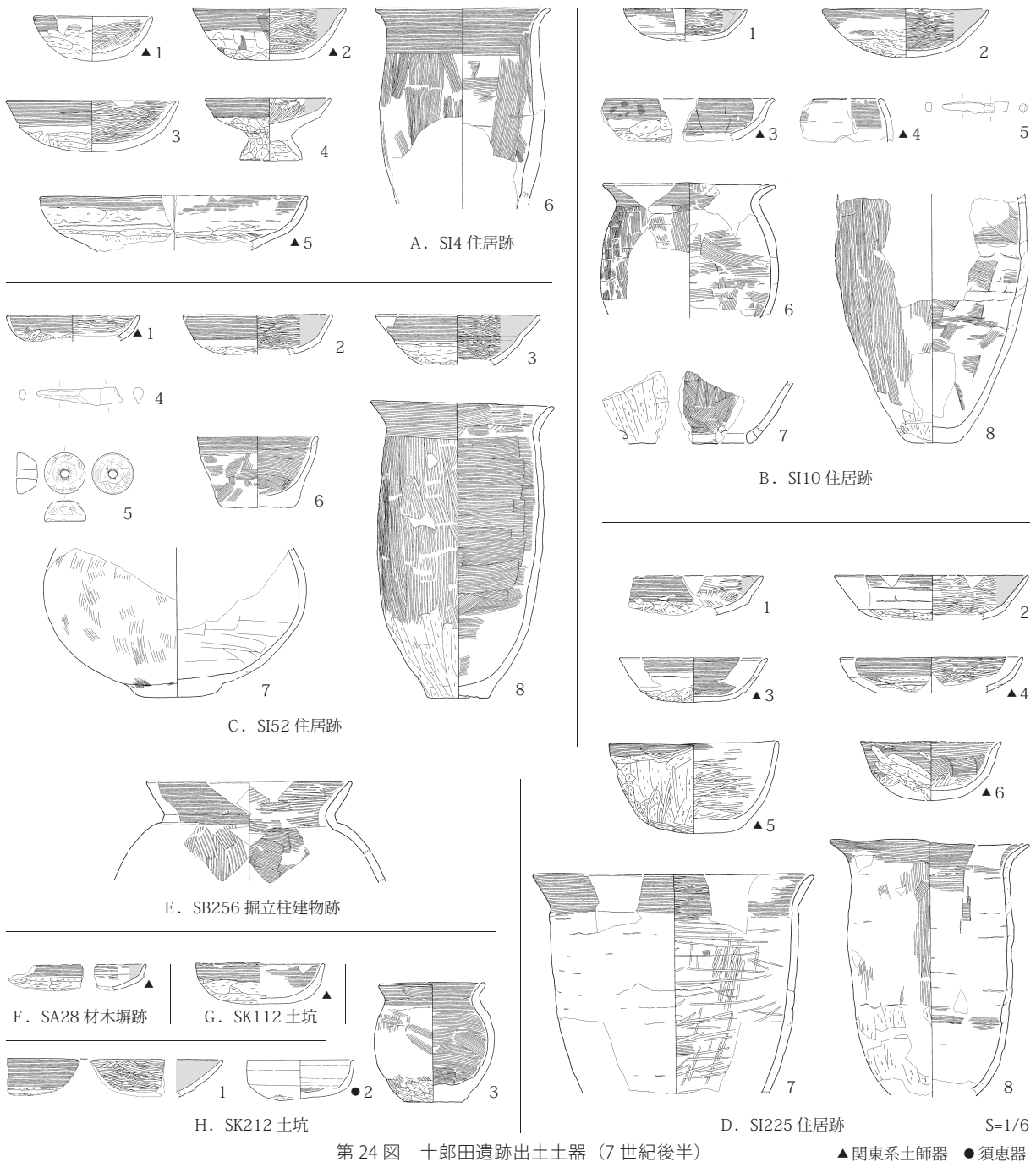


写真 38 十郎田遺跡 SI225 住居跡出土遺物 (同左上)

遺物は住居跡・溝跡などから栗岡式土師器、須恵器、石製紡錘車、刀子、羽口、砥石などが出土している。SI4・9・10・52・225 住居跡などで関東系土師器を含む比較的良好な一括資料を伴う（写真 35～38、第 24 図）。関東系土師器は坏類に多く認められる一方で、甕などの煮炊具は在地土師器を基本としている。須恵器はごく少量であるが、陶邑田辺編年（田辺 1966・1981）Ⅲ期 TK217 型式の坏がある（第 24 図 H-2）。

遺跡の性格については、材木堀・溝による区画施設を伴うことから、一般的な集落ではないと考えられる。内部施設は住居主体であり、6 世紀に国造が置かれな

かった阿武隈川河口以北の地域で城柵に先行あるいは並行して造営された囲郭集落（村田 2000）と考えられる。本遺跡の囲郭集落は①仙台市郡山遺跡 I 期官衙の約半分の規模となる長方形区画であること、②倉庫と考えられる総柱建物を伴うこと、③内部施設の主体である住居の一部に関東型カマドが見られること、④住居が保有した土器群のうち坏類に関東系土師器を多く含むことが特徴として挙げられる。このことから、本集落には移民の存在と合わせて官衙的機能も備わっていたことが窺われ、都遺跡に推定される官衙の前身として設置された城柵の可能性が考えられる。



第 24 図 十郎田遺跡出土土器（7 世紀後半）

▲関東系土師器 ●須恵器

平安時代初頭（8世紀末～9世紀初頭） 竪穴住居跡7軒、掘立柱建物跡1棟、井戸跡1基などがあり、遺跡南東部に集中する。遺物はロクロ土師器、鞆羽口などが出土しており、「大」・「本」の墨書土器もある。住居のうち4軒が暗渠溝や外延溝を持ち、SI218・SI222住居跡などでは鞆羽口が出土していることから小鍛冶を行なう工房の可能性が考えられる。

平安時代前葉（9世紀） 竪穴住居跡1軒、土坑などが遺跡北西部に分布する。SK41土坑ではロクロ土師器、須恵器がまとめて出土している（写真39）。

平安時代中葉（9世紀末～11世紀前半） 掘立柱建物跡1棟、土坑、区画溝などが遺跡南西部に分布する。SB138掘立柱建物跡（写真40）は一部の確認であるが、柱穴掘方が直径1.2mの略円形で、直径36cmと推定される柱材を持つ大型の建物である。

中世前半（13世紀中頃） 掘立柱建物跡50棟、井戸跡9基、区画溝跡などが遺跡中央～西部に分布し、遺跡中央部に濃密な分布域を形成する。廂（縁）の付属する建物が9棟確認され（写真41・42）、方形の

溝区画の中に廂（縁）付建物を中心とする建物群と井戸などを配置する屋敷が複数営まれたと考えられる。

井戸跡のうち、遺跡中央部のSE66井戸跡は、井戸の廃絶後に下部が人為的に埋め戻され、上部が水溜めとして利用されていた。水溜め内からは木製挽物椀21点、皿1点、小皿158点の未製品（荒型）合計180点などの木製品が出土した（写真43～45）。荒型の用材はすべてケヤキであり、木取りもほぼ横木地柁目取に統一されていた（注9）。荒型の寸法などの検討から、椀は口径15cm、器高6cm前後、小皿は口径10cm、器高2.5cm前後に収まる大きさの製品が推定された（第25図）。出土状況や未製品の形態や加工痕跡の斉一性から木製挽物の製作工程の一部として荒型の水漬けが行なわれていたと推定される。

微高地の平坦面に複数の屋敷が営まれ、その一角には挽物製作を行なう木地小屋が設けられていたと考えられる。規格的な製品が多量に生産されていることから、集落内での自給的な消費ではなく、集落外への供給を前提とした流通品であったと考えられる。



写真39 十郎田遺跡 SK41 土坑出土遺物（9世紀）



写真40 十郎田遺跡 SB138 建物跡（10世紀）



写真41 十郎田遺跡 SB21 建物跡（13世紀中頃）



写真42 十郎田遺跡 SB373 建物跡（同左）

注9：荒型のうち椀3点、小皿20点から採取した23試料を対象とした樹種同定分析の結果、すべてケヤキと同定され、同じ個体を分割して製作された可能性が指摘されている。木取りは小皿1点が板目取のほかはすべて横木地柁目取であった（町14集）。これらの樹種同定資料をサンプルとした肉眼観察では、顕微鏡観察をしていない資料のすべてがケヤキで、横木地柁目取と判断される。



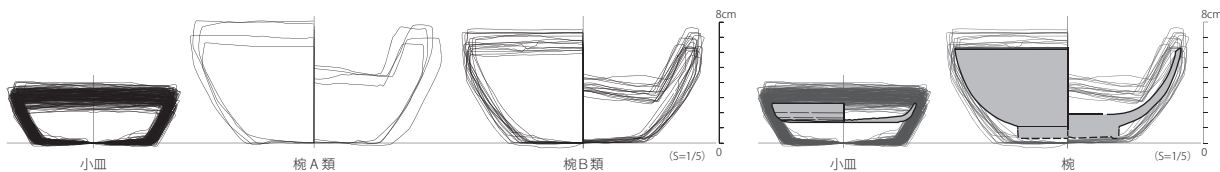
写真 43 十郎田遺跡 SE66 井戸跡上層の遺物出土状況 (13 世紀中頃)



写真 44 十郎田遺跡 SE66 井戸跡上層の遺物出土状況 (同左)



写真 45 十郎田遺跡 SE66 井戸跡上層出土木製品 (同左)



第 25 図 十郎田遺跡 SE66 井戸跡上層出土挽物未製品の重複トレース図と推定される製品の形態 (13 世紀中頃)

参考資料：仙台市中野高柳遺跡 SX1397 遺物包含層出土漆椀・小皿 (宮城県教育委員会 2006)

(3) まとめ

盆地西縁から南東方向に延びる舌状の微高地上で、縄文時代から中世にかけての活動痕跡を確認した。主体となるのは飛鳥時代 (7 世紀後半) の遺構群である。このほか、古墳時代中期 (5 世紀中頃～後半)、平安時代初頭～中葉 (8 世紀末～11 世紀前半) にも集落が営まれている。中世前半 (13 世紀中頃) には溝で区画された屋敷が営まれ、屋敷内には流通用の木製挽物を生産する木小屋が設けられていたと推定される。

飛鳥時代の遺構群は、材木堀・大溝による大規模な区画施設を伴う囲郭集落である。材木堀は直線的に延びて、斜め方位の正確な長方形区画を形成する。内部施設は住居主体で掘立柱建物は少ないが、長方形区画の南東隅に付属する方形区画内には総柱建物からなる倉庫群が配置されていた可能性が考えられる。住居の

一部には関東型カマドが見られ、保有する土器群にも関東系土師器が多く含まれている。このため、集落の構成員には関東系移民が含まれていたと考えられ、律令制下の移民政策との関連が窺われる。

同時期の囲郭集落は都遺跡でも確認されており、材木堀・大溝による不整形区画の内部に住居群を配置したものと考えられる。これを踏まえて本遺跡の囲郭集落を見ると、材木堀区画の形状が正確な長方形を呈し規格性が高いことや、倉庫群を配したと考えられる区画の存在から官衙的な性格が窺われる。このことから、本遺跡の囲郭集落の機能は移民を收容・管理することだけでなく、柴田評の建評に伴う律令支配の中核となる行政機能を備え、柴田郡衙の前身となった城柵 (推定「柴田柵」) である可能性が考えられる。

第5節 西屋敷遺跡・西小屋館跡

(1) 遺構と遺物の分布

西屋敷遺跡は北西―南東方向に舌状に延びる低丘陵上にあり、その南東端に西小屋館跡が位置する。平成21年度の西屋敷遺跡の調査区は丘陵尾根筋より南西側の緩斜面を対象として、丘陵尾根筋方向に1・4・5区、これに概ね直交して2・3・6区を設定した。これに先立つ平成14年度の遺構確認調査トレンチも同様の範囲を対象として設定されている。また、平成21年度の調査で5・6区から区画溝・建物群を確認したことから、区画の規模・形状と建物群の広がりなどを確認する目的で遺構確認調査トレンチを設定した。この結果、丘陵部は全般に削平の影響が見られるものの、丘陵尾根筋に近い範囲に濃密な遺構の分布が確認された。西小屋館跡では平成22年度に遺跡南辺部で遺構確認調査を実施し、溝跡・井戸跡などの分布を確認した。

(2) 各時期の様相

縄文～弥生時代 弥生土器片、磨製石斧、石鏃が出土しているが、遺構は未確認である。

飛鳥時代後半（7世紀末～8世紀初頭） 自然流路跡（SD107、写真46）から栗罎式土師器、須恵器が出土している（第26図）。遺構は未確認である。土師器には関東系土師器を含む。

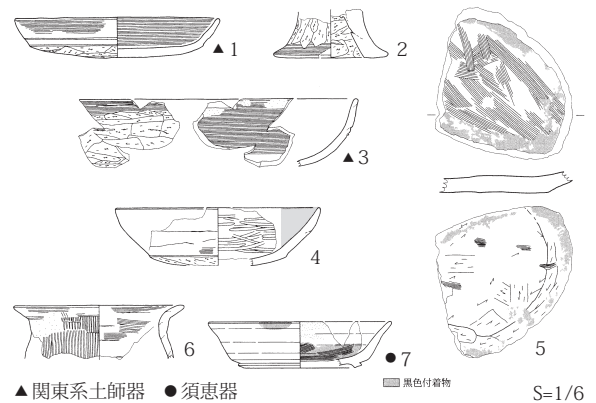
平安時代前葉（9世紀中頃） 掘立柱建物跡4棟、井戸跡2基、区画溝跡4条、焼成遺構5基などがあり、丘陵尾根筋に近い範囲に分布する。建物跡（写真47）はいずれも小規模な側柱建物であるが、概ね正方位を基調とし、東西・南北方向に直線的に延びる区画溝との関連が窺える。井戸跡はいずれも井戸側材が残存し、SE45井戸跡は丸太分割割り貫き井戸（写真49）、SE85井戸跡は積み上げ式横板組井戸である（写

遺構は西屋敷遺跡の本調査区で掘立柱建物跡43棟、柱列跡26条、井戸跡8基、堀跡1条、溝跡62条、水溜状遺構4基、焼成遺構13基、土坑、柱穴、流路跡などを確認し、確認調査トレンチでも同様の遺構の広がりを確認している（第27図）。

遺物は中世陶磁器、近世陶磁器、土師器、須恵器、かわらけ、瓦質土器、木製品、金属製品、弥生土器、石器などが出土した。中世陶器は在地産、常滑産の甕・片口鉢など、古瀬戸産の天目茶碗・花瓶・皿・小杯、中国青磁の磁器碗がある。土師器は少量だが栗罎式、表杉ノ入式（ロクロ土師器）がある。

遺構・遺物の主体は飛鳥時代後半（7世紀末～8世紀初頭）、平安時代前葉（9世紀中頃）、中世（13世紀後半～15世紀前半）である。

真48)。SE45井戸跡では、底面でつけ木2点、桃核1点、埋め戻し土下部で重ねて伏せられた完形のロクロ土師器・須恵器坏各1点、礫石器（石皿）が出土した（写真49・50）。出土状況などから井戸廃絶時



第26図 西屋敷遺跡 SD107 流路跡出土遺物（7世紀末～8世紀初頭）



写真46 西屋敷遺跡 SD107 流路跡（7世紀末～8世紀初頭）



写真47 西屋敷遺跡 SB26 建物跡（9世紀中頃）



写真 48 西屋敷遺跡 SE85 井戸跡 (9世紀中頃)



写真 49 西屋敷遺跡 SE45 井戸跡 (同左)



写真 50 西屋敷遺跡 SE45 井戸跡出土遺物 (同左上)



第27図 西屋敷遺跡遺構配置図

における祭祀行為の痕跡と考えられる。

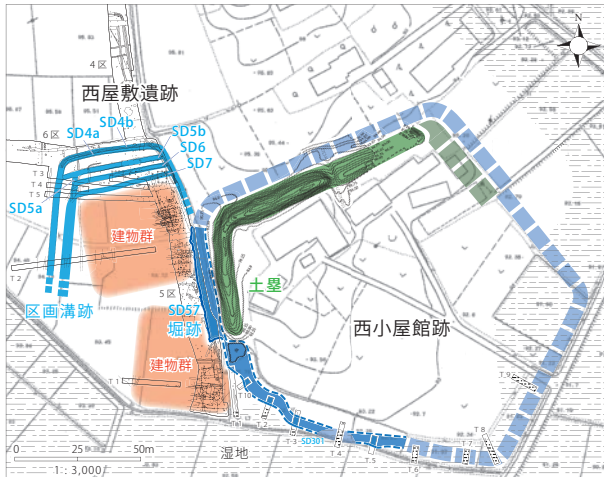
遺構の分布は痕跡的であるが、区画施設を伴う建物群や、井戸側の構築方法に見られる多賀城周辺などの共通性、井戸の廃絶儀礼の痕跡などから、一般集落とは異なる性格が窺える。

中世（13世紀後半～16世紀頃） 掘立柱建物跡 37棟、井戸跡 2基、木炭焼成遺構 8基、区画溝 6条な

どがあり、丘陵尾根筋付近から先端部にかけて分布する。また、西小屋館跡西辺・南辺の堀跡を確認した。

建物跡は3区東部～4区北部に5棟、5区北部に13棟、5区中央部に6棟、5区南部に13棟がそれぞれまとまって分布し、重複が著しい。長方形の東西棟側柱建物が主体で、廂（縁）を持つものが見られる。

区画溝は5・6区で確認され、横断面形はSD4b区



第28図 西小屋館跡・西屋敷遺跡の中世遺構



写真51 西小屋館跡東辺土塁・堀跡



写真52 西小屋館跡北辺土塁



写真54 西小屋館跡東辺堀跡



写真53 西小屋館跡東辺土塁・堀跡

注10：遺構の重複関係から、区画の形成（SD5a）→西側拡張（SD5b）→西・北側縮小（SD6）→北側縮小（SD7）→西・北側再拡張（SD4a）→掘り直し（SD4b）の変遷が確認できる（第28図）。

画溝跡で上幅 150cm の逆台形を呈する。一辺 40m 程度の方形区画を形成しており、5 区北部で確認した建物群に伴うと考えられる。区画の拡張・縮小、溝の掘り直しに伴って複雑に変遷し（注 10）、これに伴って内部施設も再配置・改修を繰り返したことが窺える。

西小屋館跡西辺の堀跡（SD57）は延長 46m を確認した。土塁裾に沿って直線的に伸び、横断面形は上幅 4m 以上、残存深さ約 1m の逆台形を呈する（写真 53・54）。館跡南辺の確認調査トレンチでは上幅 4m 程度でやや蛇行しながら延びる堀跡（SD301）を確認している。西辺堀跡の南端部ではコーナー部を確認していることから、西辺土塁先端部で鉤形に屈曲して南辺堀跡と接続していると推定される（第 28 図）。

木炭焼成遺構は 5 区中央部に 8 基が分布する。平面形が約 70～90cm 四方の方形の土坑で、壁面が被熱により赤色硬化している（写真 57）。同様の焼成遺構は鍛冶遺構に近接して確認されることが多く、鍛冶炭を焼成したものと推定されている。本遺跡でも、周辺に鍛冶工房が存在した可能性が考えられる。

遺物は区画溝跡、堀跡、木炭焼成遺構、柱穴跡などから中世陶磁器、古銭などが出土している。中世陶器は在地産、常滑産の甕・片口鉢（13 世紀後半～14

世紀前半）、古瀬戸産の天目茶碗（14 世紀中頃～15 世紀前半）・仏花瓶（14 世紀前半）・皿・小杯、中国青磁の蓮弁文碗などがある。古銭は洪武通寶・永楽通寶である（写真 58、第 29 図）。

西小屋館跡では東北福祉大学による測量調査が行われており、基底幅 7～10m、比高差 1～3m の土塁が西辺で約 45m、北辺で約 90m 残存し、西辺と北辺は約 105° の角度でく字形に屈曲することが判明している（写真 51・52、第 28 図）。このことから、西小屋館は一町（約 109m）前後を基準として、やや変形した五角形に近い縄張りを持つ方形館跡と推定され、地頭館と推定されている（吉井 1994）。また、北辺土塁の外側に沿って幅 5m 程度の窪地が確認され、堀跡の痕跡と推定されていた。今回確認した西辺堀跡は、この窪地部分から続いているものと考えられる。

西屋敷遺跡で確認した方形区画溝を伴う建物群や井



写真 55 西屋敷遺跡の区画溝と西小屋館跡（左奥）



写真 56 西屋敷遺跡掘立柱建物跡群



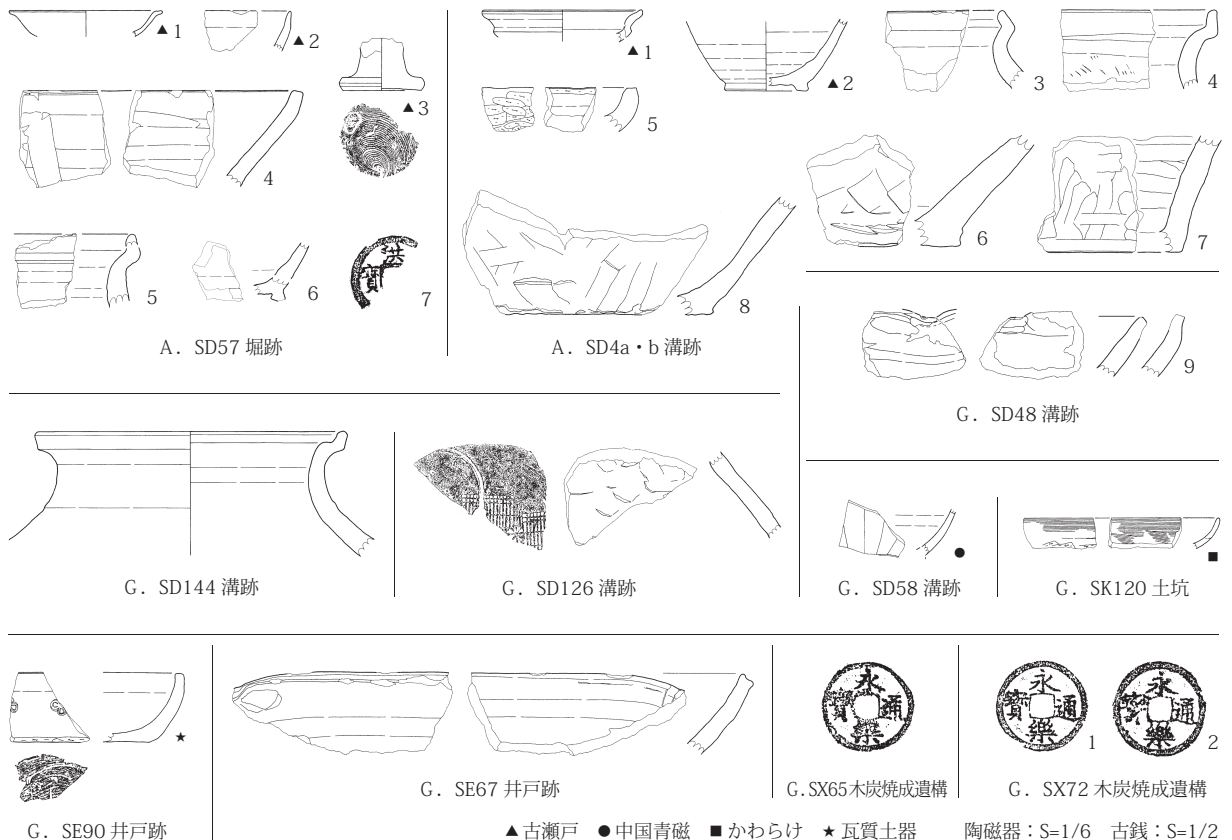
写真 57 西屋敷遺跡 SK66 木炭焼成遺構（16 世紀）



写真 58 西屋敷遺跡出土遺物（13 世紀後半～16 世紀）

戸跡は、西小屋館の西辺に隣接して営まれた屋敷跡と考えられる。出土遺物の年代観や遺構配置から、13世紀後半頃には西小屋館とそれに付随する形で西隣に屋敷が営まれ、16世紀頃まで存続したと考えられる。なお、仙台市域の調査事例（田中 1995 など）を参考にすると、西小屋館は当初敷地を溝のみで区画する居館として整備され、15世紀頃に大規模な土塁と堀が整備された可能性が考えられる。

方形館についてはその規模の大小から、①二町四方または方一町の守護所を頂点として、②地頭層から発生して複数村落を支配した有力国人が方一町の居館を、③一村落に基盤を置いた土豪（地侍）は半町四方の屋敷を構えたと考えられている（千田ほか 1993）。これに従えば、方一町の西小屋館の館主は有力国人層で、隣接する約半町四方の屋敷には国人領主の家臣層が居住したものと考えられる。



第 29 図 西屋敷遺跡出土遺物（13 世紀後半～ 16 世紀）

(3) まとめ

盆地北縁から南東方向に舌状に延びる低丘陵上で、飛鳥時代から中世にかけての活動痕跡を確認した。丘陵南端の東側に西小屋館跡が位置する。調査成果の主体は中世（13 世紀後半～ 16 世紀頃）の遺構群であり、ほかに平安時代前葉（9 世紀中頃）の建物跡・井戸跡などを確認している。

中世の遺構群は丘陵南端部に集中的に分布し、西小屋館跡の西隣に方形区画溝を伴った屋敷跡を確認した。区画溝とその内部に配置された建物群の遺構は重

複が著しく、施設の改修や再配置を繰り返しながら長期間にわたって存続したことが窺える。西小屋館跡では西辺の堀跡を確認し、現存する土塁の外側に堀を巡らせていたことが確認された。堀跡・区画溝などからは在地産、常滑産の甕・鉢、古瀬戸産の天目茶碗・皿・小杯・仏花瓶、中国青磁の蓮弁文碗などが出土している。西小屋館は方一町、隣接して確認した屋敷は半町四方を基調とした縄張りであることから、西小屋館の館主は地頭層出身の有力国人層であり、隣接する屋敷には国人領主の家臣層が居住したと考えられる。

第6節 前戸内遺跡

(1) 遺構と遺物の分布

平成20・21年度の調査区は遺跡範囲南東部の緩斜面に1～3区を設定した。これに先立つ平成14年度の遺構確認調査トレンチも同様の範囲を対象として設定されている。この結果、丘陵部は全般に削平の影響が見られるものの、調査範囲全域に濃密な遺構の分布が確認された。

遺構は竪穴住居跡20軒、掘立柱建物跡35棟、井戸跡8基、竪穴状遺構1基、粘土採掘坑2基、廃棄土坑1基、近世墓10基、落とし穴10基、溝跡10条、

土坑、溝跡、柱穴などを確認し、確認調査トレンチでも同様の遺構の広がりを確認している(第30図)。

遺物は土師器、須恵器、灰釉陶器、中世陶器、弥生土器、石器、石製品、古銭、金属製品、鉄滓、木製品が出土した。土師器は国分寺下層式、表杉ノ入式(口クロ土師器)などがある。

遺構・遺物の主体は奈良時代後半(8世紀中頃～後半)、平安時代初頭(8世紀末～9世紀初頭)、平安時代前葉(9世紀前葉～中葉)、中世前半(13世紀後半～14世紀)、近世後半(19世紀)である。

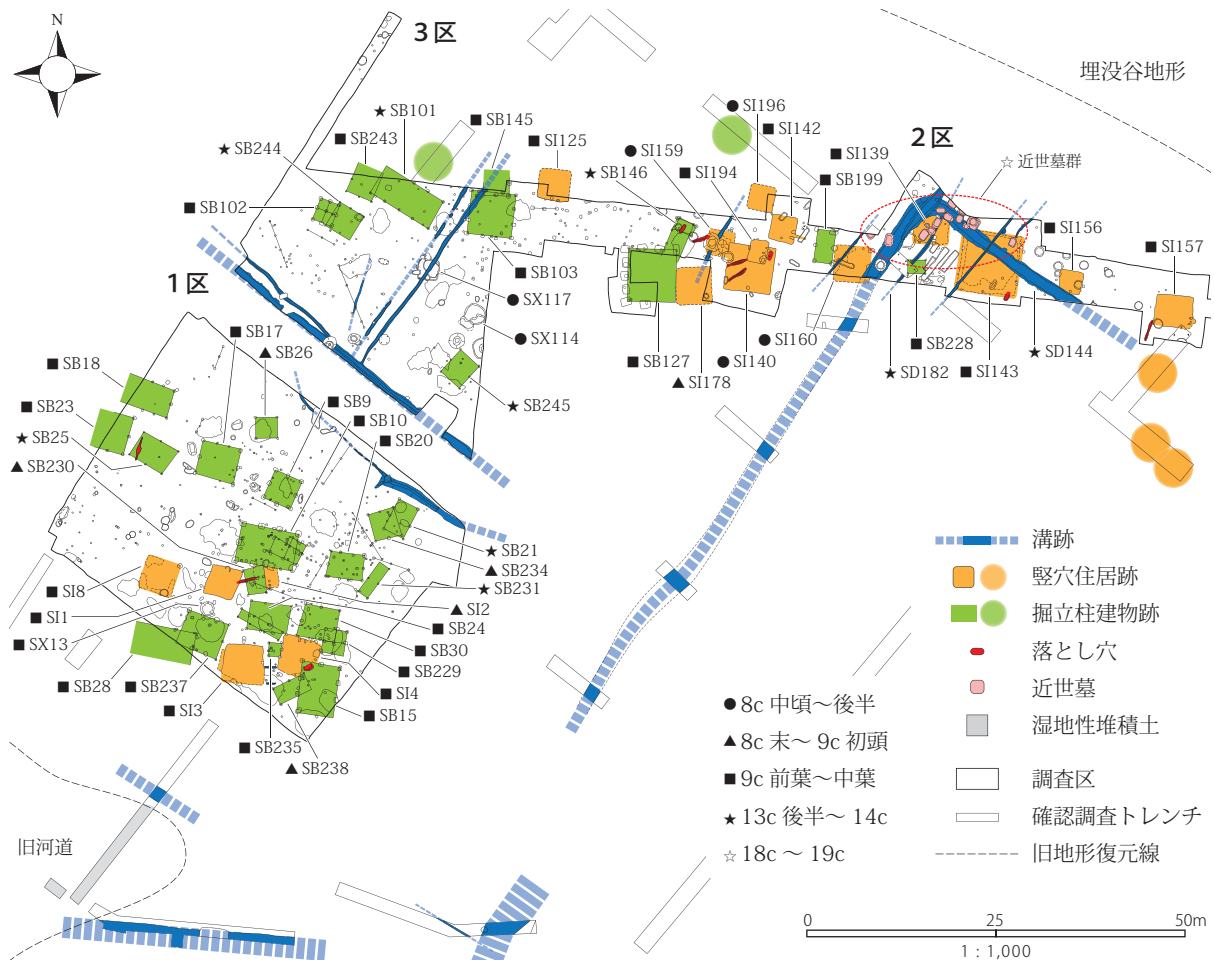
(2) 各時期の様相

縄文～弥生時代 落とし穴10基があり、狩猟場として利用されていたことが窺える。遺物は後世の遺構堆積土などから弥生土器(円田式、天王山式以降)の小片が比較的多く出土している。

奈良時代後半(8世紀中頃～後半) 竪穴住居跡4軒、竪穴状遺構1基、粘土採掘坑2基がある。遺物

は国分寺下層式土師器、須恵器、鉄滓などが出土している。土師器は坏・甕類ともに関東系土師器が主体となっている(第31図、写真59)。

SI140住居跡は一辺6.3mの規模である。SX117竪穴状遺構は一辺2.8mの規模で、鉄滓が出土している。SX114粘土採掘坑(写真60)は2時期の重複があり、長軸1.9～2.8mの規模である。白色粘土層をえぐり



第30図 前戸内遺跡遺構配置図

込むように掘り込まれており、埋土中に焼土・炭化物・土器を多く含むことから土器の製作・焼成に関わる遺構の可能性が考えられる。

確認している遺構数は少数ながら、やや大型の住居があり関東系土師器を保有すること、土器製作を窺わせる粘土採掘坑や鉄滓を伴う竪穴状遺構の存在から、関東系移民を主要な構成員とする集落が形成され、集落内では土器製作や小鍛冶などの生産活動が行なわれていた可能性が考えられる。

平安時代初頭（8世紀末～9世紀初頭） 竪穴住居跡2軒、掘立柱建物跡4棟、土坑1基がある。遺物は土師器、ロクロ土師器、須恵器が少量出土している。

平安時代前葉（9世紀前葉～中葉） 竪穴住居跡14軒、掘立柱建物跡21棟、廃棄土坑1基などがある。重複関係などから、大まかに見て2時期（a期・b期）の変遷が窺える（第32図）。

住居跡は3.1～3.5mの小型、4.0～5.6mの中型、7.9mの大型のものが見られ、機能の分化が窺われる（中型住居：SI1、写真62）。住居掘方底面あるいは床面には、住居の構築・改修時にカマド構築土や貼床材として白色粘土を採掘したと考えられる床下土坑（埋め戻し後に床面を構築）を持つものが多い。

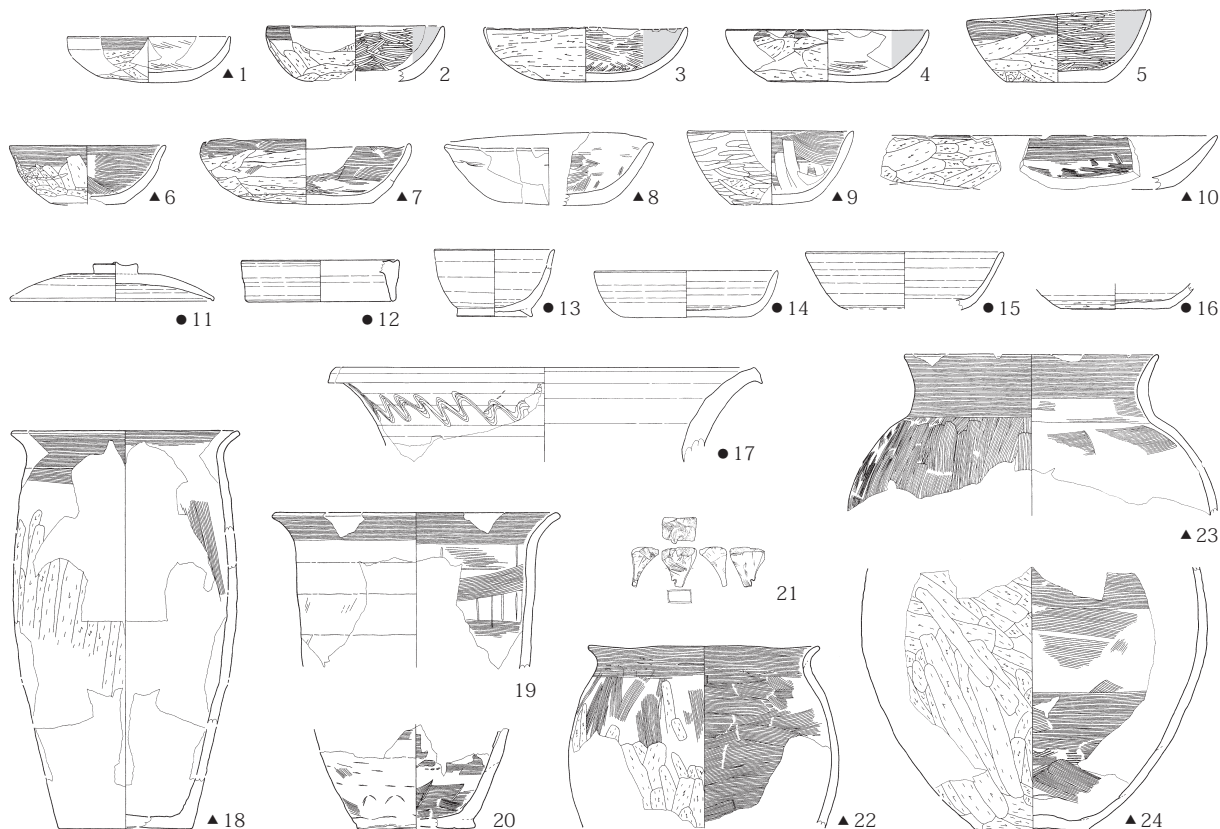
掘立柱建物跡は桁行1.8～7.7m、梁行1.6～5.8mの側柱・総柱建物である。やや大型のものに正方形の



写真59 前戸内遺跡出土土器（8世紀中頃～後半）



写真60 前戸内遺跡 SX114 粘土採掘坑（同左）



1・3～6・8・9・12～14・16～20・22～24：SX114 2・7・10・11・21：SI140 S=1/6
▲関東系土師器 ●須恵器

第31図 前戸内遺跡出土遺物（8世紀中頃～後半）

SB127・SB103 建物跡、長方形のSB10・SB15 建物跡（写真61）がある。建物群は南西部の一角で空白域を囲むように緩やかな逆L字形の配置を形成する。

遺物は住居跡、廃棄土坑などからロクロ土師器、須恵器、灰釉陶器、刀子、鎌先、砥石、鉄滓（椀形滓）などが出土している。土器類は食膳具の比率が高く、ロクロ土師器・須恵器坏には「草手」・「苺田」・「大」・「丈」・「三□□」などの墨書土器がある（写真65）。「苺田」は当時の郡名あるいは郷名を記したものと考えられる。苺田郡は養老5（721）年に柴田郡から分置された（続日本紀）が、このときの郡域や郷名は記録上では定かでない。本資料は「苺田」の文字を記した考古資料としては多賀城市市川橋遺跡出土資料と並んで最古段階のものであり、平安時代に円田盆地周辺が苺田郡に属していたことを示す有力な証拠と考えられる。

遺跡の性格について考えると、南西部の遺構群は官衙風建物群（菅原1998）を形成しており、律令期に見られる豪族居宅と考えられる。出土遺物には、郡司クラスの居宅に見られるような特殊品があまり含まれないことから、本遺跡の居宅主は郷長・有力百姓クラスと考えられる。また、北東部に展開する遺構群は住居を主体としており、居宅の運営を補完した工人や農

業従事者である戸口・寄口の集落と考えられる。居宅内には倉庫群が配置され、集落の一角には仏堂の可能性が考えられる正方形建物が配置されるなど、各遺構群には多様な機能が窺われる（第32図）。

中世前半（13世紀後半～14世紀） 掘立柱建物跡10棟、井戸跡2基、区画溝などがある。遺物は中世陶器、古銭、曲物などが出土している。

区画溝は横断面形が上幅270cmの逆台形を呈し、確認調査トレンチも含めると北辺24m以上、西辺78m以上で南東側に展開する方形区画を形成すると見られる。区画内の遺構配置は不明であるが、西屋敷遺跡・十郎田遺跡で確認している屋敷を区画する溝と規模・形状が類似することから、同様な屋敷を構成している可能性が考えられる。また、この溝区画の外側に分布する建物群については、区画を伴わない小規模な屋敷や、作業小屋などの機能が推定される。

近世後半（19世紀） 近世墓10基、土坑、溝跡が東部にまとまって分布して墓域を形成している。遺物は近世陶器、煙管、古銭が出土している。配置に規則性が見られず、重複関係を持つものが多いこと、副葬品は比較的少ないことから、集落単位で営まれた一般庶民階層の集団墓と考えられる。



写真61 前戸内遺跡 SB10 建物跡（9世紀前葉～中葉）



写真62 前戸内遺跡 S11 住居跡（同左）



写真63 前戸内遺跡出土金属製品・鉄滓（同上）



写真64 前戸内遺跡出土土器（同左上）

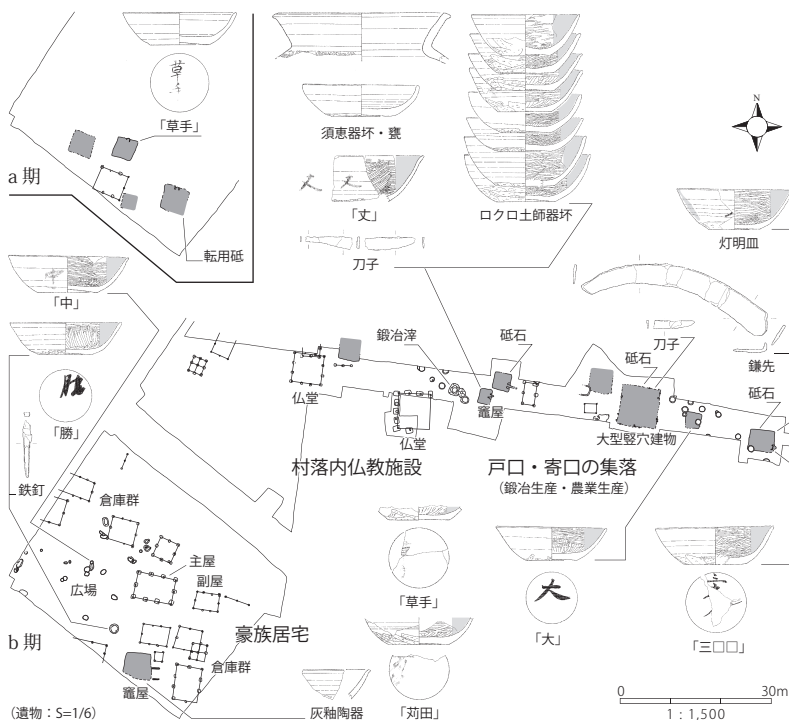
(3) まとめ

盆地西縁の微高地上で、縄文時代から近世にかけての活動痕跡を確認した。主体となるのは平安時代前葉(9世紀前葉～中葉)の豪族居宅を含む集落跡である。このほか、縄文～弥生時代の落とし穴群、奈良時代後半(8世紀中頃～後半)・平安時代初頭(8世紀末～9世紀初頭)の集落跡、中世前半(13世紀前半～14世紀)の屋敷跡の一部と推定される区画溝・建物群、近世墓群(19世紀)などを確認した。

奈良時代後半の集落が保有した土器群は在地色が希薄で関東系土器が主体的である。このことから、集落の構成員に関東系移民を含んでいたと考えられ、粘土採掘坑の存在や鉄滓の出土から土器製作や小鍛冶などの生産活動を営んでいたことが窺われる。六角遺跡などで確認されている関東系移民集落の多くは奈良時

代前半頃に位置づけられるので、本集落はこれに後続するものと考えられる。

平安時代前葉の豪族居宅は、集落内の一角に掘立柱建物などを逆L字形に配置する官衙風建物群を構成している。主屋、倉庫群など見られる建物が広場を囲むように配置されており、居宅主は郷長・百姓クラスと推定される。居宅とやや距離を置いて展開する住居群とその周辺では鉄滓や鉄製品、砥石が出土し、居宅の運営を補完した工人や農業従事者の集落と考えられる。やや規模の大きい正方形建物も見られ、仏堂などの可能性が考えられる。平安時代の律令期型在地拠点集落の典型例とも言えるものであり、当時の在地社会における集落景観や律令支配の実態を知る上で重要な成果と考えられる。



第32図 前戸内遺跡の豪族居宅・集落の機能推定(9世紀前葉～中葉)

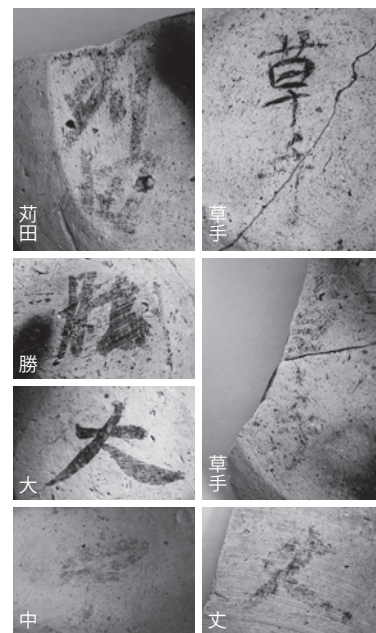


写真65 前戸内遺跡出土墨書土器墨痕 (赤外線撮影・縮尺不同)



遺構確認作業(前戸内遺跡)



遺構実測作業(前戸内遺跡)

第7節 戸ノ内遺跡

(1) 遺構と遺物の分布

平成19・20年度の調査区は遺跡範囲南東部の緩斜面に1～7区を設定した。また、平成21年度には隣接地点で個人住宅建築に伴う調査を実施した。これに先立つ平成14年度の遺構確認調査トレンチも同様の範囲を対象として設定されている。この結果、遺跡範囲外周の各調査区・トレンチなどで湿地性堆積土を確認し、削平された丘陵部の旧地形および埋没谷などの微地形が把握できた。丘陵部は全般に削平の影響が見られ、段状の造成による著しい削平箇所がモザイク状に点在するものの、広範囲に遺構の分布が確認された。

(2) 各時期の様相

縄文～弥生時代 落とし穴1基があり、狩猟場として利用されていたことが窺える。遺物は遺構外から縄文土器（大木5式など）の小片が少量出土している。

奈良時代前半（7世紀末～8世紀前半） 竪穴住居跡2軒（SI24・SI80、注11、写真66）があり、このほかにSI53竪穴住居跡、SD9・SD77大溝跡が概ね奈良時代と考えられる。

SI24・SI53・SI80住居跡はほぼ正方位を基調としている。SD9・SD77大溝跡は横断面形が上幅2.4mの逆台形を呈し、確認調査トレンチを含めて北西－南東方向に約80mを確認した。遺物は住居跡などから土師器、須恵器が出土している。土師器には、南東側に隣接する六角遺跡などで国分寺下層式土師器に伴って出土している関東系土師器と共通性がみられる。

各遺構が広範囲に点在して確認されており、ま

遺構は竪穴住居跡14軒、竪穴状遺構1軒、掘立柱建物跡9棟、井戸跡7基、落とし穴1基、土坑、溝跡、柱穴などを確認し、確認調査トレンチでも同様の遺構の広がりを確認している（第33図）。

遺物は土師器、須恵器、中世陶器、近世陶磁器、古銭、金属製品、木製品、漆製品、石製品、縄文土器、石器などが出土した。土師器は国分寺下層式併行、表杉ノ入式（ロクロ土師器）がある。

遺構・遺物の主体は奈良時代前半（7世紀末～8世紀前半）、平安時代前葉（9世紀）、中世末～近世初頭（16世紀後半～17世紀前葉）である。

まった集落が営まれていたと考えられる。大溝や関東系土師器の存在など、六角遺跡で確認している集落との共通性が窺われ、一体性のある集落が広範囲に展開していた可能性が考えられる。

平安時代前葉（9世紀） 竪穴住居跡5軒（SI25・SI50・SI60・SI705・SI706）、大溝跡（SD30）がある。さらに、今回調査地点の隣接地点で実施した個人住宅建築関連の調査で竪穴住居跡1軒（'09(個)-SI1）、井戸跡1基（'09(個)-SE3）を確認している。

住居跡は15°前後西偏し、東壁にカマドを付設するものが多い。SD30大溝跡は横断面形が幅2.0mの逆台形を呈する。北西－南東方向に直線的に延びる約41mを確認し、南東側の延長線上で確認したSD708大溝跡と同一の可能性もある。遺物は住居跡、井戸跡、溝跡などからロクロ土師器、須恵器、砥石が出土し、「仲」・「大_リ」・「善_リ」などの墨書土器も見られる（写真67）。



写真66 戸ノ内遺跡 SI80 住居跡（7世紀末～8世紀前半）



写真67 戸ノ内遺跡 出土遺物（9世紀）

注11：SI24・SI80住居跡出土土器の年代観について、一次報告書（町8集）では7世紀後半と位置付けていたが、SI24住居跡で共伴する須恵器杯の特徴などから7世紀末～8世紀前半と修正する。関東系土師器の特徴についても六角遺跡で国分寺下層式土師器に伴う8世紀前半の資料と共通性があり、齟齬はない。なお、この修正については十郎田遺跡の一次報告書（町13集）の考察の中で既に適用している。

各遺構が広範囲に点在して確認されており、まとまった集落が営まれていたと考えられる。墨書土器を保有することなどから、前戸内遺跡で確認している豪族居宅・集落跡との関連性が窺われる。

中世末～近世初頭（16世紀後半～17世紀前葉）

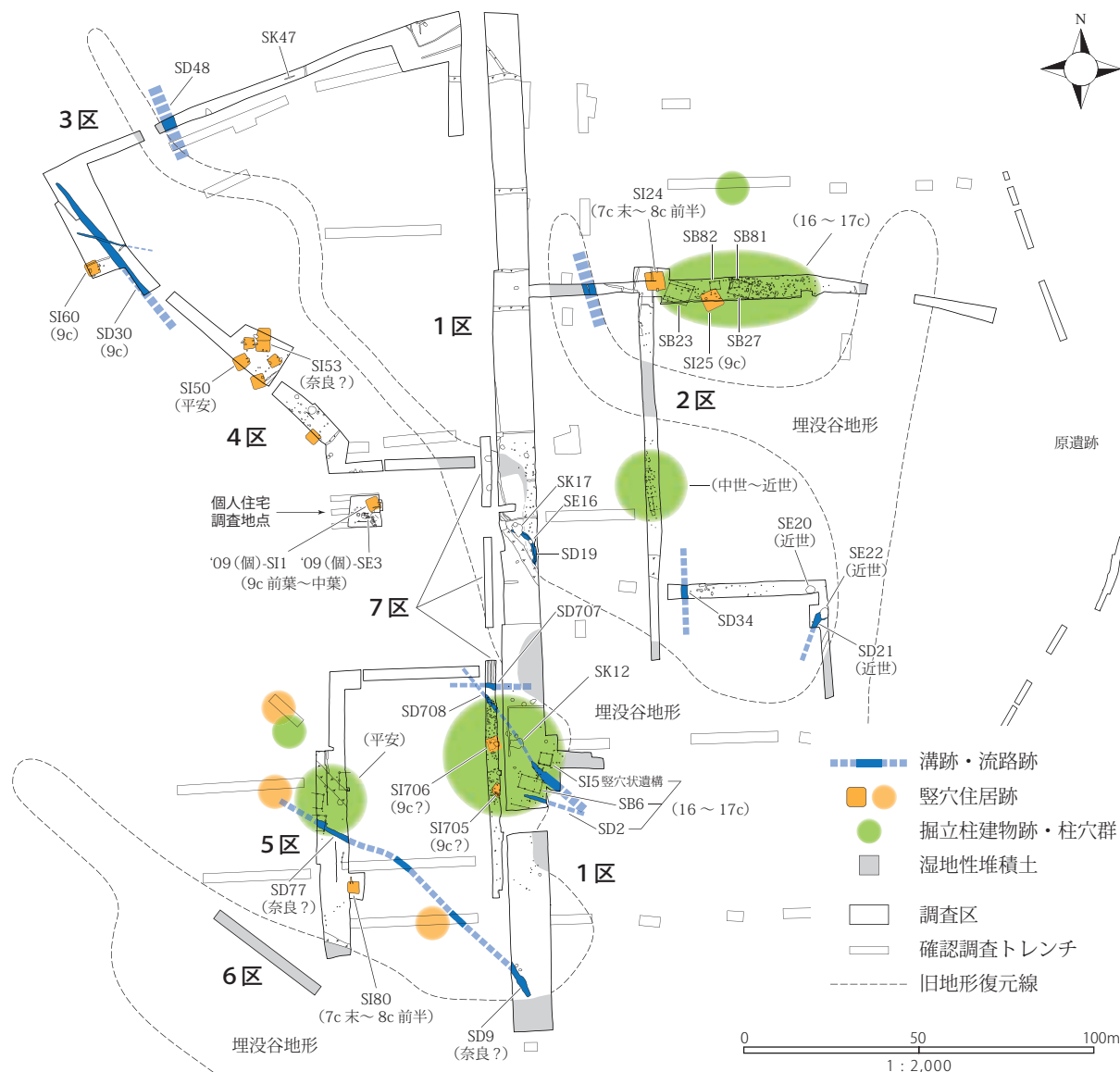
掘立柱建物跡5軒、竪穴状遺構1基、井戸跡3基、溝跡などがあり、埋没谷地形に面した丘陵辺縁部に分布する。

建物跡は桁行3間、梁行1軒の東西棟が3棟ある。二面廂（縁）付建物（SB23）も見られる。SI5 竪穴状

遺構は桁行2間、梁行1間の正方形建物で、掘方埋土で床面を構築する。床面中央部に焼土層が形成されており、工房などの性格が考えられる。

遺物は井戸跡、溝跡、柱穴などから中世陶器、石臼、茶臼、古銭、金属製品、木製品、漆器などが出土している。古銭は開元通寶、政和通寶、無文銭がある。金属製品は「鶴の丸」の彫金を施す板状の銅製品の一部である。漆器椀は外面に植物文を施文する。

廂（縁）付建物や井戸跡、工房と考えられる施設などがあり、屋敷を構成する遺構群と考えられる。



第33図 戸ノ内遺跡遺構配置図

(3) まとめ

盆地北縁から南東方向に舌状に延びる低丘陵上で、縄文時代から近世にかけての活動痕跡を確認した。奈良時代前半（7世紀末～8世紀前葉）・平安時代前葉（9世紀）には集落、中世末～近世初頭（16世紀後半～

17世紀前半）には屋敷が営まれたと考えられる。

奈良時代前半の集落は関東系土器を保有し、南東側に隣接する六角遺跡で確認している関東系移民集落との密接な関連が窺える。また、平安時代前葉の集落は前戸内遺跡の集落との関連が窺われる。

第8節 六角遺跡・原遺跡

(1) 遺構と遺物の分布

六角遺跡・原遺跡は南北方向に延びる同一の舌状丘陵上にあり、丘陵中央部を横断する集落道を境にして丘陵基部側が原遺跡、先端部側が六角遺跡として登録されている。六角遺跡の調査区は、平成18・19年度に丘陵を東西方向に横断するS1・S3・N2・N6・N8区、これに概ね直交するS2・N1・N3・N4・N5・N7・N9・N10区を設定し、平成23年度にN8区北側に1～3区を設定した。原遺跡では、平成17年度に丘陵東縁部に1～3区を設定し、平成23年度に遺構確認調査トレンチで確認した住居跡1軒を精査した。これに先立つ平成14年度の遺構確認調査トレンチも同様の範囲を対象として設定されている。また、平成18年度の調査で六角遺跡N2・N5区で大溝による区画施設を確認したことから、区画の規模・形状などを確認する目的でN2区南側に遺構確認調査トレンチを設定した。この結果、遺跡範囲外周の各調査区・トレンチなどで湿地性堆積土を確認し、削平された丘陵部の旧地形および埋没谷などの微地形が把握できた。丘陵部は全般に削平の影響が見られ、段状の造成による著しい削平箇所がモザイク状に点在するものの、広範

囲に遺構の分布が確認された。

遺構は六角遺跡で竪穴住居跡54軒、掘立柱建物跡29棟、井戸跡2基、落とし穴39基、近世墓9基、溝跡50条、円形周溝1基、土坑、柱穴など、原遺跡で竪穴住居跡1軒、落とし穴9基、土坑7基、柱穴などを確認し、確認調査トレンチでも同様の遺構の広がりを確認している(第34・35図)。

遺物は六角遺跡で土師器、須恵器、中世陶器、近世陶磁器、瓦、古銭、金属製品、ガラス製品、木製品、石製品、縄文土器、弥生土器、石器などが出土した。土師器は塩釜式、栗罌式、国分寺下層式、表杉ノ入式(ロクロ土師器)がある。金属製品は古代の鉄鎌、刀子、近世の煙管、銅鏡など、ガラス製品は数珠玉である。原遺跡では縄文土器、弥生土器、土師器、近世陶磁器などが出土した。土師器は塩釜式がある。

遺構・遺物の主体は六角遺跡で縄文時代、古墳時代前期(4世紀)、奈良時代前半(8世紀前半～中頃)、平安時代初頭(8世紀末～9世紀初頭)、原遺跡で縄文時代、古墳時代前期(4世紀後半)である。両遺跡の遺構群には分布上の連続性が認められることから、次項では一括して各時期の様相を述べる。

(2) 各時期の様相

縄文時代 落とし穴48基があり、狩猟場として利用されていたことが窺える。落とし穴として分類した土坑には、平面形が小判形で横断面形がU字形を呈するもの(A類)と、平面形が溝状で横断面形がV字形を呈するもの(B類)との2形態があり、A類は底面の中央にピットを持つものがある(写真68)。いずれも六角・原遺跡の丘陵の尾根筋から中腹の斜面、湿地際にかけての広範囲に分布し、A類は短軸方向、B類

は長軸やや斜め方向に数m間隔の列状配置が認められた。盆地底面の湿地帯へ向かって張り出す舌状の小丘陵地形や落とし穴の列状配置などから、民俗事例に見られる追い込み猟との関連が窺われる。遺物は遺構外や後世の遺構堆積土から縄文土器(貝殻腹縁文、羽状縄文+繊維混和、撚糸文)の小片が少量出土している。

弥生時代 六角・原遺跡の遺構外や後世の遺構堆積土から弥生土器(円田式、天王山式以降)の小片が比較的多く出土しているが、遺構は未確認である。



写真68 六角遺跡落とし穴A類(左)・B類(右)(縄文時代)



写真69 六角遺跡落とし穴A類(同左)

古墳時代前期（4世紀後半） 竪穴住居跡 10軒があり、舌状丘陵中腹の六角遺跡北部から原遺跡南部にかけて分布する。遺物は塩釜式土師器、ミニチュア土器、砥石が出土しており、六角遺跡 SI1004 住居跡では貯蔵穴・床面出土の良好な一括資料を伴う（写真 70～72）。同 SI701 住居跡は床面に炭化木材・焼土ブロックが遺存し、焼失住居の可能性がある。

奈良時代前半（8世紀前半～中頃） 竪穴住居跡 12軒があり、六角遺跡の全域に分布する。また、六角遺跡中央部に掘立柱建物跡 3棟、大溝跡 4条がある。



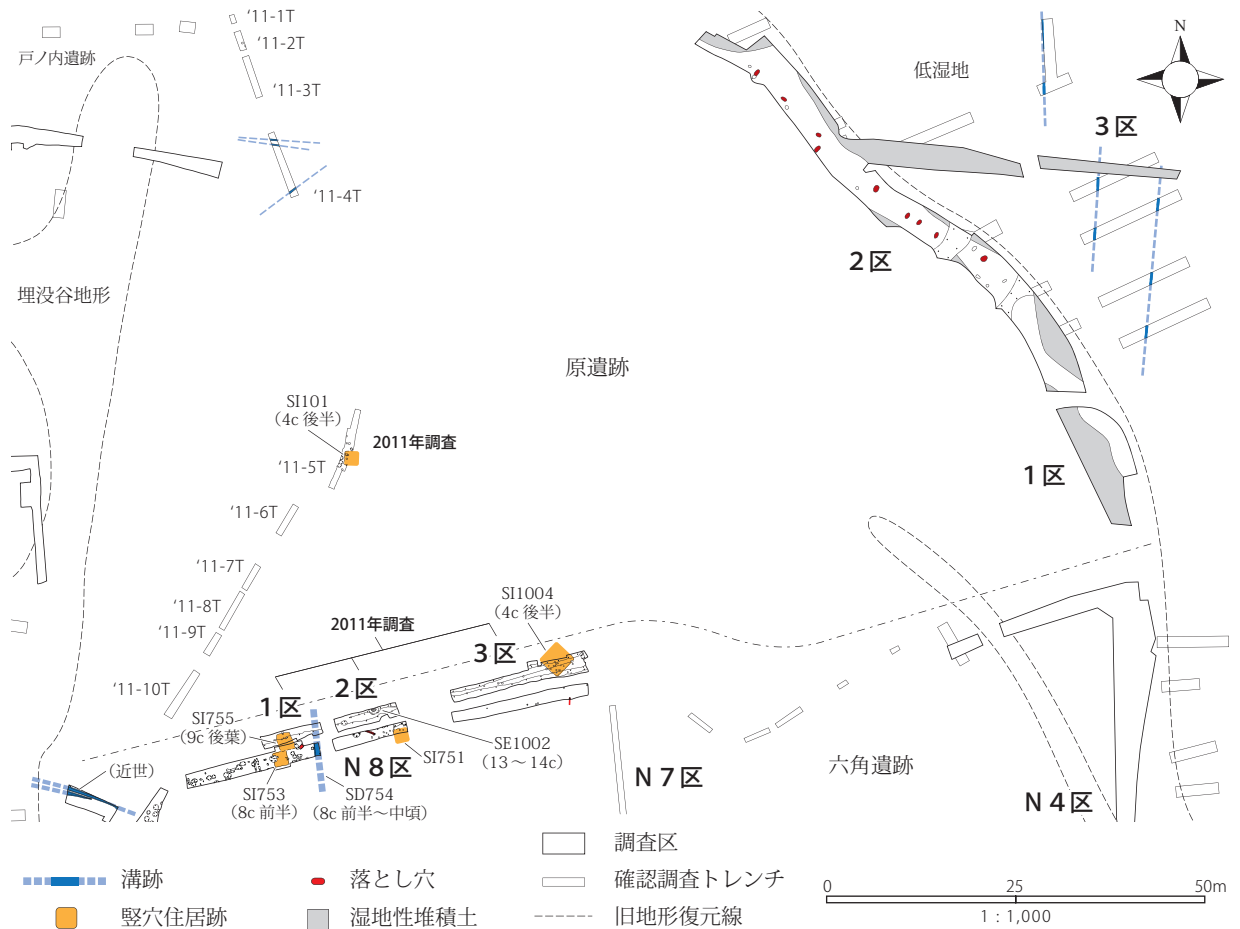
写真 70 六角遺跡・原遺跡出土土器（古墳時代前期）



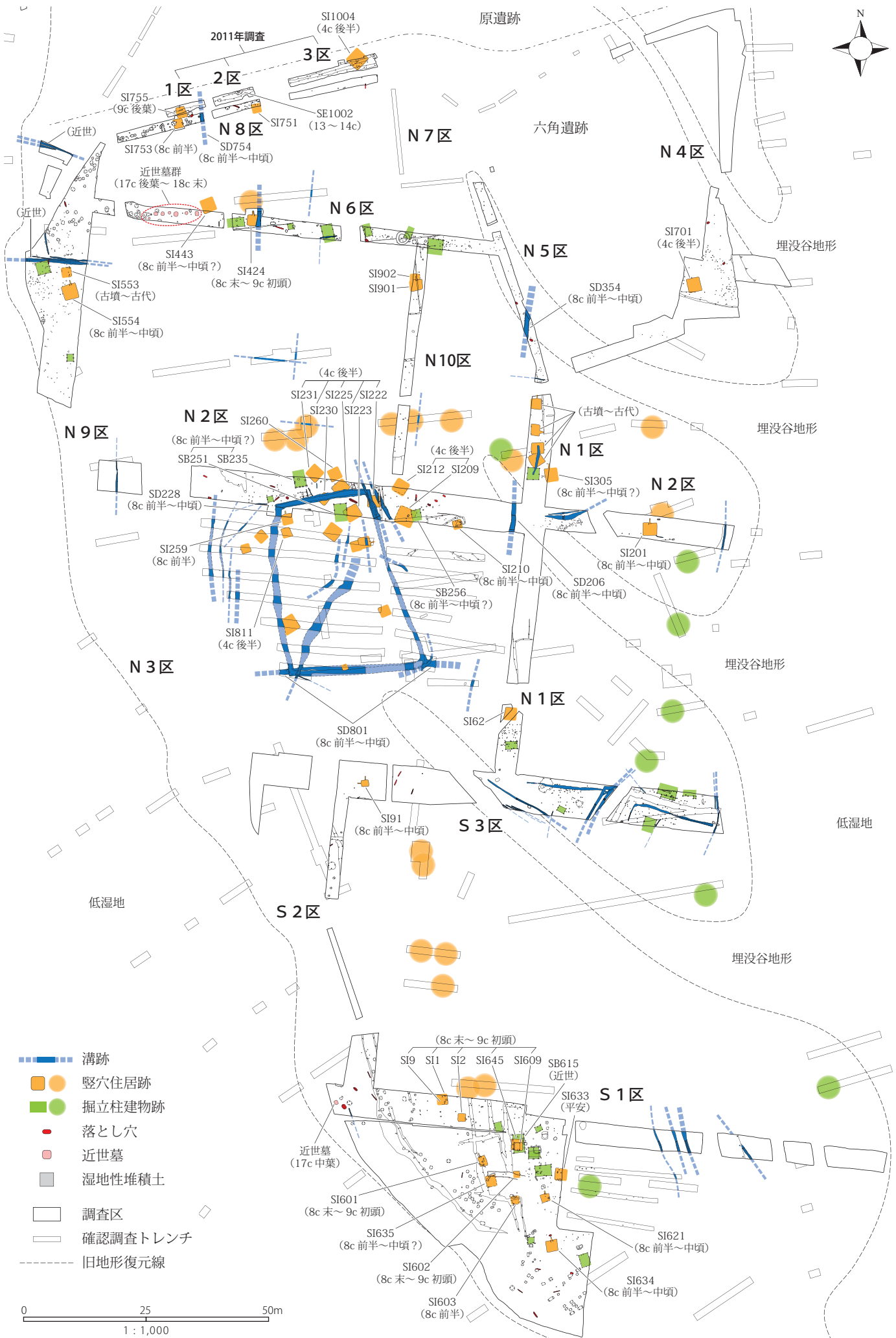
写真 71 六角遺跡 SI1004 住居跡 遺物出土状況（同右上）



写真 72 六角遺跡 SI231 住居跡 遺物出土状況（同上）



第 34 図 原遺跡遺構配置図



住居跡のうち3軒（SI259・SI603・SI753）は8世紀前半（注12）、これ以外の9軒は8世紀前半～中頃に位置づけられる。SI201・SI554住居跡で1・2回の建て替えが行なわれているほかは、重複が見られない。一辺3.0～4.5mの小・中型のものを主体に、長辺6.2mのやや大型のもの（SI554）も見られる。方位は10°前後西偏し、北壁にカマドを付設するものが多い。カマドの形態は燃烧部奥壁と住居壁面が一致し、長く伸びる煙道を持つ在り型カマド（SI91・SI201・SI259・SI305・SI603・SI634、写真77）と、燃烧部奥壁が住居壁面より張り出す関東型カマドが見られる。関東型カマドは煙道を持つもの（SI554・SI621）と持たないもの（SI210・SI753、写真78）がある。

建物跡は遺跡中央部に3棟（SB235・SB251・SB256、写真76）が分布し、住居と同様に10°前後西偏する。全体を確認したものはないが、桁行2～3間程度の小規模なものが見られる。SB235・SB251建物跡はSD228大溝跡を挟んで位置しており、いずれも1回の建て替えが行なわれている。

大溝跡は遺跡中央部の丘陵中腹を区画している。

SD228大溝跡は東西57m（南辺）、南北70m（西辺）の方形区画を形成する（写真73・74）。横断面形が上幅2.9mの逆台形を呈し、1回の掘り直しが行なわれている。内部施設については明確でないが、区画大溝北辺を挟んで位置するSB235・SB251建物跡は区画に方位を合わせて配置されており、区画大溝と同様に1回の改修が認められることから同時に機能したと考えられる。

この方形区画大溝南辺に先行して、SD801大溝跡が東西方向に64m以上延びている（写真75）。横断面形は上幅2.2mの逆台形を呈する。また、遺跡東部にはSD206・SD354大溝跡が南北方向に延びており、同一の溝跡と考えられるので延長は87m以上となる。横断面形は上幅2.3mの逆台形を呈する。東西大溝（SD801）と南北大溝（SD206・SD354）は南東側で接続して直角に近いコーナー部を形成していたと推定されるが、該当部分は後世の削平により確認できない。東西・南北大溝は遺跡中央部から北西側を大きく取り込む区画と考えられるが、北辺・西辺は未確認である。区画の内部施設は住居主体と考えられるが、住



写真73 六角遺跡 SD228 大溝跡（北東隅、8世紀前半～中頃）



写真74 六角遺跡 SD228 大溝跡（北辺、同左）



写真75 六角遺跡 SD228 大溝跡（南西隅）、SD801 大溝跡（同上）



写真76 六角遺跡 SB235 建物跡（8世紀前半～中頃？）

注12：SI259・SI603・SI753住居跡については、一次報告書（町6集）で7世紀中頃～後半に位置づけていたが、遺物の再検討の結果、国分寺下層式前半期に包括されるものと考えられるので、8世紀前半と修正し、遺構の年代観もこれに従う。



写真 77 六角遺跡 SI201 住居跡 (8 世紀前半～中頃)



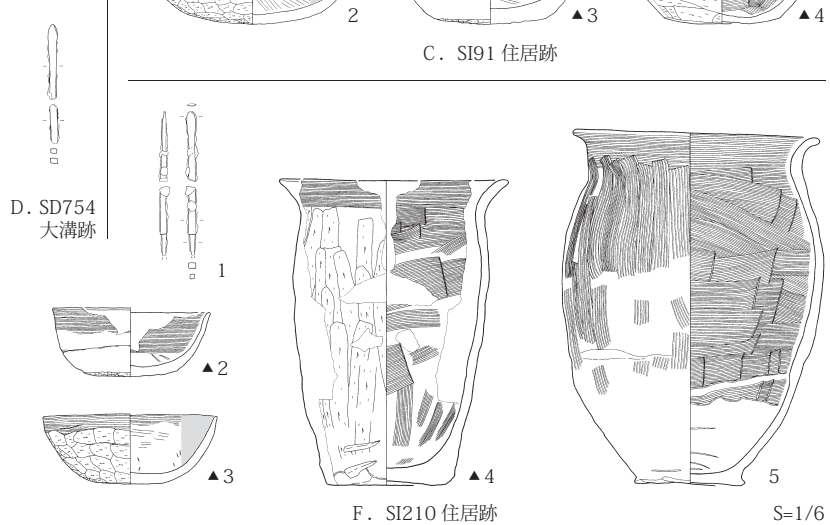
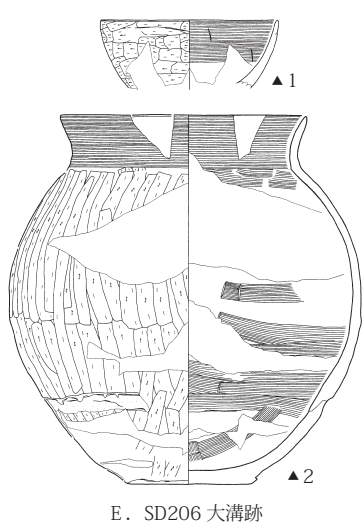
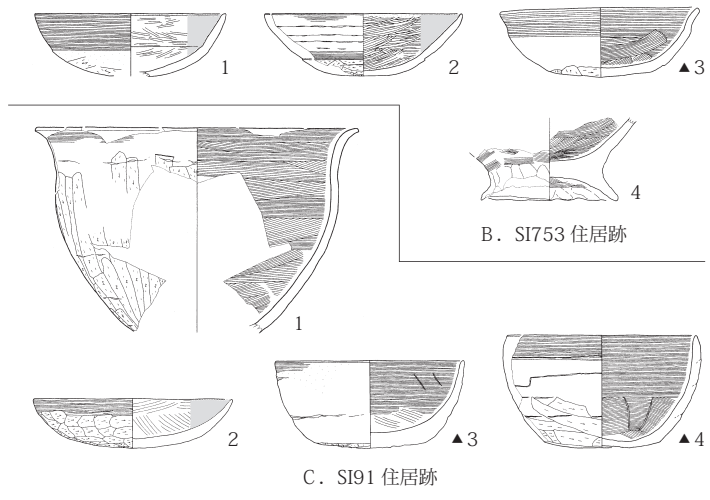
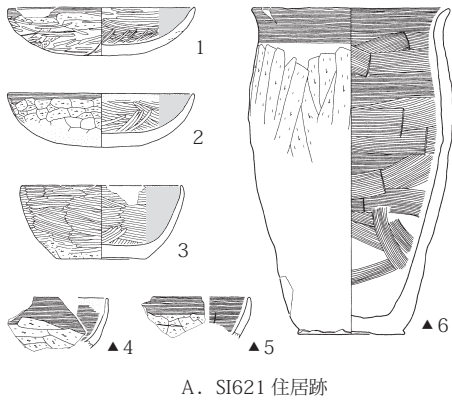
写真 78 六角遺跡 SI753 住居跡 (8 世紀前半)



写真 79 六角遺跡 SI621 住居跡出土遺物

写真 80 六角遺跡 SI210 住居跡出土遺物

写真 81 六角遺跡 SI753 住居跡出土遺物



第 36 図 六角遺跡出土遺物 (8 世紀前半～中頃)

▲ 関東系土師器

居群は丘陵全体に分布しており、方形区画大溝、東西・南北大溝ともに区画の内外で遺構分布やその内容に目立った差異は認められない。

遺物は国分寺下層式土師器、須恵器、瓦、鉄鏃などが出土している。SI91・SI210・SI621・SI753 住居跡、SD206 大溝跡などで関東系土師器を含む比較的良好な一括資料を伴う（写真 79～81）。関東系土師器は坏類のみならず甕などの煮炊具にも及んでいる（第36図）。須恵器の保有量は僅少である。

遺跡の性格については住居群からなる集落と考えられるが、①大溝による区画施設を伴うこと、②住居の方位に斉一性が見られ、一部に関東型カマドが見られること、③住居が保有した土器群の坏・甕類ともに関東系土師器を多く含むことが特徴として挙げられる。このことから、本集落は関東系移民を主要な構成員としていたと考えられる。

平安時代初頭（8世紀末～9世紀初頭） 竪穴住居跡8軒があり、六角遺跡南部（舌状丘陵南端）に7軒、北部（丘陵中腹）に1軒（SI424、写真82・83）が分布する（注13）。正方位が主体で、東壁にカマドを付設するものが多い。遺物はロクロ調整・非ロクロ調



写真 82 六角遺跡 SI424 住居跡 (8世紀末～9世紀初頭)

整の土師器、須恵器、刀子、鉄釘、砥石が出土している。

平安時代前葉（9世紀後葉） 六角遺跡北部（舌状丘陵中腹）に竪穴住居跡1軒がある（注13）。遺物はロクロ土師器、鉄釘、砥石などが出土しており、ロクロ土師器には「女」、「公口」などの墨書土器が見られる。

中世前半（13世紀中頃～14世紀） 六角遺跡北部（舌状丘陵中腹）に井戸跡1基がある。遺物は中世陶器、石皿、磨石が出土している。

近世（17世紀中葉～18世紀末） 近世墓9基があり、いずれも六角遺跡の舌状丘陵尾根筋付近に位置する。17世紀中葉～18世紀末頃の各時期に位置づけられ、丘陵南部には17世紀中葉の1基が単独で分布し、丘陵中腹には17世紀後葉の1基、18世紀前半の3基、18世紀中頃～後半の2基、18世紀末の2基の計8基が線上に並び、東側から順に設けられている。遺物は銅銭、鉄銭、青銅製和鏡（蓬莱鏡）、煙管、ガラス製数珠玉、磁器輪花皿、染付磁器碗、陶器碗（小野相馬産）、木製挽物容器（鏡箱）などが出土している。墓壇の配置や変遷から、線状に並ぶ墓群は一族墓と考えられ、副葬品の種類や量が比較的豊富なことから被葬者は豪農クラスの庶民階層と推定される。



写真 83 六角遺跡 SI424 住居跡出土遺物 (同左)

(3) まとめ

盆地北部に張り出す舌状丘陵上で、縄文時代から近世にかけての活動痕跡を確認した。主体となるのは縄文時代の狩猟場と考えられる落とし穴群、古墳時代前期（4世紀）の集落、奈良時代前半（8世紀前半～中頃）の関東系移民集落、平安時代初頭（8世紀末～9世紀初頭）の集落、近世（17世紀後葉～18世紀末）の豪農クラスの一族墓などである。

本遺跡で特筆されるのは奈良時代前半のまとまった関東系移民集落の存在であり、律令制下における移民政策との関連が窺われる。保有する関東系土師器の特徴は栃木県東部に系譜が求められるものであるが、福島県域で出土している同系譜の土器との共通性がより顕著である。このことから、本集落の構成員は関東地方からの直接的な移民ではなく、福島県域を経由した関東系移民の再移民である可能性が考えられる。

注13：SI1・SI2・SI9・SI424・SI601・SI602・SI609・SI645・SI755 住居跡については、一次報告書（第6集）で8世紀末～9世紀中葉に位置づけていた。このうち、SI755 住居跡は平成23年度の調査で得られた追加資料を含めて再検討した結果、9世紀後葉に位置づけられた（町17集）。これ以外の8軒の住居跡出土遺物については、遺物の再検討の結果、土師器坏・甕に見られるロクロ調整・非ロクロ調整の混在や、土師器坏の底部切り離し・再調整の方法から8世紀末～9世紀初頭に収まるものと考えられるので、遺構の年代観もこれに従う。

第9節 磯ヶ坂遺跡

(1) 遺構と遺物の分布

平成21年度の調査区は遺跡範囲西部の丘陵麓に西1～3区、東部の舌状小丘陵上に東3～5・8区、丘陵麓に東1・2・7・6区を設定した。平成17年度の遺構確認調査トレンチも同様の範囲を対象に設定され、少数の遺構の分布を確認している。

遺構は西部地区で少数の土坑・溝跡など、東部地区で竪穴住居跡1軒、貯蔵穴6基、落とし穴6基、近

世墓8基などを確認した(第37図)。

遺物は縄文土器、弥生土器、土師器、須恵器、石器、石製品、古銭、金属製品などが出土した。縄文土器は縄文時代早期後葉、弥生土器は弥生時代後期後半のものがある。土師器は表杉ノ入式(ロクロ土師器)である。金属製品は鉄鍋、和鋏、煙管、毛抜きなどがある。

遺構・遺物の主体は縄文～弥生時代、平安時代前葉(9世紀後半)、近世(18世紀)である。

(2) 各時期の様相

縄文～弥生時代 東部地区の舌状小丘陵上に落とし穴6基、貯蔵穴6基、土坑などが分布する(写真84)。遺構の性格から考えて複数の機能時期が想定され、縄文～弥生時代のある時期にそれぞれ狩猟場や貯蔵域として機能したと考えられる。

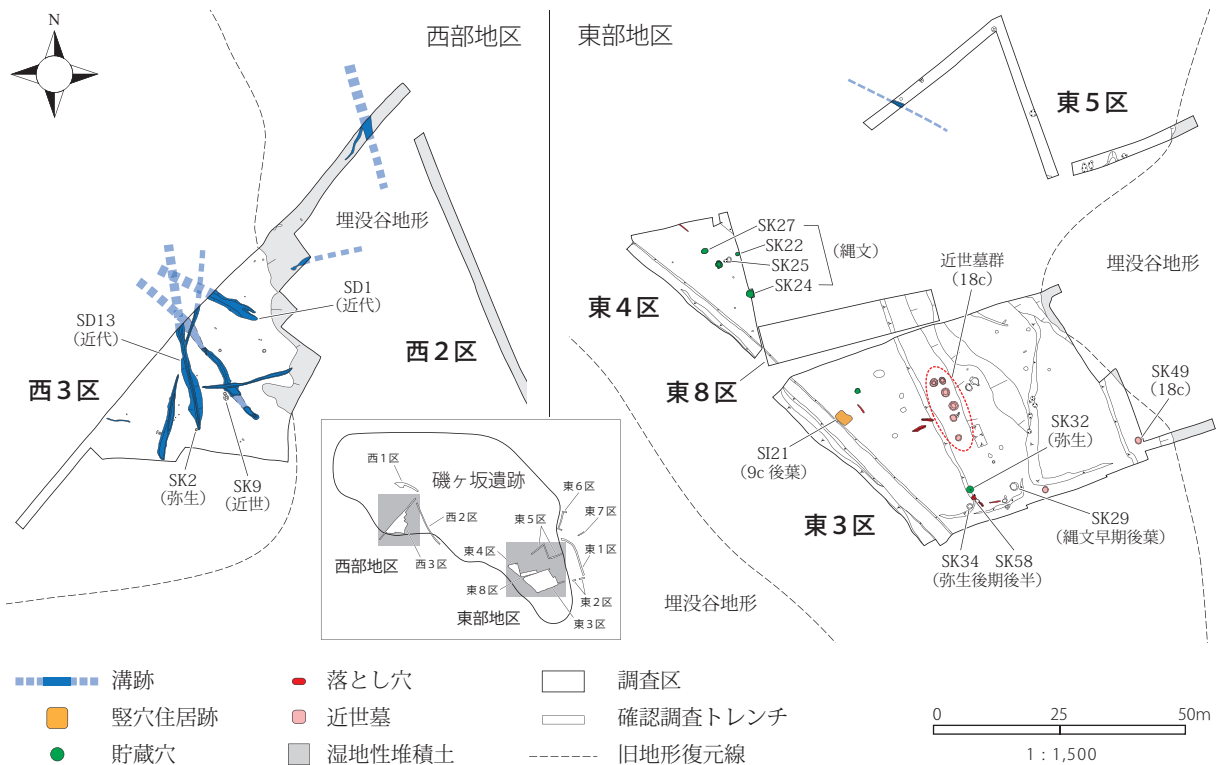
遺物はSK29土坑から関東地方の茅山下層式並行と考えられる条痕文土器(縄文時代早期後葉前半、第38図2～5)、SK34・SK58土坑から福島県域・東関東地方の踏瀬大山～十王台式併行と考えられる複合口縁壺(弥生時代後期後半、第39図)が出土している。

平安時代前葉(9世紀後半) 東部地区の舌状小丘陵上に竪穴住居跡1軒(SI21、写真85)が分布する。

遺物はロクロ土師器が少量出土している。

近世(18世紀) 東部地区の舌状小丘陵上に7基、斜面下部の湿地際に1基の近世墓が分布する。丘陵上に分布する墓壇のうち6基は尾根筋上に線状にまとまって分布する。遺物は銅銭、煙管、毛抜き、和鋏、吊耳鉄鍋、火打石、ガラス製小玉、袋物留め金具などが出土している。

墓壇の配置から、線状に並ぶ墓群は一族墓と考えられ、副葬品の種類や量が比較的豊富なことから被葬者は豪農クラスの庶民階層と推定される。また、湿地際に単独で設けられた墓壇からは鉄鍋が出土し、東北・関東・信州地域に見られる特異な葬制として知られる鍋被り墓と考えられる。



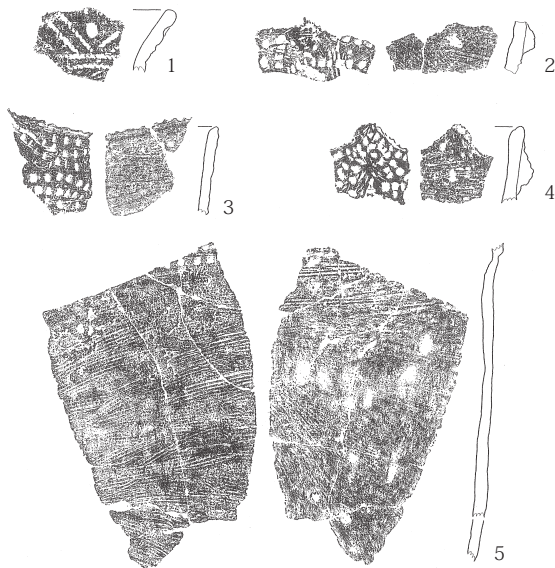
第37図 磯ヶ坂遺跡遺構配置図



写真 84 磯ヶ坂遺跡 SK32 貯蔵穴 (弥生時代)



写真 85 磯ヶ坂遺跡 SI21 住居跡 (9世紀後葉)



1 : SK26 2 ~ 5 : SK29 (縄文時代早期後葉) S=1/6

第 38 図 磯ヶ坂遺跡 SK26・SK29 土坑出土土器



(弥生時代後期後半) S=1/10

第 39 図 磯ヶ坂遺跡 SK34・SK58 土坑出土土器

(3) まとめ

盆地北奥部の舌状丘陵上で、縄文時代から近世にかけての活動痕跡を確認した。縄文時代の落とし穴群、縄文～弥生時代の貯蔵穴群、平安時代前葉（9世紀後葉）の住居跡、近世墓（18世紀）などがある。

縄文時代早期後葉の土坑から出土した条痕文土器は、単独出土に近い状況ながら宮城県域では初出の資料とみられ、当該土器群の分布を考える上で重要である。また、丘陵上に線状に並ぶ近世墓群は一族墓と考えられ、当時の村落の営みを知る上で重要である。単独墓で確認された鍋被り葬は、当時の葬送儀礼を考える上で興味深い事例である。



貯蔵穴の調査 (磯ヶ坂遺跡)

第10節 車地蔵遺跡・鍛冶屋敷遺跡・上葉の木沢遺跡

(1) 遺構と遺物の分布

車地蔵遺跡・鍛冶屋敷遺跡・上葉の木沢遺跡は、それぞれ盆地東縁から西へ張り出す舌状小丘陵上に立地している。平成17年度の調査区は、各丘陵先端部の湿地際に車地蔵遺跡1～3区、鍛冶屋敷遺跡1・2区、上葉の木沢遺跡1～3区を設定した。これに先立つ平成14年度の遺構確認調査トレンチも同様の範囲を対象に設定されている。遺跡範囲西縁の各調査区・トレンチで湿地性堆積土を確認し、遺跡西縁の旧地形が把握できた。遺構は丘陵先端部の微高地部で分布が確

認された。なお、中葉の木沢遺跡でも調査区を設定したが、遺構は確認されなかった。

確認した遺構は車地蔵遺跡で掘立柱建物跡5棟、水場遺構1基、溝跡21条など、鍛冶屋敷遺跡で掘立柱建物跡10棟、水場遺構1基、溝跡19条など、上葉の木沢遺跡で土坑13基、溝跡1条などである(第40図)。

遺物は中世陶器、近世陶磁器、漆器、木製品、石製品、古銭、土師器、須恵器、縄文土器などが出土した。近世陶磁器は中国産、瀬戸美濃産などがある。

遺構・遺物の主体は近世(16～17世紀)である。

(2) 各時期の様相

縄文時代 上葉の木沢遺跡に落とし穴2基が分布する。平面形が溝状で横断面形がV字形を呈する。盆地東縁から北縁にかけての六角遺跡、前戸内遺跡などで確認されているものと共通する形態であり、盆地東縁部も狩猟場として利用されていたことが窺える。

古墳時代前期(4世紀) 上葉の木沢遺跡に土坑1基があり、塩釜式土師器が出土している。

古代 車地蔵遺跡に掘立柱建物跡2棟と、これに伴う雨落溝1条がある(写真86)。建物跡はいずれも二間四方で、方位は15°西偏する。遺物は調査区内の遺構確認面からロクロ土師器が出土している。

中世 車地蔵遺跡に掘立柱建物跡2棟があり、全体を



写真86 車地蔵遺跡SB41建物跡・雨落溝跡(古代)

確認した1棟は桁行3間、梁行1間の南北棟である(写真90)。方位はいずれも6°東偏する。遺物は新しい遺構堆積土から在地産の中世陶器甕が出土している。

近世(16～17世紀) 鍛冶屋敷遺跡に区画溝を伴う掘立柱建物跡群があり、16～17世紀の屋敷跡と考えられる(写真89・90)。また、車地蔵遺跡には水場遺構(SX28)があり、17世紀の屋敷跡に伴うものと考えられる。

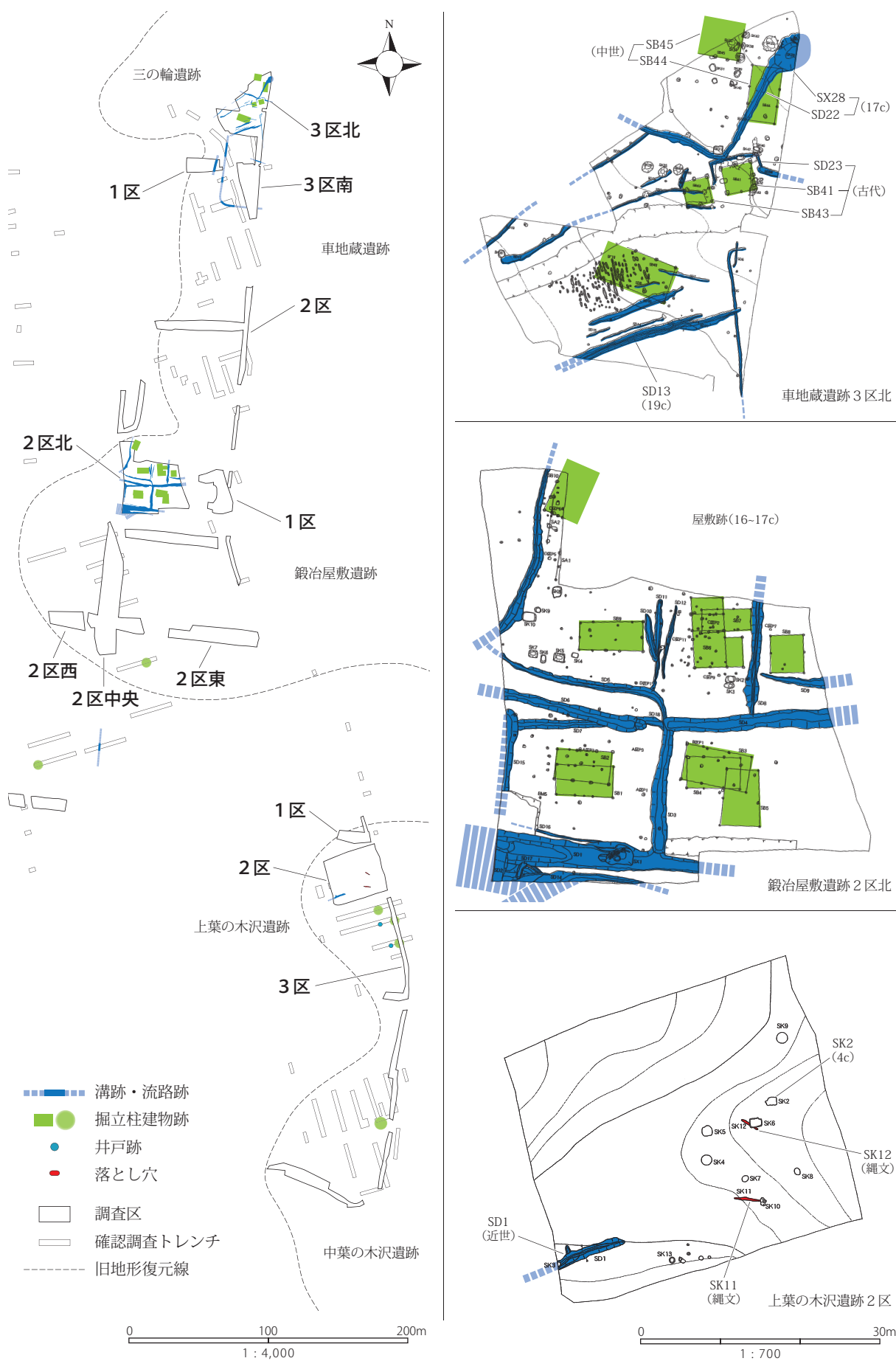
車地蔵遺跡のSX28水場遺構は、湧水のある谷部に掘られた水溜めに杭と横木、裏込石で足場を構築している(写真87)。SD22溝跡が接続しており、洗い場としての機能が考えられる。遺物はこね鉢、挽物皿、へら、箸、下駄、箆などの木製品、三引両文や鳥文が描かれた漆器椀、中国産の染付碗、青磁碗、志野織部の菊皿、瀬戸美濃の播鉢、茶臼、人面形石製品などが出土した。日常生活用具に加えて、高級品・嗜好品が多く含まれることから、屋敷の居住者は比較的裕福な階層の人物と推定される。

鍛冶屋敷遺跡の屋敷跡は、三つ以上の溝区画内にそれぞれ建物を配置する。遺物は下駄、曲物などの木製品、瀬戸美濃産・唐津・志野織部の丸皿、志野の小鉢、茶臼などが出土しており、車地蔵遺跡SX28水場遺構の出土遺物と類似することから、両遺跡で確認した屋敷の居住者には関係性が窺える。

(3) まとめ

盆地東縁に張り出す舌状小丘陵先端部の微高地上で、縄文時代から近世にかけての活動痕跡を確認した。主体となるのは近世(16～17世紀)の屋敷跡である。このほか、縄文時代の落とし穴、古墳時代の土坑、古代・中世の建物跡などがある。

近世の屋敷跡は、隣接する車地蔵遺跡・鍛冶屋敷遺跡の2か所に営まれている。出土遺物には高級品・嗜好品を多く含むことから居住者は比較的裕福な武士階級の人物と推定され、17世紀前半(1604-1652)に小村崎村に居住したとされる秋保氏の家臣に関係する可能性が推測される。



第40図 車地蔵遺跡・鍛冶屋敷遺跡・上葉の木沢遺跡遺構配置図



写真 87 車地藏遺跡 SX28 水場遺構 (17世紀)



写真 88 車地藏遺跡 SX28 水場遺構出土遺物 (同左)



写真 89 鍛冶屋敷遺跡 近世の屋敷跡 (16～17世紀、北から)



写真 90 鍛冶屋敷遺跡 SB1・SB2 建物跡 (中世)



堀跡の調査 (西小屋館跡西辺)



発掘調査成果見学会 (前戸内遺跡)

第5章 考察

第1節 円田盆地における遺跡群の動態と特質

円田盆地北部に立地する14遺跡の発掘調査成果について、一次報告書の内容を基礎としながら再検討を加え、第4章で各遺跡における各時期の様相を整理した。また、盆地南部でもこれまでにいくつかの遺跡が発掘調査されている。東西約1.5km、南北約3.5km

の円田盆地に密集する各遺跡に残された活動痕跡は相互に密接な関連性を有し、当時の円田盆地周辺における歴史的動向を反映していると考えられる。ここでは、第4章の成果を基にして遺跡群全体を通時的に俯瞰し、円田盆地の地域的特性について考察する。

(1) 遺跡群の動態

円田盆地の主要な遺跡について、把握された活動痕跡の動態を整理した(第4表)。以下、これに沿って各時期の様相を述べる。

なお、飛鳥・奈良時代は律令国家形成期にあたる。円田盆地は7世紀後半頃に建評された「柴田評」に属し、大宝元年(701)年の大宝律令によって「柴田郡」に転換されたと推定される。また、養老5年(721年)には柴田郡の二郷を分割して「苅田郡」が建置され(続日本紀)、円田盆地は苅田郡に属した可能性が高いと考えられる。これを踏まえて、円田盆地の遺跡群との関連性が想定される古代の柴田・苅田郡域の遺跡動態(第41図)を参照しながら述べる。

① 縄文時代

盆地北部の広範囲に落とし穴群が分布し、盆地南部の中組遺跡でも確認されている。盆地北部から中央部へ向かって張り出す舌状丘陵上の六角遺跡・原遺跡、盆地北奥部の舌状丘陵上の磯ヶ坂遺跡などでは列状に配置された落とし穴群を確認しており、追い込み猟の狩猟場として利用されたことが窺える。

なお、遺構の性格上、遺物を伴うものは少なく、狩猟場としての機能時期を直接的に明らかにすることは難しい。後述するように弥生時代中期以降には生活・生産の場となったことが窺われることから、狩猟場となったのは概ね縄文時代のことと推測される。また、盆地西側の高木丘陵上には縄文時代中期前葉から後期初頭にかけて各時期の拠点的な集落が営まれており、これらの集落の人びとが円田盆地周辺で組織的な狩猟活動を行っていた可能性も考えられる。

これ以外の遺構としては、磯ヶ坂遺跡で縄文時代早期後葉の土坑群、窪田遺跡で後期末～晩期とみられる

住居跡数軒を確認しており、それぞれ詳細は不明ながら小規模な集落形成が窺える。

② 弥生時代

盆地全域で弥生土器(円田式・天王山式・踏瀬大山～十王台式期)が出土し、弥生時代中期に入って活動が活発化したことが窺える。都遺跡では円田式の土器片に靱殻圧痕が見られる。遺構は磯ヶ坂遺跡・愛宕山遺跡で弥生時代の貯蔵穴、窪田遺跡で中期の土坑、磯ヶ坂遺跡で後期の土坑を確認しており、台遺跡で確認した水田跡は弥生時代に遡る可能性がある。

弥生時代前期の活動痕跡は今のところ盆地内では未確認である。町内では青麻山東麓にある鍛冶沢遺跡で、縄文時代晩期中葉から継続する墓域で弥生時代前期(青木畑式期)の再葬墓が確認されている(宮城県教育委員会2010)。これを踏まえれば、当時の蔵王町周辺では弥生時代前期までは縄文時代の生業・居住様式が継承されており、弥生時代中期以降に稲作を含む生業を受容して円田盆地の低地部周辺への集落形成が進んだと考えられる。

③ 古墳時代

古墳時代前期(塩釜式期、4世紀)には盆地内の舌状丘陵上に集落が形成され、盆地南部では集落背後の丘陵尾根上に古墳が築造される。大橋遺跡の集落は4世紀前葉、六角遺跡・立目場遺跡などの集落は4世紀中頃～後半と考えられる。古墳は盆地西側の尾根上に八幡山1号墳(方墳)・2号墳(円墳)、東側の尾根上に夕向原1号墳(前方後円墳)・2号墳(円墳)、古峯神社古墳(前方後円墳)がある。いずれも未調査であるが、立地や墳丘形態などから八幡山1号墳は4世紀中頃、夕向原1号墳・古峯神社古墳は4世紀末

～5世紀初頭の築造と考えられる（藤沢 2000）。

中期（南小泉式・引田式期、5世紀）には前期に集落展開が見られた舌状丘陵上に加えて、盆底面の微高地上にも集落が形成され、盆地南部では盆底面へ向かって張り出す舌状丘陵の先端部に古墳が築造される。丘陵上の集落としては5世紀前葉の中沢A遺跡、5世紀中頃～後半の諏訪館前遺跡などがある。微高地上の集落としては5世紀中頃の都遺跡、5世紀中頃～

後半の窪田遺跡・十郎田遺跡などがあり、5世紀中頃以降に盆地北部の微高地上へ集落域が拡大したことが窺える。台遺跡では5世紀代に集落・水田域を形成している。古墳は盆地西側の丘陵上に宋膳堂古墳、天王古墳、鉾附神社古墳（すべて円墳）がある。いずれも未調査であるが、円筒埴輪を伴う宋膳堂古墳・天王古墳は5世紀中頃、鉾附神社古墳は5世紀末頃の築造と考えられる（藤沢 2000）。

第4表 円田盆地における遺跡群の動態

	縄文	弥生	古墳			飛鳥 奈良		平安				中世				近世			
			4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19世紀	
盆地北部	都遺跡	狩猟場	集落		開墾集落	官衙?							屋敷?						
	新城館跡	狩猟場				官衙関連?	大溝区画?												
	窪田遺跡	狩猟場	集落	集落		官衙関連?	集落						屋敷?						
	十郎田遺跡			集落		柴田柵?	集落							屋敷					
	西小屋館跡														方形館(方一町)				
	西屋敷遺跡							官衙関連?							屋敷(半町四方)				
	前戸内遺跡	狩猟場					移民集落	居宅・集落						屋敷?				墓域	
	戸ノ内遺跡	狩猟場					移民集落	集落							屋敷				
	六角遺跡	狩猟場	集落				移民集落	集落	集落					屋敷?				墓域	
	原遺跡	狩猟場	集落																
	磯ヶ坂遺跡	狩猟場	集落?					集落											墓域
	車地藏遺跡													屋敷?				屋敷	
	鍛冶屋敷遺跡																	屋敷	
	上葉の木沢遺跡	狩猟場																	
	諏訪館横穴墓群							横穴墓?											
	諏訪館前遺跡		集落	集落															
	盆地南部	堀の内遺跡		集落	集落			移民集落	集落										
		東山遺跡							集落										
		赤鬼上遺跡							集落										
中組遺跡		狩猟場																屋敷	
愛宕山遺跡			集落?																
中沢A遺跡				集落					集落										
立目場遺跡				集落															
大橋遺跡			集落																
塩沢北遺跡							集落												
台遺跡				集落・水田	集落?・水田			水田											
戸の内脇遺跡								集落						水田					
古墳群	八幡山・夕向原1号・古峯神社 宋膳堂・天王・鉾附神社																		

※表示濃度は発掘調査で確認した遺構・遺物によって示される活動痕跡の密度および時期比定の確度に比例する。

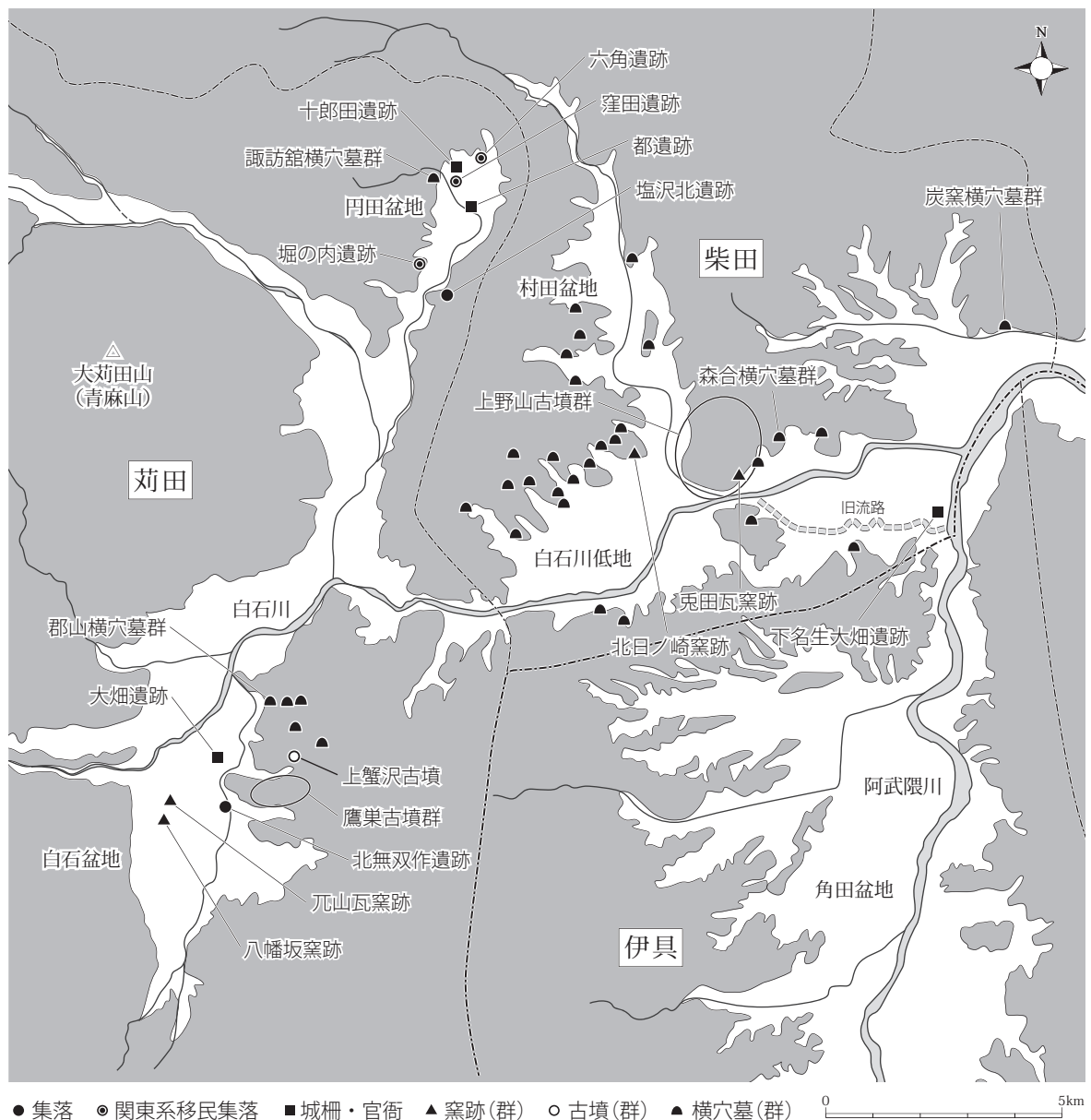
後期（住社式・栗圀式前半期、6世紀～7世紀前半）の活動は極めて低調である。6世紀代では窪田遺跡で6世紀前半の須恵器坏が1点出土しているのみであり、遺構の確認は皆無である。なお、盆地南部の台遺跡では7世紀前半頃と見られる水田跡が確認されており、この時期には集落を形成していた可能性がある（宮城県教育委員会 1989）。

通観すると、古墳時代前期以降に活発な集落形成が見られ、中期中頃以降には集落域が拡大したことが窺えるが、後期に入るとこれらの集落は断絶し、一転し

て空白期となる。その後、7世紀前半には集落形成が再開された可能性がある。

④飛鳥時代

7世紀中頃以降には再び集落形成が活発化する。盆地南部の塩沢北遺跡では、舌状丘陵上に集落が形成される。保有する土器群は典型的な栗圀式土師器であり、在地の自然集落と考えられる。これに対して、盆地北部の都遺跡・十郎田遺跡・窪田遺跡では盆底面の微高地上に特殊集落群が展開する（注14・15）。



第41図 柴田・萩田郡域における律令国家形成期の主要遺跡

注14：地域内の在地住民による自然発生的な集落を自然集落、域外の政治的勢力が関与して計画的に設けられた集落を特殊集落と呼称する。
 注15：7世紀後半にこれらの特殊集落（都遺跡・十郎田遺跡・窪田遺跡）が出現する盆地北部の微高地は、いずれも5世紀中頃～後半に新しく集落が形成されている。その後に6世紀～7世紀前半の空白期を挟むものの、5世紀中頃～後半の集落立地と、7世紀後半の計画集落出現との間に何らかの関連性を想定することもあるいは可能と考えられる。

白石盆地では、6世紀から7世紀後半にかけて継続的に古墳が築造されている（6世紀：鷹巣20号墳、7世紀前半：上蟹沢古墳、～7世紀後半：鷹巣古墳群）。村田盆地・白石川低地では7世紀後半に大規模な群集墳（上野山古墳群）や横穴墓群（炭窯横穴墓群など）が出現し、8世紀まで継続する。また、白石川低地では須恵器生産（北日ノ崎窯跡）が開始される。

円田盆地・村田盆地周辺は6世紀～7世紀前半の集落・古墳築造が認められない地域である。こうした在地勢力の空白域に対して移民を伴う特殊集落群を造営し、律令支配拠点を形成したと考えられる。

都遺跡では微高地の周囲に材木堀・大溝を巡らせた不整形区画を伴う囲郭集落が形成され、内部施設は住居主体と見られる。集落の西辺には運河を伴っていたと考えられる。また、十郎田遺跡でも微高地の周囲に材木堀・大溝を巡らせた囲郭集落が形成されるが、区画の形状は斜め方位の正確な長方形を描き、より高い計画性が窺える。集落の南辺は旧河道に面しており、河川交通との関連が窺える。内部施設は住居主体ではあるが、掘立柱建物を含み、南東隅の一角では倉庫と見られる総柱建物が院を形成している可能性がある。窪田遺跡では区画施設は確認されていないが、掘立柱建物を伴う集落が形成されている。

これらの微高地上の集落は区画施設や掘立柱建物の存在から政治・行政的な性格が示唆され、計画的に造営されたものと考えられる。集落が保有する土器群は在地の栗罎式土師器を基本としながら、主に坏類に関東系土師器を多く組成する。十郎田遺跡では住居の約半数に関東型カマドが見られ、集落の構成員に関東系移民が含まれていたことを強く示唆している。

囲郭集落は、律令支配を前提とした城柵・官衙の設置や維持と密接に関わる施設であり、一定期間を経たのち隣接地または同位置に城柵や官衙が造られたと考えられる（村田2009）。こうした集落は仮想的な性格が強いとされており、不整形区画からなる都遺跡の囲郭集落が該当しよう。

これに対して、より規格的な長方形区画を形成する十郎田遺跡の囲郭集落は仙台市郡山遺跡Ⅰ期官衙などとの関連性が窺われ（注16）、内部施設に院を構成す

る可能性のある掘立柱建物を含むことから官衙的な性格が窺える。このことから、十郎田遺跡の集落は柴田評の建評に伴って設置された城柵（推定「柴田柵」）である可能性が考えられる。

なお、これらの特殊集落は窪田遺跡を除いて7世紀後半のうちに廃絶する。7世紀末以降になると戸ノ内遺跡・六角遺跡・堀の内遺跡に新たに関東系移民集落が出現し、白石川低地（兎田窯跡）と白石盆地（兀山窯跡）では須恵器の生産に加えて新たに瓦の生産が開始される。これらは8世紀初頭の郡制施行に向けた新たな動きと考えられる。

都遺跡北部には一辺約88mの正方位の溝区画を伴った建物群が推定され、7世紀末～8世紀前半の瓦を伴った遺構群の可能性はある。窪田遺跡では正方位を基調とした掘立柱建物を伴う集落が存続する。

都遺跡北部の正方位区画を伴う建物群は、前代の囲郭集落に後続することから、官衙の可能性が高いと考えられる。7世紀後半頃に建評されたと推定される柴田評は8世紀初頭（701年）の郡制施行（大宝律令）によって柴田郡となり、8世紀前半（721年）には柴田郡から二郷を分割して苅田郡が建置された。苅田郡衙の所在地は、倉庫院が確認されている白石盆地の白石市大畑遺跡と考えられていることから（宮城県教育委員会1995）、都遺跡の官衙は8世紀初頭の郡制施行に合わせて造営された最初の「柴田郡衙」に比定できると考えられる（注17）。

また、窪田遺跡の集落でも、正方位を基調とした掘立柱建物の存在などから官衙的機能が窺える。都遺跡との近接した位置関係から、都遺跡の官衙と一体的な機能を担う実務官衙が営まれた可能性が考えられる。

⑤奈良時代

8世紀前半（721年）に柴田郡から二郷を分割して苅田郡が建置され、円田盆地は苅田郡域に属したと考えられる。苅田郡が建置された時の「二郷」は、遺跡分布から円田盆地と白石盆地に比定されるであろう。

苅田郡域のうち、白石盆地では8世紀前半に苅田郡衙が造営され（大畑遺跡）、近隣で須恵器・瓦の生産が継続されたと考えられるほか、横穴墓の築造も継

注16：仙台市郡山遺跡Ⅰ期官衙は地形に合わせたと見られる斜め方位で造営され、直線的な材木堀によって長辺604m以上、短辺295.4mの長方形区画を形成し、面積17.8ha以上の規模である（仙台市教育委員会2005）。十郎田遺跡の区画施設も地形に合わせた斜め方位で造営され、直線的な材木堀によって長辺312m、短辺144mの長方形区画と、南東辺に長辺58m、短辺56mの方形区画を形成し、面積約4.8haである。長方形区画の長辺・短辺の寸法で見ると、十郎田遺跡の区画施設は郡山遺跡Ⅰ期官衙の約半分の規模で造営されている。

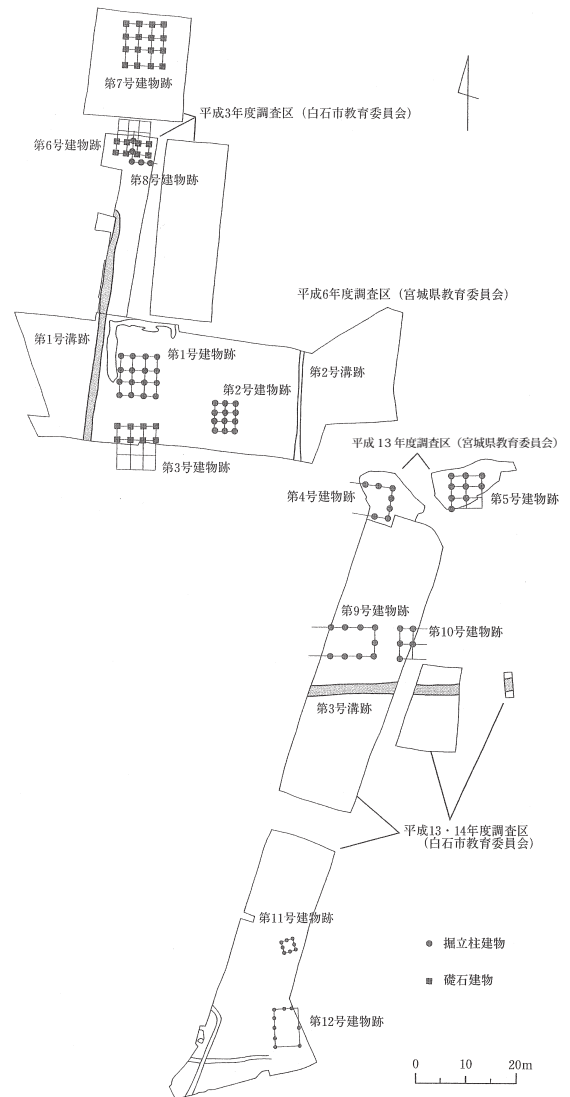
注17：都遺跡の官衙は8世紀中頃までは存続していない可能性が高く、苅田郡分置に伴って「柴田郡衙」が東側の村田盆地あるいは柴田町周辺の白石川低地へと移転していると考えられる。未調査ではあるが、白石川旧河道と阿武隈川の合流点にある柴田町下名生大畑遺跡を地名や地理的条件から「柴田郡衙」に比定する見解があり（相原2012）、都遺跡の官衙に後続するものとも考えられる。

続したであろう。大畑遺跡では関東系土師器が出土し、埼玉県北西部から群馬県地域に出自を持つものと考えられている（佐藤 2008）。今のところ1点のみの確認ではあるが、仙台平野以北で多く確認されている関東系土師器と共通し、円田盆地とは異なる関東系移民の関与が窺える。一方、円田盆地の戸ノ内遺跡・六角遺跡・堀の内遺跡では、関東系土師器・関東型カマドを安定的に伴う移民集落が8世紀前半～中頃にかけて最盛期を迎える。戸ノ内遺跡・六角遺跡では集落内に大溝区画を伴う。前戸内遺跡では8世紀中頃～後半に土器製作・小鍛冶などを行なう移民集落が営まれていたと考えられる。また、柴田郡域の村田盆地・白石川低地には、都遺跡に後続する柴田郡衙が新たに造営されたと考えられる。横穴墓の築造も盛んに行なわれる（森合横穴墓群など）。

円田盆地の移民集落は7世紀末以降に出現し、都遺跡の官衙造営との関連が窺えるが、集落形成のピークは8世紀前半～中頃にあり、官衙の造営・維持とは異なる目的も考慮する必要がある。これらの移民集落が保有する関東系土師器の特徴は栃木県東部に系譜が求められるものであるが、郡山盆地の福島県本宮市高木遺跡群（福島県教育委員会 2002）など福島県域で出土している同系譜の土器との共通性がより顕著である。このことから、円田盆地の移民集落の構成員は関東地方からの直接的な移民ではなく、福島県域を経由した再移民である可能性が考えられる。

なお、8世紀前半には陸奥国に関東系移民の大規模な移配が行なわれた（注18）。これらの移民は主に宮城県北部へ移配され、黒川以北十郡（注19）の建郡に伴う城柵の造営・維持に携わったものと考えられている。円田盆地の移民集落は、このような関東地方か

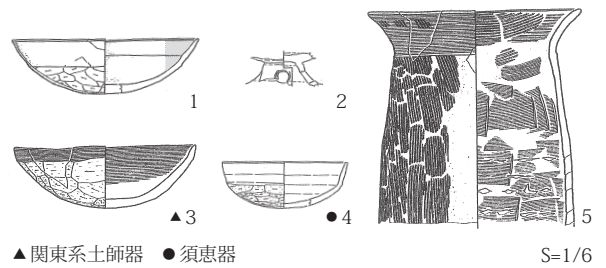
らの直接的な移民とは区別されるものと考えられ、これとは異なる政策か、あるいは運動して、陸奥国内に移配された関東系移民の再移民が行なわれていたことを示すものと考えられる。



遺構配置模式図 (宮城県教育委員会 2003)

	村田盆地～白石川低地	円田盆地	白石盆地
I期：柴田建郡期 (7世紀中頃～後半)	横穴式石室墳・横穴墓 関東系移民? (上野山古墳群) (炭室横穴墓群など) 窯業生産 (北日ノ崎窯跡)	横穴墓 (諏訪館横穴墓群?) 柴田柵設置 関東系移民 (十郎田遺跡)	横穴式石室墳・横穴墓 (上蟹沢古墳:7世紀前半?) (鹿巣古墳群:~7世紀後半) (郡山横穴墓群など?)
II期：郡制移行期 (7世紀末～8世紀初頭)	窯業生産 (死田瓦窯跡)	柴田郡衙設置 関東系移民 (都遺跡・窪田遺跡) 窯業生産?	窯業生産 (元山瓦窯跡) (八幡坂窯跡)
III期：苅田建郡期 (8世紀前半)	柴田郡衙設置 (下名生大畑遺跡?)	関東系移民集落群 (六角遺跡・窪田遺跡・ 堀の内遺跡)	苅田郡衙設置 (白石大畑遺跡?)

第42図 柴田・苅田郡域における律令国家形成期の遺跡群変遷 (試算)



出土土器 (平成19年度確認調査地点①・白石市教育委員会 2008)

第43図 白石市大畑遺跡

注18:「相模、上総、常陸、上野、武蔵、下野の六国より富民千戸を移して陸奥に配す」〔続日本紀 霊龜元年(715年)5月甲戌条〕など。

1,000戸は20郷分に相当する。また、一戸当たりの戸口は平均20人とされているので、1,000戸は約2万人に相当する。

注19: 宮城県北部の牡鹿、小田、新田、長岡、志太、玉造、富田、色麻、賀美、黒川の各郡を指す。この地域ではすでに7世紀後半から移民が行なわれ部分的に建評されていたが、霊龜元年(715年)の大規模な移民によって再編成された(今泉 2005)。

現在までのところ、円田盆地で確認されている集落はいずれも関東系土師器を保有する移民集落であり、在地の自然集落は未確認である。地域全体が移民集落によって構成されているようでもあり、まとまった移民による地域再編の意図が窺える。一方で、苅田郡衙が造営される白石盆地は6世紀を経て継続する在地勢力が存在したと考えられる地域であり、円田盆地とは異なる集落構成が推定される。以上のことから、苅田郡の建郡は、在地勢力の起用と合わせてまとまった移民による地域再編を前提としたものであり、陸奥国内の生産力および軍事力増強政策の一環として行なわれた可能性が考えられる。

⑥平安時代

8世紀末～9世紀初頭になると、盆地全域に中・小規模の新しい集落が出現する（窪田遺跡・十郎田遺跡・前戸内遺跡・六角遺跡・堀の内遺跡など）。これらは奈良時代の集落立地と共通するが、空白期を挟んでおり前代との継続性が認められない集落が多い。このうち、前戸内遺跡の集落は9世紀前葉～中葉に豪族居宅を伴った拠点集落に発展する。また、9世紀中葉には東山遺跡など、9世紀後葉には六角遺跡、磯ヶ坂遺跡などでも集落が営まれるが、概して集落の存続期間は短い。9世紀代を通じて維持されたと考えられるのは十郎田遺跡の集落のみで、10～12世紀に位置づけられる確実な集落はほぼ皆無となる。

8世紀末～9世紀初頭の集落のうち、戸ノ内遺跡・六角遺跡の集落では正方位で東壁にカマドを付設する住居が多く斉一的であり、住居北壁にカマドが付設される一般的な住居のあり方からすると特異な印象を受ける。窪田遺跡・十郎田遺跡では暗渠溝や外延溝を持つ住居が多く、いずれも盆底面の微高地に立地することから住居内の湧水処理を意図したものと考えられる。また、十郎田遺跡の住居では鞆羽口が出土しており、小鍛冶を行なう工房の存在も窺える。

前戸内遺跡では8世紀末～9世紀初頭に小規模な集落が営まれ、9世紀前葉～中葉には拠点集落に発展する。集落の一角に主屋・倉庫・竈屋などと推定さ

れる建物・住居が官衙風建物群を構成しており、郷長・百姓クラスの豪族居宅と考えられる。住居群とその周辺では鉄滓や鉄製品が出土しており、居宅の運営を補完した工人や農業従事者の集落と考えられる。やや規模の大きい正方形建物も見られ、仏堂などの可能性を想起させる。平安時代の律令期型在地拠点集落の様相を良く示していると考えられる。

このほか、断片的ながら官衙あるいは寺院との関係を窺わせる遺構・遺物も見られる。都遺跡では「大寺」・「造舎」などの墨書土器（9世紀）が見られ、寺院との関連が窺える。近接する新城館跡では9世紀代の可能性がある大溝区画を確認している。西屋敷遺跡では、区画施設を伴う建物群や、廃絶儀礼を行なった井戸跡を確認している。十郎田遺跡では、直径1.2mの略円形の柱穴で、柱の直径36cmと推定される大型建物跡を確認しており、柱材の年代測定結果から機能時期は10世紀代と推定される。

8世紀末～9世紀初頭の集落群は、前代との継続性を持たずに突如として出現し、集落構成に斉一性が見られる。これらの集落が保有する土器群に外来の要素は見られないものの、小地域内における同時多発的な出現過程から見れば在地の自然集落ではなく、少なくとも円田盆地以外の地域から移転してきた集団の集落と考えられる。この時期は宮城県北部を中心に執拗な蝦夷征討が繰り返された「三十八年戦争（注20）」の後半期にあたる。陸奥出羽両国内は度重なる征討政策で疲弊し、「民居希少」である上に「人民散走」という状況に陥っており（注21）、陸奥出羽国内のみならず全国の両国出身の浮浪人を強制的に本郷へ帰還させる政策が採られた（注22）。8世紀末～9世紀初頭の集落形成は、陸奥国の経営に関わるこうした政治的背景を反映したものである可能性が考えられる。これらの集落群は9世紀前葉～中葉には豪族居宅を伴った拠点集落に集約されて発展を遂げたが、その後の継続性はない。10世紀以降の集落不存は、まさに「戸口希少」、「邑無_二居人_一」という状況であり（注23）、陸奥出羽両国での公民の集住・定着策の破綻（吉沢1985）を如実に物語るものと考えられる。

注20：「今官軍一挙して、寇賊 遣るもの無し。（中略）宝亀五年より、当年に至るまで、惣べて卅八歳、辺寇屢動き、警口絶ゆることなし」（日本後紀 弘仁2年（811年）閏12月辛丑条）

注21：「陸奥出羽両国の土地は広遠であるが、民居は稀少である上、百姓や浪人の開墾した墾田は国司が巡検した際にすべて収公してしまうので、人民は心静かではなく、土地を離れて散り散りとなっている」（日本後紀 弘仁2年（811年）正月甲子条）

注22：「天応2年（782）年間正月26日に左右京職に下した符には、陸奥出羽の人で京にあるものは、その職を問わず皆本郷に返せ（中略）。この論理は今（寛平5年：893）でも適用するものであるから（後略）」（寛平5年（893年）7月19日 太政官符）

注23：「今この国の国域は広遠であるが、戸口は希少であり、巡検しても村に人は無い。その理由を尋ねると、課役を避けんとするが為に他郷に逃げ入ったということである」（寛平5年（893年）7月19日 太政官符）

⑦中世

13世紀中頃になると、盆地内の微高地上にある十郎田遺跡・窪田遺跡・前戸内遺跡などで溝による方形区画を伴う屋敷が営まれる。これらの屋敷は常滑産・在地産の中世陶器を保有し、存続期間は14世紀後半頃までと見られる。また、13世紀後半には西小屋館とそれに付随する屋敷（西屋敷遺跡）が営まれ、16世紀頃まで存続したと考えられる。西小屋館は堀跡の一部を調査したのみで内部は未調査であるが、土塁と堀跡が現存する。近隣の調査事例から見ると、大規模な土塁と堀は15世紀頃に整備された可能性がある。16世紀には鍛冶屋敷遺跡・戸ノ内遺跡に屋敷が営まれ、17世紀にかけて存続する。

西小屋館は方一町、隣接する屋敷は半町四方を基調とした縄張りであることから、西小屋館の館主は地頭層出身の有力国人層であり、隣接する屋敷には国人領主の家臣層が居住したと考えられる。十郎田遺跡では、屋敷地の一角で13世紀中頃の規格的な木製挽物荒型が多量に出土し、流通品としての木地生産が行なわれていたことが窺える。

13世紀中頃から14世紀後半にかけて円田盆地に流通する在地産中世陶器の多くは、白石市東北窯跡（白石市史編纂委員会1976）・一本杉窯跡（宮城県教育委員会1996）などからなる白石窯で生産されたものと考えられる。白石窯の製品は宮城県中南部から福島県北部の広い範囲で出土しており活発な生産・流通が窺えるが（藤沼1976・1977、菊地1996）、一定数の移入品（常滑産）も伴っている。西小屋館跡・西屋敷遺跡では在地産・常滑産の中世陶器に加えて古瀬戸産の天目茶碗・仏花瓶、中国青磁碗などが出土しており、内容が豊富である。

文治5年（1189年）の奥州征伐によって奥州藤原氏が滅亡した後、東北地方には源頼朝から地頭職を与えられた関東御家人の移住があり、在地支配体制の再編が行なわれたと考えられる。円田盆地を含む宮城県南部地域は文治5年以前まで奥州藤原氏の支配下にあったが（注24）、13世紀中頃に大規模な窯業生産が開始されていることから、関東地方とのつながりを介した工人集団の導入があったものと考えられる。円田盆地においても、上述の在地支配体制の再編に伴っ

て関東から移住した集団が多く居住し、新田開発による農業生産の拡大や、専門的職人の導入による木地生産など手工業生産が行なわれたことが窺える。

このようにして13～14世紀にかけて盆地内各所に展開した屋敷群の多くは継続性がなく、15世紀に入ると西小屋館の居館とその周辺に集約・集住化が進んだか、新田開発の進行に伴って盆底面より高位の丘陵部に移転したと考えられる。

⑧近世

慶長7年（1602年）に刈田郡が仙台藩領になると、円田盆地西縁の丘陵上の平沢要害を伊達家家臣の高野家が拝領した。高野家は本丸・二の丸に土塁を設け、南面に水堀を整備し、大手口から続く道沿いに屋敷を配した約百戸の市街を形成した。以後、高野家は明治維新まで9代・200余年にわたって平沢を治めた。

盆地東縁の車地藏遺跡・鍛冶屋敷遺跡では、微高地上で16～17世紀の屋敷を確認した。水場遺構などから多数の木製品など日常生活用具のほか、三引両文や鳥文の漆器碗、中国産の染付碗・青磁碗、志野織部の菊皿、瀬戸美濃産の播鉢、茶臼などが出土した。高級品・嗜好品を多く保有することから居住者は比較的裕福な階層の人物であり、領地替えによって17世紀前半に小村崎村に居住した伊達家家臣の秋保氏に關係する人物と推察される。

また、六角遺跡・磯ヶ坂遺跡では17世紀後葉～18世紀末の一族墓、前戸内遺跡では19世紀の集団墓を確認した。六角遺跡・磯ヶ坂遺跡の一族墓では青銅製和鏡（蓬萊鏡）、ガラス製数珠玉、煙管、小野相馬産の碗、六道銭などが出土している。副葬品の種類や量の豊富さから、一族墓の被葬者は豪農クラスの庶民階層と考えられる。前戸内遺跡の集団墓では大堀相馬産の陶器碗、村田塩内産の甕、煙管、六道銭などが出土しているが、種類・量ともに少ないことから一般庶民の墓と考えられる。

六角遺跡で確認した17世紀後葉における一族墓の形成は、円田盆地の近世村落における墓制の変化が江戸周辺と大差ない時期に起こったことを示しており、当時の幕藩体制における農民支配や葬送儀礼の実態を知る上で重要と考えられる。

注24：藤原清衡が大高山神社（柴田郡）と刈田嶺神社（刈田郡・蔵王町）の年貢として金を送っている〔永萬元年（1165年）6月 神祇官諸社年貢注文〕。また、奥州藤原氏との関係を示す「丈六阿弥陀如来座像（県指定文化財）」が現存し、明治時代初頭まで円田盆地西縁の丘陵上にあった蔵王町平沢字丈六の阿弥陀堂に安置されていた。阿弥陀堂跡の付近には、参道杉並木の一本と伝えられる「平沢弥陀の杉（県指定天然記念物・推定樹齢900年）」が現存し、江戸時代中期までは20本以上の大杉が残されていた〔高野家記録〕。

(2) 遺跡群の特質

円田盆地の遺跡群について把握されている活動痕跡の動態を時期ごとに見てきた。縄文時代の活動痕跡の主体は狩猟活動に伴うものであり、円田盆地において安定的に集落が形成され、ある程度定着した生活が営まれるのは弥生時代中期以降と考えられる。これらの集落は4世紀に古墳文化を受容しながら、5世紀にかけて安定的に発展を遂げたことが窺える。しかし、これに後続する6世紀の集落はなく、何らかの要因によって断絶している可能性が高いと考えられる。

6世紀の空白期を挟んで、7世紀中頃以降には再び集落形成が活発化し、盆地北部の盆底面には特殊集落群が展開する。これらは律令支配を前提とした関東系移民集落や、柴田評の建評に伴って設置された城柵(推定「柴田柵」)であったと考えられる。これらの特殊集落群を母胎としながら、7世紀末～8世紀前半には郡制施行に合わせて新たに官衙(推定「柴田郡衙」)が造営されたと考えられる。これと並行して、7世紀末～8世紀中頃にかけて盆地内の各所に関東系移民集落群が展開する。これらの移民集落の構成員は関東地方からの直接的な移民とは見做されず、福島県域など陸奥国内に移配された関東系移民の再移民として評価される。8世紀前半には柴田郡の分割(苜田郡の建郡)に伴って円田盆地の柴田郡衙は白石川低地へ移転し、白石盆地に苜田郡衙が造営されたと考えられるが、円田盆地ではこれと前後しながらまとまった移民集落が展開する。このことから、苜田郡の建郡には、白石盆地の在地勢力の起用と、円田盆地への移民による地域再編という二つの側面が看取される。その背景として、宮城県北部地域などでの征討政策と連動した陸奥国の国力増強政策が窺えるが、これらの移民集落が円田盆地に定着して安定的な発展を遂げることはなく、8世

紀後半には再び集落の空白期の様相を呈してくる。

8世紀末～9世紀初頭になると、盆地全域に中・小規模の集落群が出現する。前代との継続性を持たずに同時多発的に出現するこれらの集落は、陸奥・出羽両国に対して行なわれた公民の集住・定着策を反映したものと考えられる。これらの集落群は9世紀前葉～中葉には豪族居宅を伴った拠点集落に集約されて発展を遂げたが、その後の継続性はなく、10世紀以降の集落形成は極めて低調となったことが窺える。

13世紀には奥州藤原氏の滅亡後の関東御家人の移住に伴う地域の再編によって集落形成が活発化する。白石盆地では工人集団の導入による窯業生産が開始され、円田盆地でも木地生産などの手工業生産が行なわれた。これらの集落群は15世紀には盆地内に形成される国人領主層の居館周辺に集住化が進んだか、新田開発の進行によって丘陵部へ移転したと考えられる。

17世紀には平沢要害を拝領した高野家や、小村崎村に居住した秋保家によって盆地内の地域開発が進められた。17世紀後葉には庶民階層の一族墓が形成されており、中世以降の地域開発の流れを礎とした庶民層の安定的な生活があったことを示している。

以上のように、円田盆地の遺跡群の動態は、幾度かの空白期を挟みながら活発な集落形成が展開したことが窺える。そうした中で、6世紀の集落の断絶、7世紀後半～8世紀の特殊集落群の展開、8世紀末～9世紀初頭および13世紀の集落形成には、当時の中央政権による東北地方支配という政治的要因が大きく関与したと考えられる。宮城県南部内陸地域は6世紀に国造が置かれた地域の北限と接し、蝦夷居住域の南端という地域性を持つ。円田盆地の遺跡群には、そうした地域性が色濃く反映されていると言えるであろう。



竪穴住居跡の調査 (十郎田遺跡)



遺跡見学会 (十郎田遺跡)

第2節 円田盆地における土器様相 —律令期土器集成〈飛鳥・奈良時代〉—

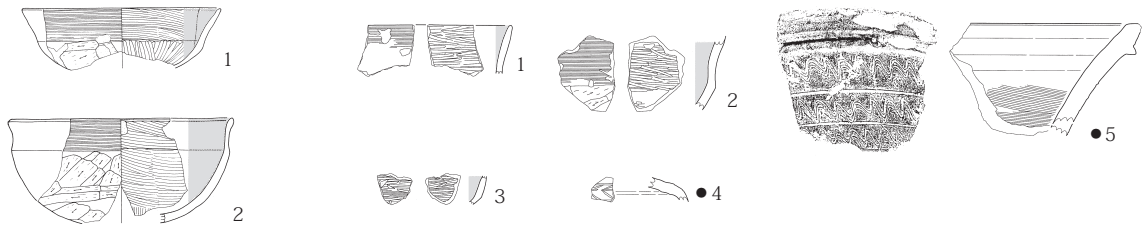
これまでの円田盆地の遺跡群の発掘調査によって、各時期の土器様相がある程度明らかにされてきた。特に律令期の土器群については、複数の集落から資料が得られ、蓄積が進んでいる。しかしながら、その多くは構成員に関東系移民を多く含むと考えられる移民集落が保有した土器群であり、外来の要素を多く含むも

のと考えられる。このため、円田盆地周辺における土器変遷の把握には、在地集落が保有した土器群の解明が課題となっている。この点については、今後の資料の増加を待って検討する必要がある。ここでは、現在までに把握されている円田盆地における律令期の土器群を集成し、今後の検討に供することとしたい。

7世紀前半

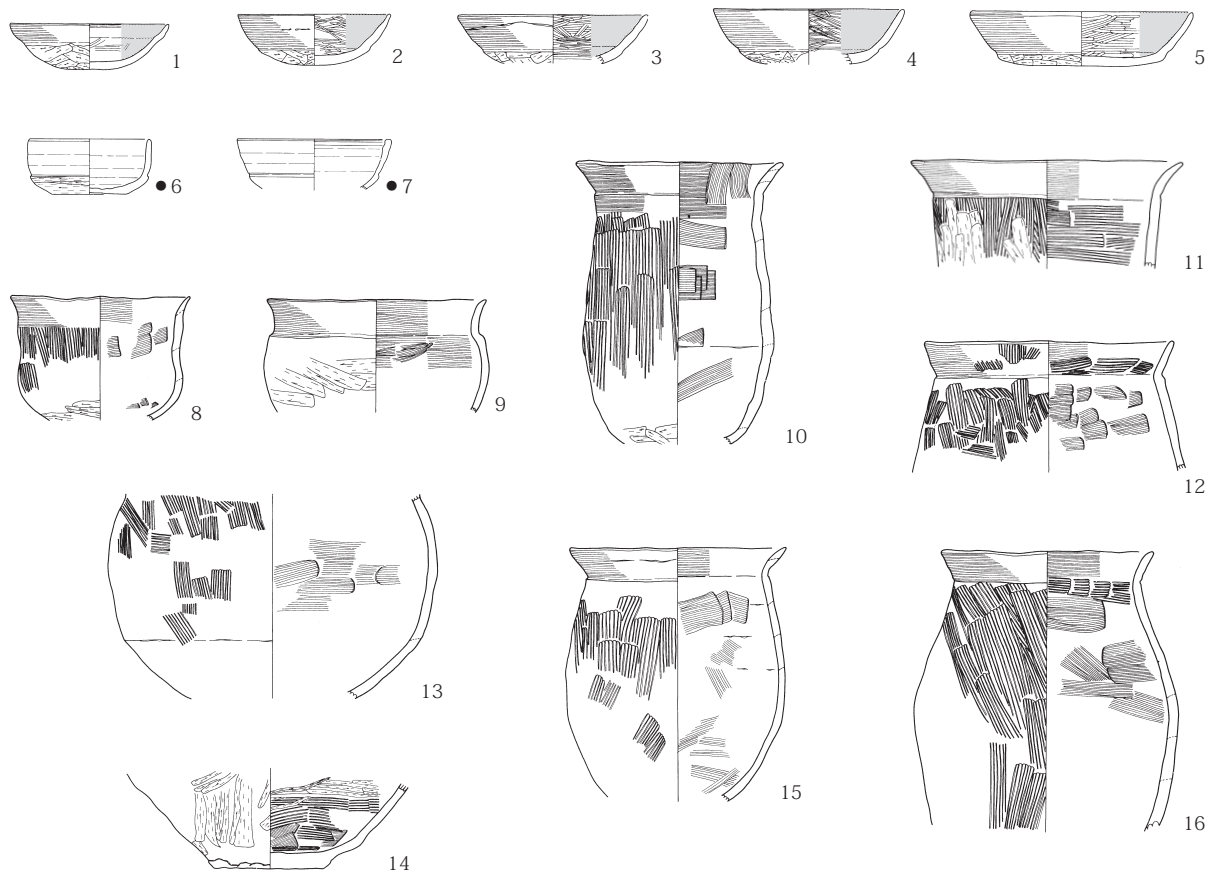
A. 台遺跡 '88-A トレンチ 7層

B. 台遺跡 '07- 遺構外



7世紀後半

C. 塩沢北遺跡 1号住居跡



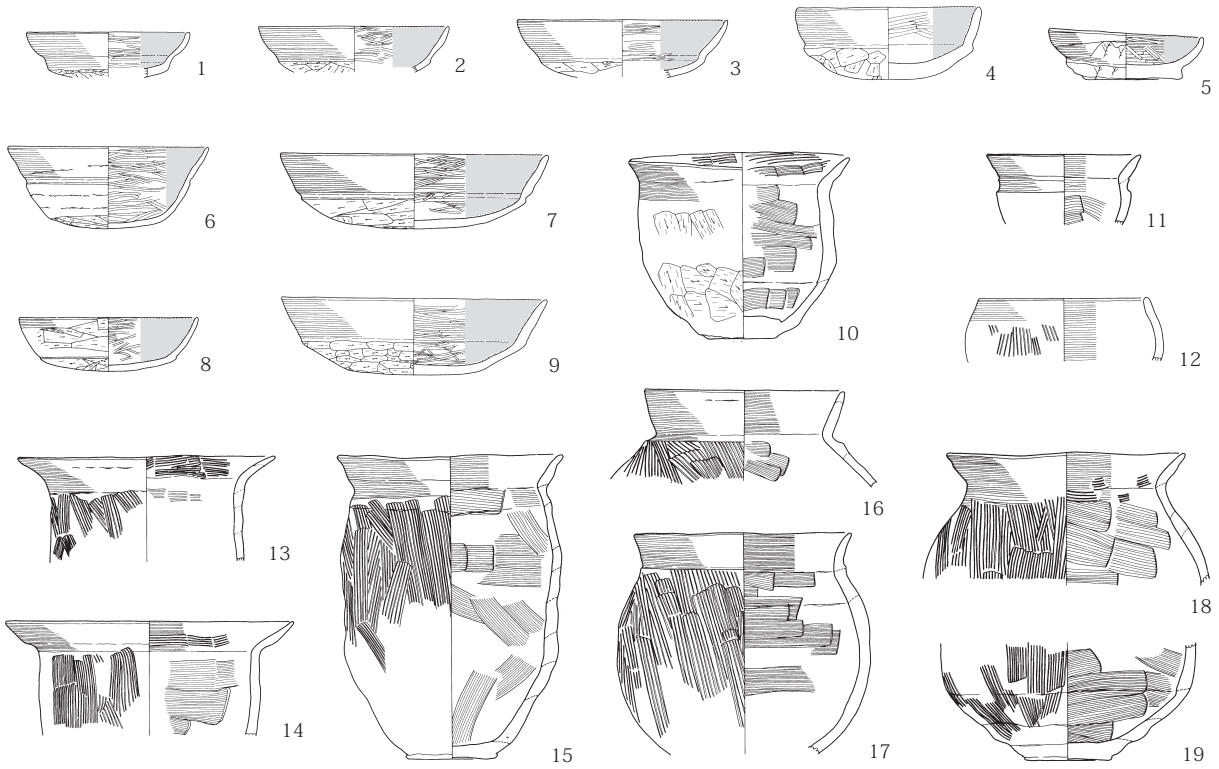
S=1/6

第44図 律令期土器集成(1)

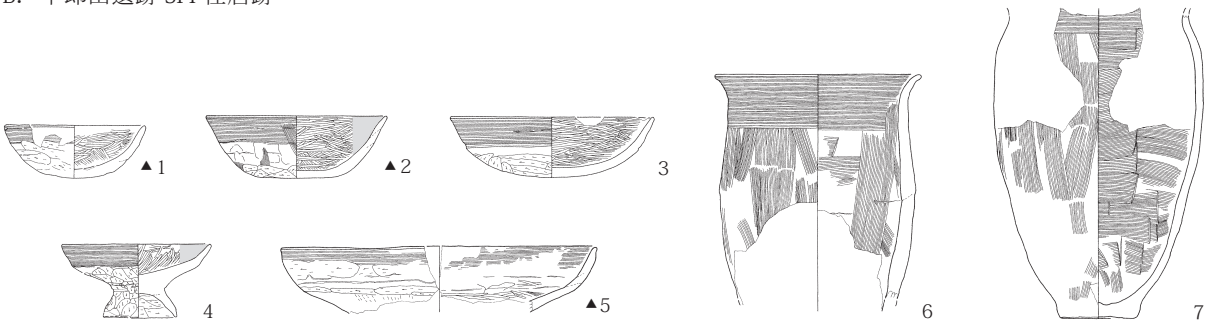
▲関東系土師器 ●須恵器

7世紀後半

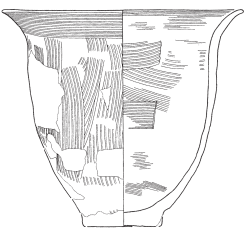
A. 塩沢北遺跡2号住居跡



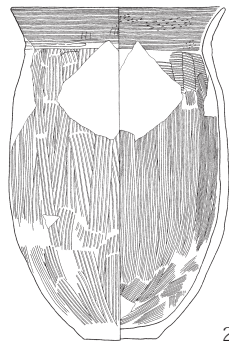
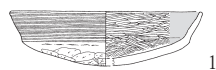
B. 十郎田遺跡 SI4 住居跡



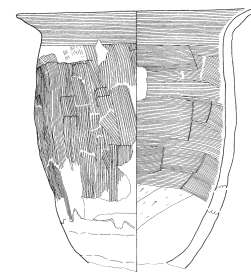
C. 十郎田遺跡 SI5b 住居跡



D. 十郎田遺跡 SI5c 住居跡



E. 十郎田遺跡 SI6 住居跡



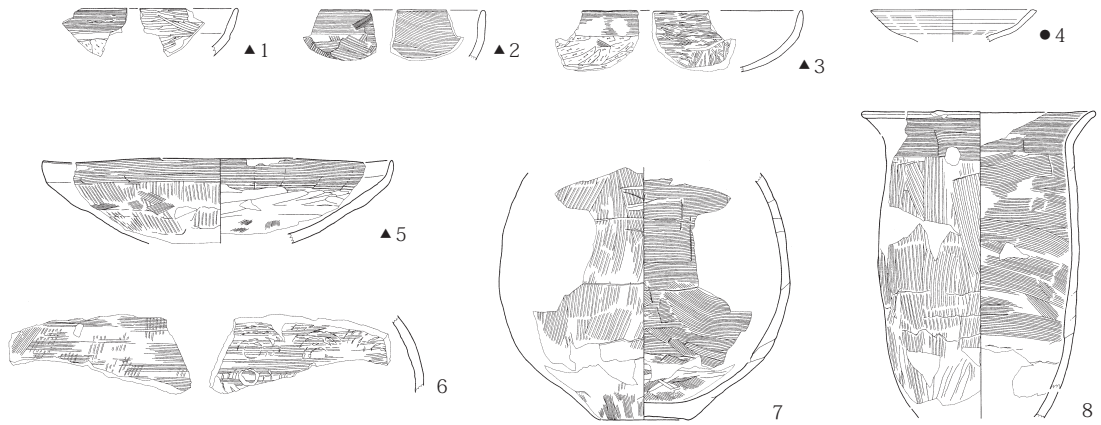
S=1/6

第45図 律令期土器集成(2)

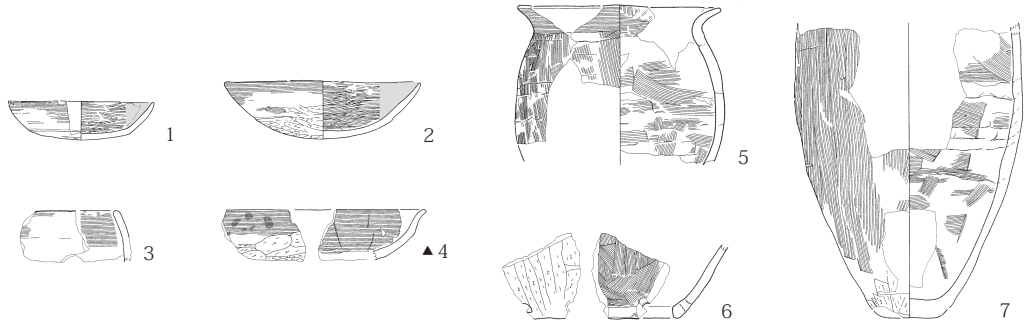
▲関東系土師器 ●須恵器

7世紀後半

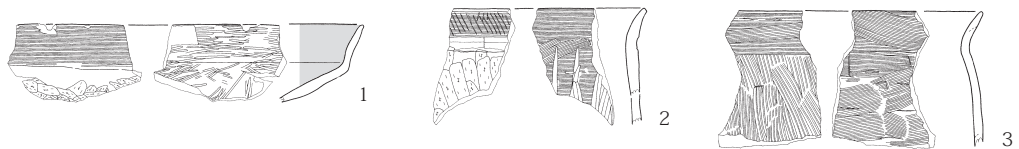
A. 十郎田遺跡 SI9 住居跡



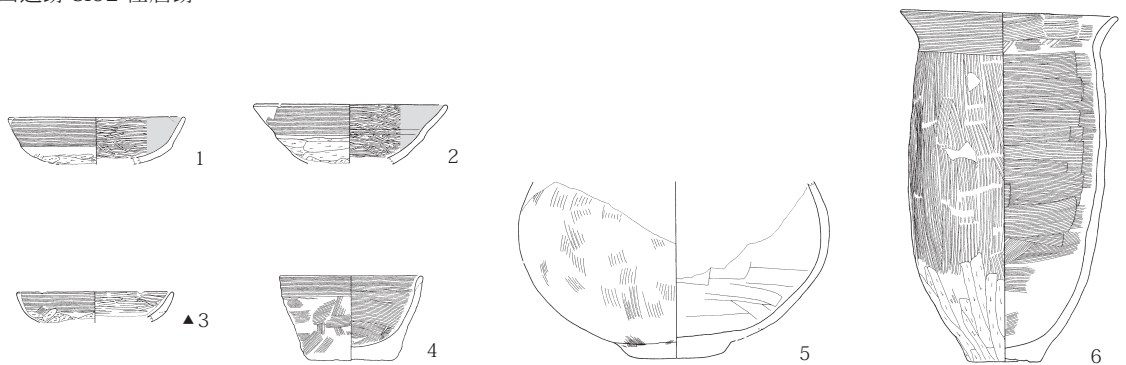
B. 十郎田遺跡 SI10 住居跡



C. 十郎田遺跡 SI51 住居跡



D. 十郎田遺跡 SI52 住居跡



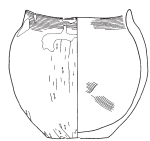
S=1/6

第46図 律令期土器集成(3)

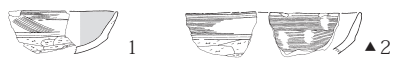
▲関東系土師器 ●須恵器

7世紀後半

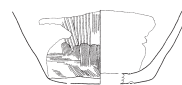
A. 十郎田遺跡 SI206 住居跡



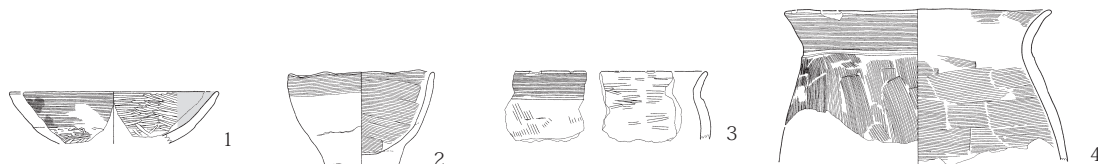
B. 十郎田遺跡 SI207 住居跡



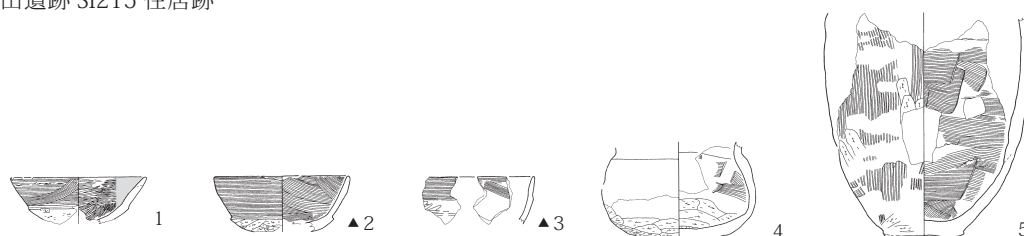
C. 十郎田遺跡 SI230 住居跡



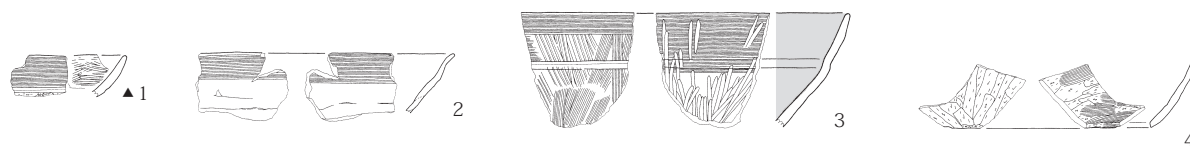
D. 十郎田遺跡 SI213 住居跡



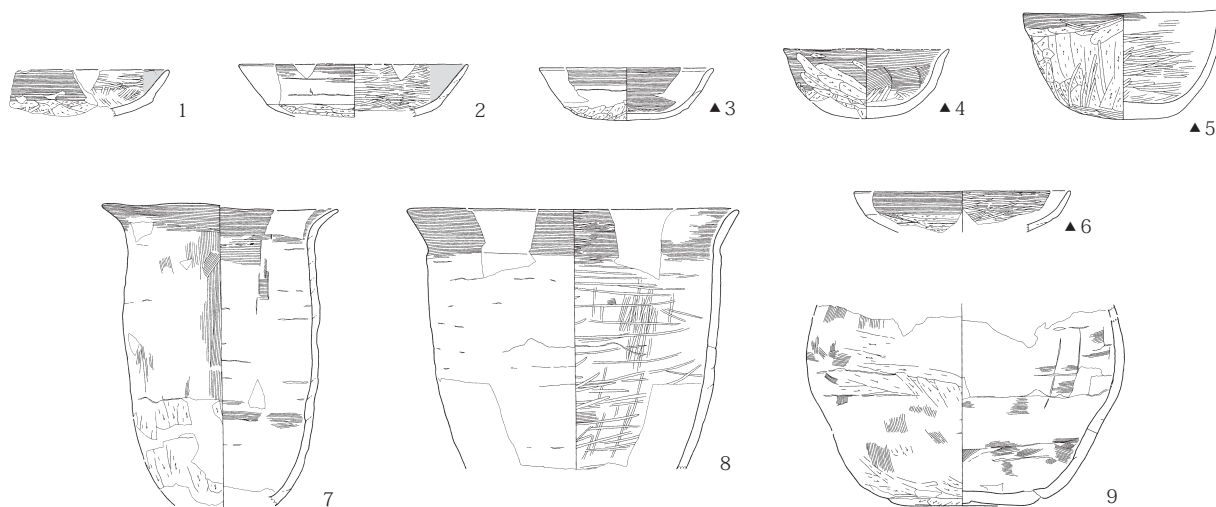
E. 十郎田遺跡 SI215 住居跡



F. 十郎田遺跡 SI220 住居跡



G. 十郎田遺跡 SI225 住居跡



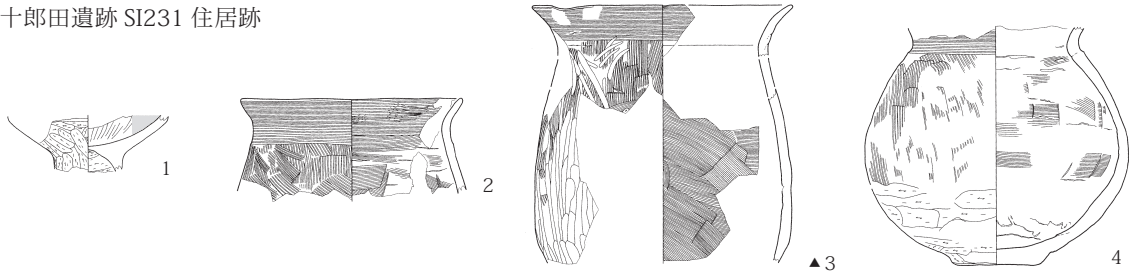
S=1/6

第47図 律令期土器集成(4)

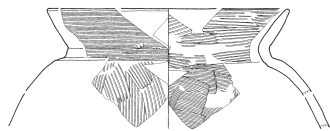
▲関東系土師器 ●須恵器

7世紀後半

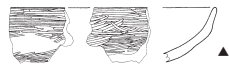
A. 十郎田遺跡 SI231 住居跡



B. 十郎田遺跡 SB256 掘立柱建物跡



C. 十郎田遺跡 SA282 柱列跡



D. 十郎田遺跡 SA28 材木塀跡



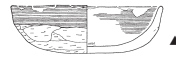
E. 十郎田遺跡 P384 柱穴



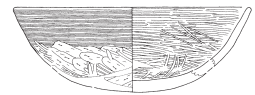
F. 十郎田遺跡 P417 柱穴



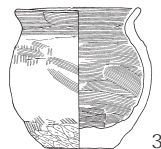
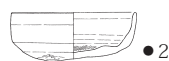
G. 十郎田遺跡 SK112 土坑



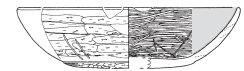
H. 十郎田遺跡 SK180 土坑



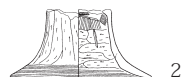
I. 十郎田遺跡 SK212 土坑



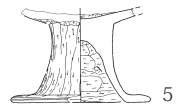
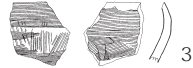
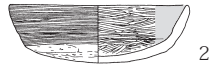
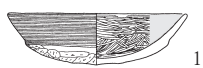
J. 十郎田遺跡 SD185 溝跡



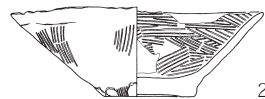
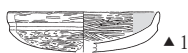
K. 十郎田遺跡 SD162 溝跡



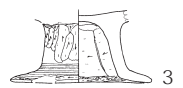
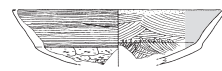
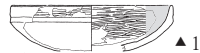
L. 十郎田遺跡 遺構外



M. 都遺跡 SI1b 住居跡



N. 都遺跡 遺構外



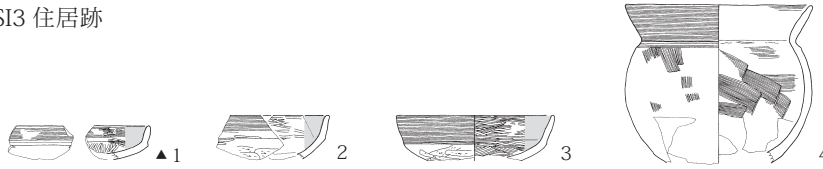
S=1/6

第48図 律令期土器集成(5)

▲関東系土師器 ●須恵器

7世紀後半

A. 窪田遺跡 '08-SI3 住居跡



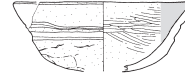
B. 窪田遺跡 '08-SI114 住居跡



C. 窪田遺跡 遺構外

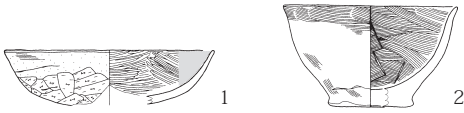


D. 都遺跡 SD12 溝跡



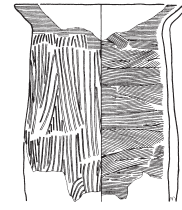
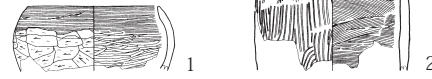
7世紀末～8世紀初頭

E. 都遺跡 SD12 溝跡

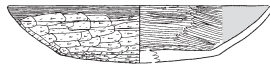


F. 都遺跡

SA1 材木塀跡



G. 窪田遺跡 '03-SI1 住居跡



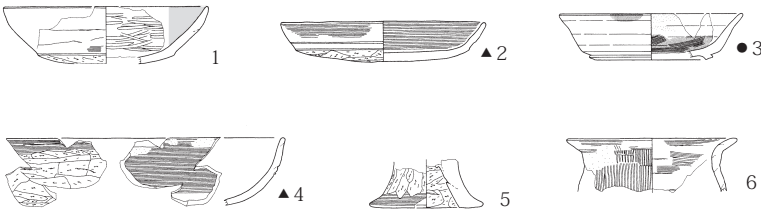
H. 都遺跡 SD5 溝跡



I. 都遺跡 遺構外

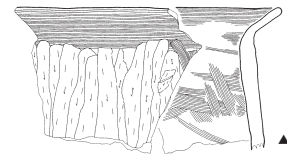


J. 西屋敷遺跡 SD107 河川跡



K. 窪田遺跡

'08-SB108 建物跡

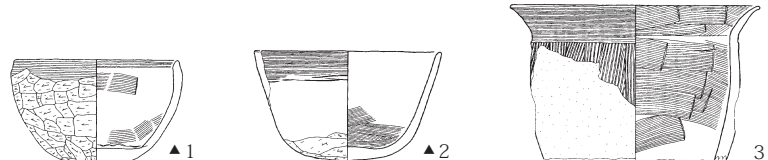


8世紀前半～中頃

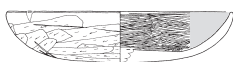
L. 窪田遺跡 '08-SB308 建物跡



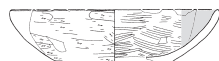
M. 窪田遺跡 '03-SI3 住居跡



N. 窪田遺跡 '08-SI303 住居跡



O. 窪田遺跡 '08-SI304 住居跡



P. 窪田遺跡 遺構外



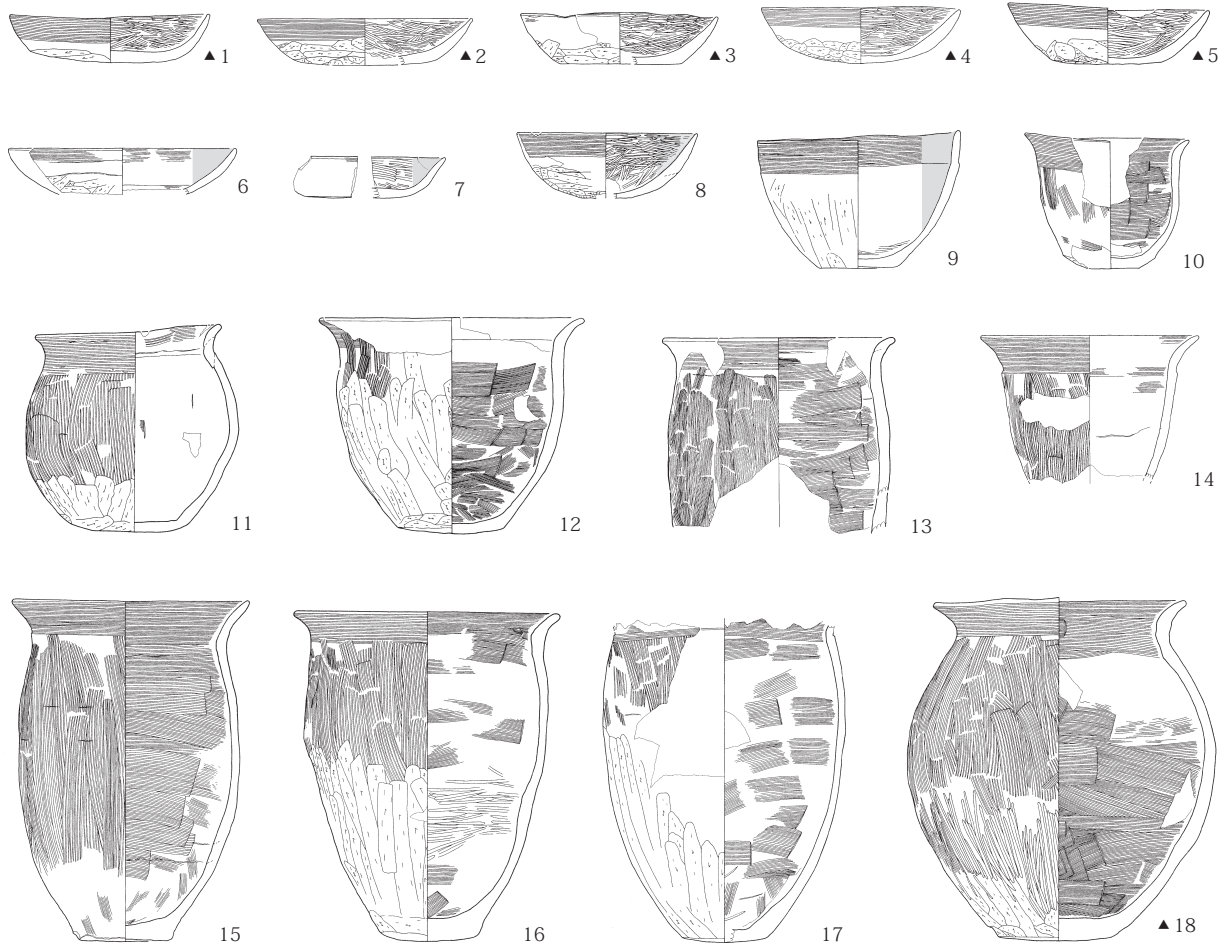
S=1/6

第49図 律令期土器集成(6)

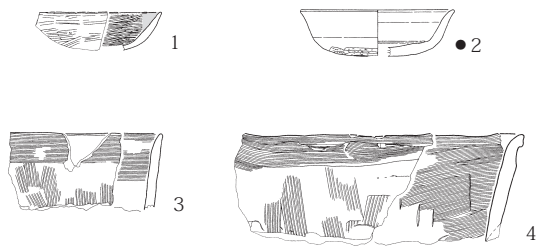
▲関東系土師器 ●須恵器

8世紀前半～中頃

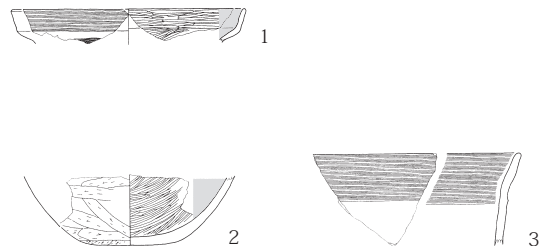
A. 窪田遺跡 '08-SI1 住居跡



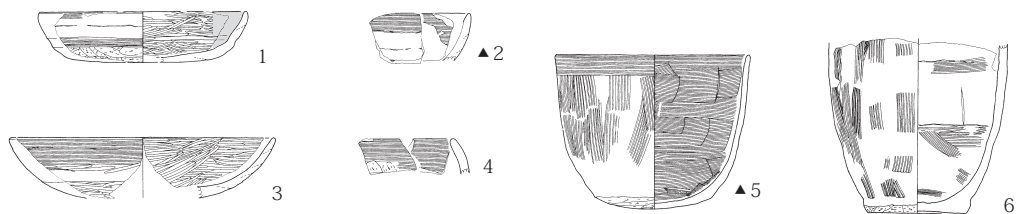
B. 窪田遺跡 '08-SI207 住居跡



C. 窪田遺跡 '08-SI305A 住居跡



D. 窪田遺跡 '08-SI305B 住居跡



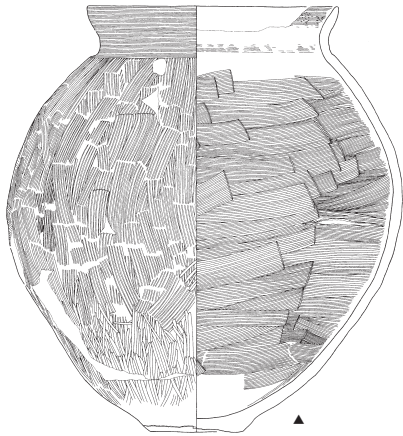
S=1/6

第50図 律令期土器集成(6)

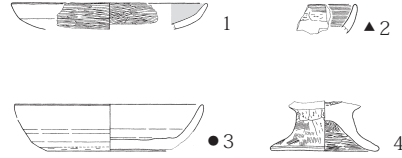
▲関東系土師器 ●須恵器

8世紀前半～中頃

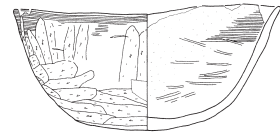
A. 窪田遺跡 '08-SE113 井戸跡



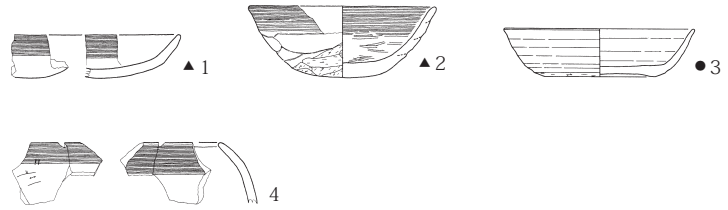
B. 窪田遺跡 遺構外



C. 戸ノ内遺跡 SI80 住居跡



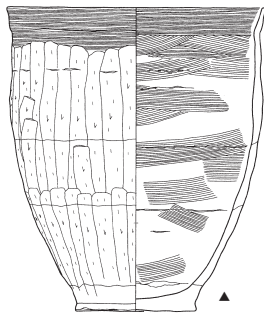
D. 戸ノ内遺跡 SI24 住居跡



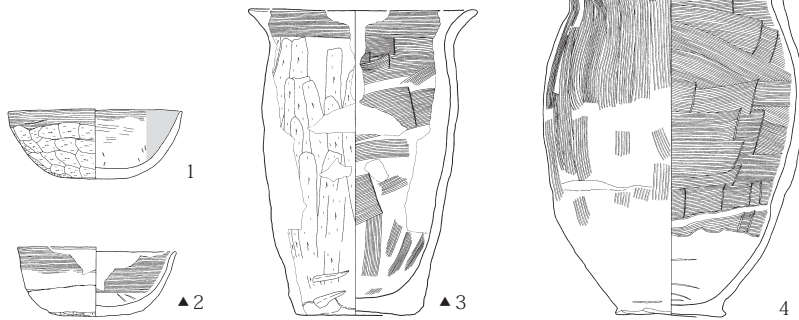
E. 六角遺跡 SI91 住居跡



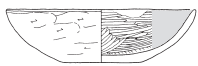
F. 六角遺跡 SI201b 住居跡



G. 六角遺跡 SI210 住居跡



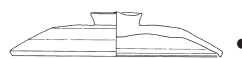
H. 六角遺跡
SI305 住居跡



I. 六角遺跡
SI554a 住居跡



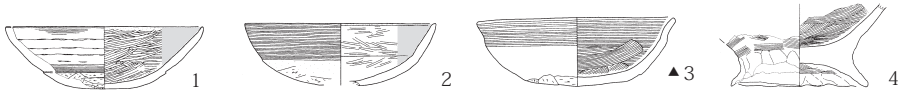
J. 六角遺跡
SI554c 住居跡



K. 六角遺跡
SI603 住居跡



L. 六角遺跡 SI753 住居跡



M. 六角遺跡
SI634 住居跡



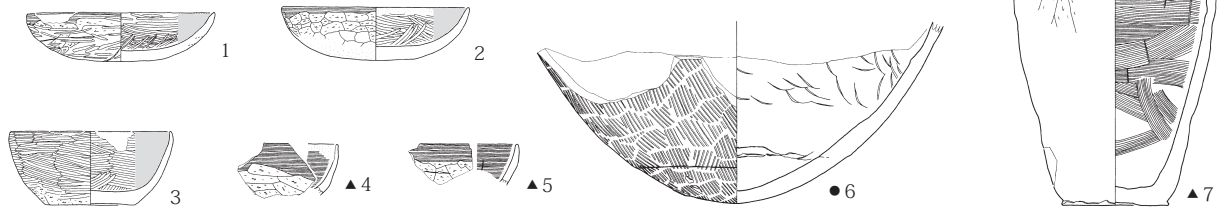
第51図 律令期土器集成(7)

S=1/6

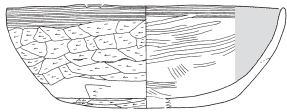
▲ 関東系土師器 ● 須恵器

8世紀前半～中頃

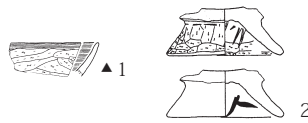
A. 六角遺跡 SI621 住居跡



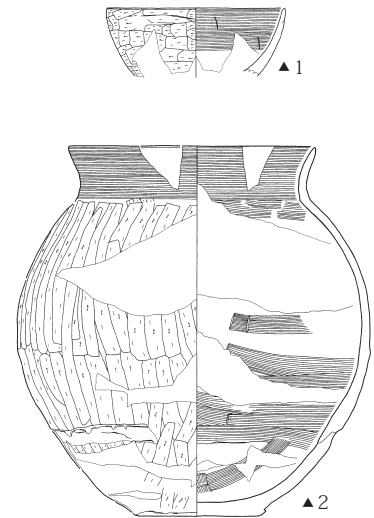
B. 六角遺跡 SK610 土坑



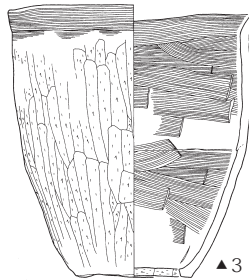
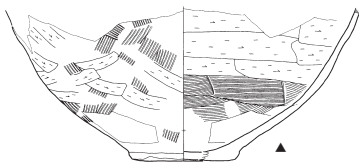
C. 六角遺跡 SD228b 大溝跡



D. 六角遺跡 SD206 大溝跡



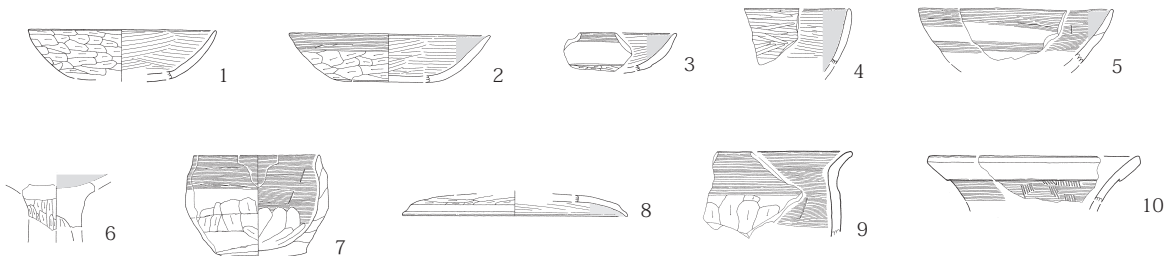
E. 六角遺跡 SD228a 大溝跡



F. 六角遺跡 遺構外



G. 堀の内遺跡 '89-2 号住居跡



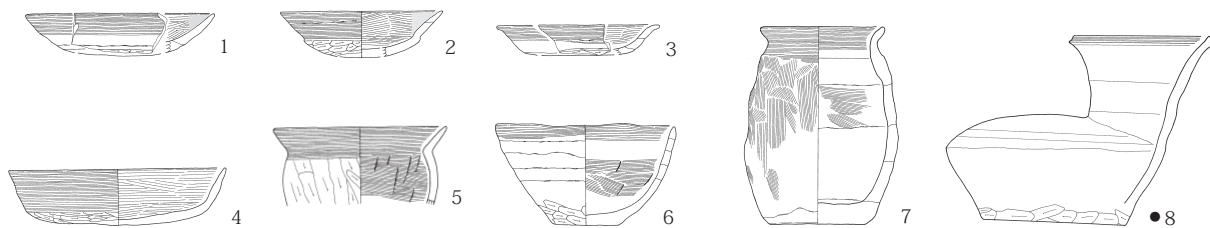
S=1/6

第52図 律令期土器集成(8)

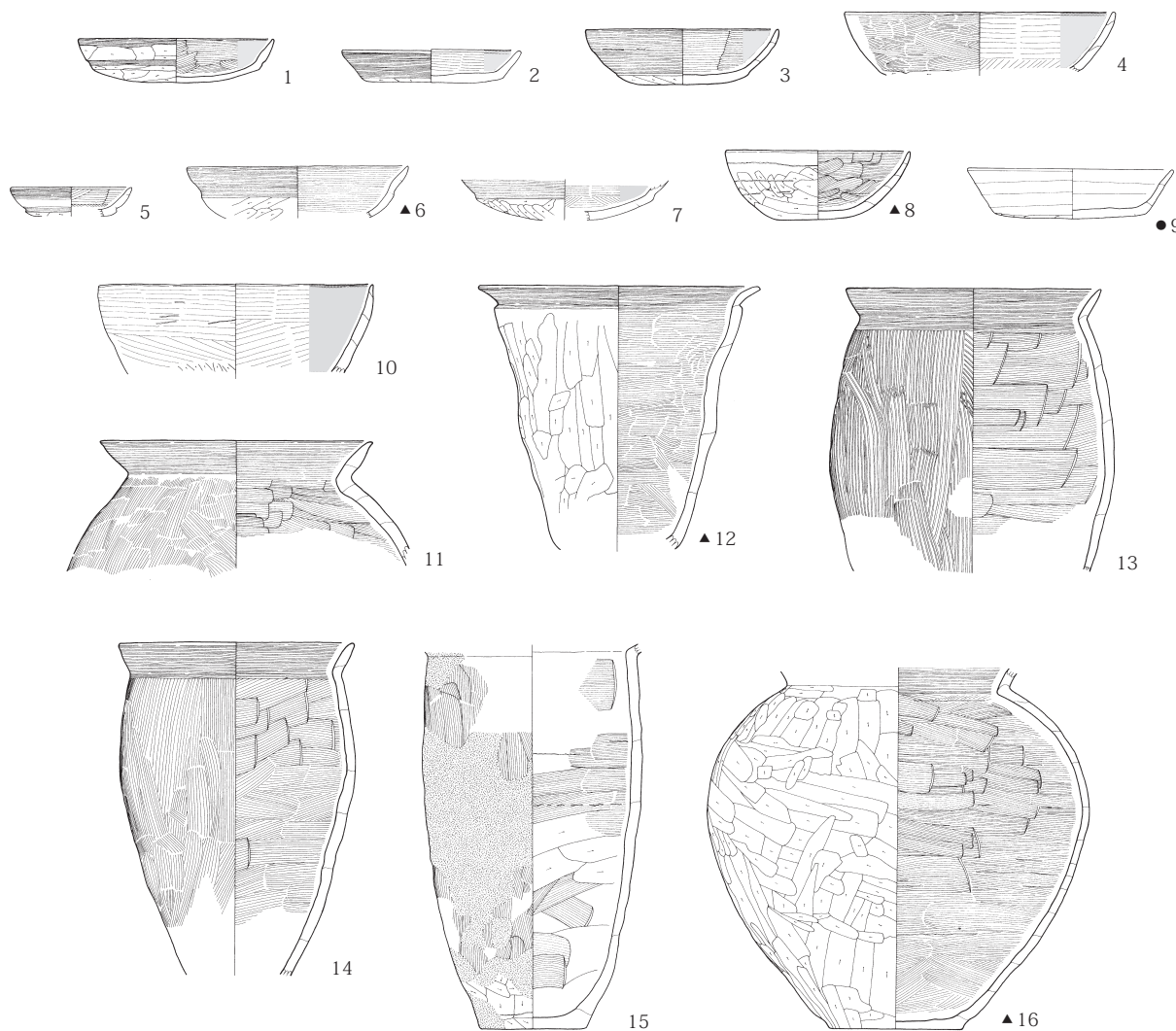
▲関東系土師器 ●須恵器

8世紀前半～中頃

A. 堀の内遺跡 '89-3 号住居跡

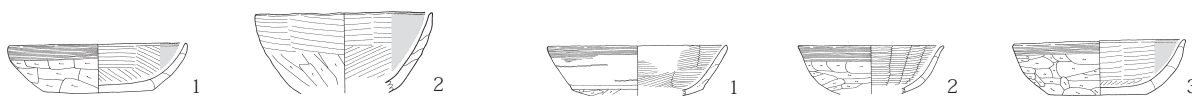


B. 堀の内遺跡 '96-11 号住居跡



C. 堀の内遺跡 '96-17 号住居跡

D. 堀の内遺跡 '96- 遺構外



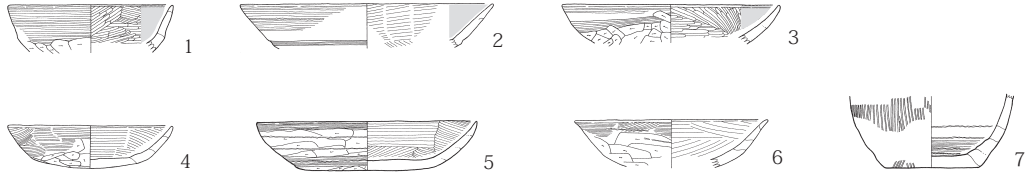
S=1/6

第53図 律令期土器集成(9)

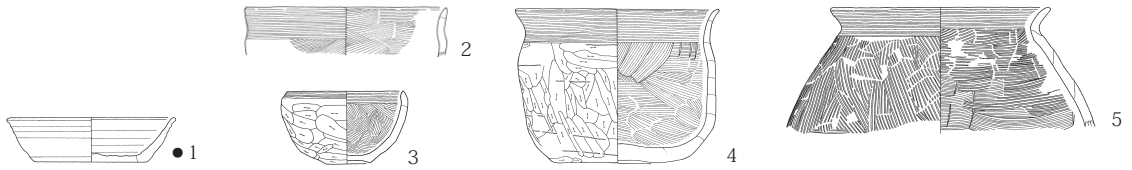
▲関東系土師器 ●須恵器

8世紀前半～中頃

A. 堀の内遺跡 '96-14 号住居跡

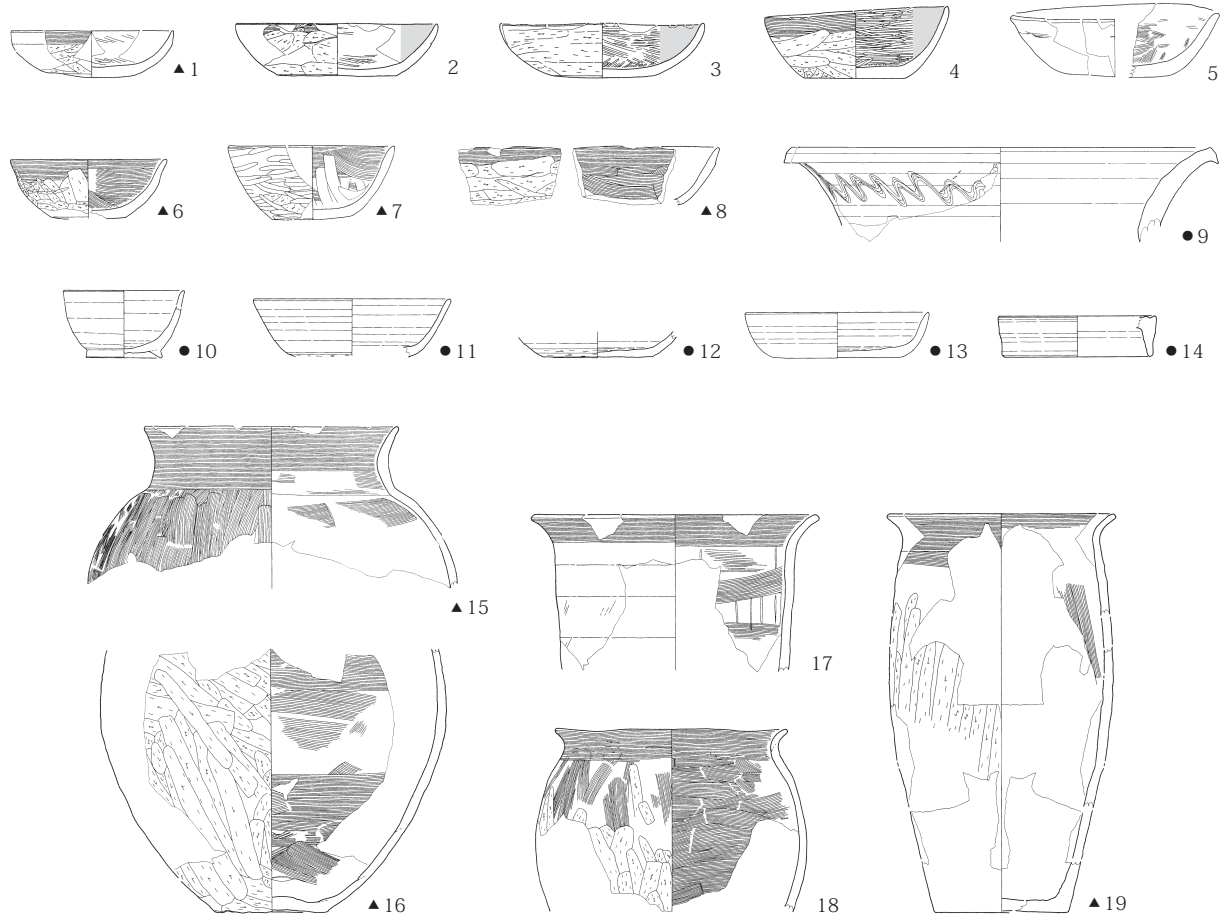


B. 堀の内遺跡 '96- 遺構外



8世紀中頃～後半

C. 前戸内遺跡 SX114 粘土採掘坑



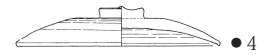
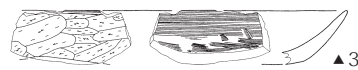
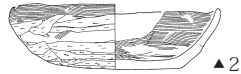
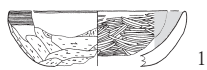
S=1/6

第54図 律令期土器集成 (10)

▲関東系土師器 ●須恵器

8世紀中頃～後半

A. 前戸内遺跡 SI140 住居跡



S=1/6

▲関東系土師器 ●須恵器

第55図 律令期土器集成 (11)



十郎田遺跡出土土器 (7世紀後半)
(左から在地土師器・須恵器・関東系土師器)



六角遺跡出土土器 (8世紀前半～中頃)
(坏・甕類ともに関東系土師器を含む)

第6章 総括

1. 円田盆地は、宮城県南部の刈田郡蔵王町北東部に位置する。盆地周縁の丘陵上および盆底面の微高地上には多数の遺跡が立地しており、複数の低平な丘陵が盆底面に向かって張り出す盆地北部では、特に密集して遺跡が確認されている。
2. 円田盆地北部の盆底面に広がる農地を対象として計画された経営体育成基盤整備事業（県営ほ場整備事業・円田2期地区）を原因とする遺構確認調査・事前調査は平成13～23年度に実施した。調査対象となったのは16遺跡であり、その成果は平成13～25年度までに順次報告してきた。
3. これまでに報告してきた各遺跡の調査成果の概要を整理し、各遺跡で確認した活動痕跡の性格および相互の関係性について、円田盆地全体の各遺跡のこれまでの調査成果も含めて検討したところ、下記のことが明らかとなった。

(1)円田盆地の遺跡群では、縄文時代から近世にかけての活動痕跡が確認されている。

(2)主な活動痕跡には、下記のものがある。

- ・縄文時代の落とし穴猟の狩猟場、集落の一部と見られる土坑（早期）、小規模な集落（後～晩期）。
- ・弥生時代の集落の一部とみられる貯蔵域、集落や農耕に関わる遺物の散布（中～後期）。
- ・古墳時代の集落（前期・中期）、水田（中期・後期末）。また、盆地南部の丘陵上に古墳（前期・中期、いずれも未調査）がある。
- ・飛鳥～奈良時代の集落（7世紀後半～8世紀中頃）のほか、城柵（7世紀後半）および官衙（7世紀末～8世紀前半）と考えられる遺構群。
- ・平安時代の集落（9世紀）、豪族居宅（9世紀前葉～中葉）、水田（9世紀後半）。
- ・中世の集落（屋敷）・水田（13世紀中頃～14世紀後半）、城館（13世紀中頃～16世紀）。
- ・近世の集落（屋敷・16～17世紀）、墓域（17～19世紀）。また、盆地北東部の丘陵上に伊達家家臣の高野家が居住した城館（平沢要害）がある。

(3)縄文時代の活動痕跡の主体は狩猟活動に伴うものであり、円田盆地で安定的に集落が形成されるのは弥生時代中期以降と考えられる。

(4)弥生時代の集落は、古墳時代前期（4世紀）に入って古墳文化を受容し、中期（5世紀）にかけて安定的に発展を遂げたが、後期（6世紀）には何らかの要因によって断絶したと考えられる。

(5)飛鳥時代（7世紀後半）に入って集落形成が再開されるが、盆地北部に突如として移民集落（都遺跡・十郎田遺跡など）が出現する。このうち、十郎田遺跡の集落は柴田評の建評に伴って設置された城柵（推定「柴田柵」）の可能性が考えられる。

- (6) 飛鳥時代末から奈良時代初頭（7世紀末～8世紀初頭）には都遺跡北部および窪田遺跡に正方位の区画・建物群が展開し、官衙（推定「柴田郡衙」）が造営された可能性が考えられる。また、飛鳥時代末から奈良時代中頃（7世紀末～8世紀中頃）には盆地内各所に移民集落群が展開する。保有する土器群の特徴から、集落の構成員は福島県域に移配された関東系移民の再移民と推定され、柴田郡の分割（苅田郡の建郡）に合わせて移民による地域再編が行なわれたと考えられる。
- (7) 平安時代初頭（8世紀末～9世紀初頭）には前代との継続性を持たない中小の集落が出現し、陸奥・出羽両国に対して行なわれた公民の集住・定着策との関連が考えられる。これらは平安時代前葉（9世紀前葉～中葉）には豪族居宅を伴った拠点集落（前戸内遺跡）に集約されて発展を遂げるが、その後の集落形成は極めて低調となった。
- (8) 中世前半（13世紀中頃～14世紀後半）には屋敷などの集落形成が活発化し、奥州藤原氏滅亡後の関東御家人の移住に伴う地域再編との関連が考えられる。これらは15世紀には国人領主層の居館（西小屋館跡）周辺に集住化が進んだか、新田開発の進行に伴って盆底面の微高地から背後の丘陵部へ移転した可能性が考えられる。
- (9) 近世前半（17世紀）には平沢要害に居住した高野家や、小村崎村に居住した秋保家によって盆地内の地域開発が進められたと考えられる。また、17世紀後葉には庶民階層の一族墓が形成されており、中世以降の地域開発の流れを礎とした庶民層の安定的な生活があったと考えられる。
- (10) 以上の検討から、円田盆地の遺跡群の動態には幾度かの空白期（低調期）と活発な集落形成期が見られることが判明した。こうした動態の背景には、当時の中央政権による東北地方支配という政治的要因が大きく関与したと考えられる。
4. 今回報告した発掘調査成果は、関連する各遺跡の発掘調査成果の包括的な理解と活用に不可欠なものであり、円田盆地周辺の地域史を解明する上で極めて重要な手掛かりとなるものである。

引用・参考文献

- 相原淳一 2012「下名生大畑遺跡の発見」宮城考古学 14 宮城県考古学会
- 板垣直俊・豊島正幸・寺戸恒夫 1981「仙台およびその周辺に分布する愛島軽石層」東北地理 37 東北地理学会
- 伊東信雄 1955「各地域の弥生式土器—東北—」『日本考古学講座4』杉原莊介編 河出書房
- 今泉隆雄 2005「古代国家と郡山遺跡」『郡山遺跡発掘調査報告書—総括編(1)—』仙台市文化財調査報告書 283 仙台市教育委員会
- 氏家和典 1957「東北土師器の型式分類とその編年」歴史 14 東北大学史学会
- 氏家和典 1967「陸奥国分寺跡出土の丸底杯をめぐって」『山形県の考古と歴史 柏倉亮吉教授還暦記念論文集』山教史学会
- 風間観静 1983「仙台藩の街道」『宮城の研究5 近世編Ⅲ』渡辺信夫編 清文堂
- 鹿島茂 1993「地名」『蔵王町史 民俗生活編』蔵王町史編纂委員会
- 刈田郡教育会 1928『刈田郡誌』宮城県刈田郡教育会編
- 菊地逸夫 1996「考察」『一本杉窯跡群』宮城県文化財調査報告書 172 宮城県教育委員会
- 蔵王町史編纂委員会 1987『蔵王町史 資料編Ⅰ』
- 蔵王町史編纂委員会 1989『蔵王町史 資料編Ⅱ』
- 蔵王町史編纂委員会 1993『蔵王町史 民俗生活編』
- 蔵王町史編纂委員会 1994『蔵王町史 通史編』
- 佐藤敏幸 2008「古代の土器」『市内遺跡発掘調査報告書Ⅲ』白石市文化財調査報告書 31 白石市教育委員会
- 佐藤洋一 2005「蔵王町円田盆地における遺跡分布状況」宮城考古学 5 宮城県考古学会
- 塩川町教育委員会 2004『県営経営体育成基盤整備事業 塩川西部地区遺跡発掘調査報告書7 内屋敷遺跡』塩川町文化財調査報告書 12
- 白鳥良一 1980「多賀城跡出土土器の変遷」研究紀要 VII 宮城県多賀城跡調査研究所
- 白石市教育委員会 2008『市内遺跡発掘調査報告書Ⅲ』白石市文化財調査報告書 31
- 白石市史編纂委員会 1976『白石市史 別巻 考古資料篇』
- 菅原祥夫 1998「陸奥国南部における富豪層居宅の倉庫群 - 福島県郡山市正直C遺跡・東山田遺跡の分析事例を中心として - 」『古代の稲倉と村落・郷里の支配』奈良国立文化財研究所
- 菅原祥夫 2004「東北古墳時代終末期の在地社会再編」『原始・古代日本の集落』同成社
- 菅原祥夫 2007「東北の豪族居宅」『古代豪族居宅の構造と機能』独立行政法人国立文化財機構 奈良文化財研究所
- 菅原祥夫 2008「東北の豪族居宅(補遺)」『南蔵王山麓の郷土誌』中橋省吾先生追悼論集刊行会
- 仙台市教育委員会 2005『郡山遺跡発掘調査報告書—総括編(1)—』仙台市文化財調査報告書 283
- 田中則和 1995「中世 - 解説 - 」『仙台市史 特別編2 考古資料』仙台市史編纂委員会
- 田辺 昭三 1966『陶器古窯址群Ⅰ』平安学園考古学クラブ
- 田辺 昭三 1981『須恵器大成』角川書店
- 千田嘉博・小島道裕・前川要 1993『城館調査ハンドブック』新人物往来社
- 東北古代土器研究会 2005『東北古代土器集成—古墳後期～奈良・集落編— <宮城>』研究報告2
- 東北古代土器研究会 2008『東北古代土器集成—須恵器・窯跡編— <陸奥>』研究報告3
- 林謙作 1962「東北地方早期縄文文化の展望」考古学研究 9-2 考古学研究会
- 福島県教育委員会 2002『阿武隈川右岸築堤遺跡発掘調査報告書2 高木・北ノ脇遺跡』福島県文化財調査報告書 401
- 藤沢敦 2000「阿武隈川下流域の前方後円墳(その1)」宮城考古学 2 宮城県考古学会
- 藤沼邦彦 1976「宮城県地方の中世陶器窯跡(予察)」研究紀要 2 東北歴史資料館
- 藤沼邦彦 1977「宮城県出土の中世陶器について」研究紀要 3 東北歴史資料館
- 宮城県教育委員会 1980「赤鬼上遺跡」『東北自動車道遺跡調査報告書Ⅱ』宮城県文化財調査報告書 63
- 宮城県教育委員会 1980「大橋遺跡」『東北自動車道遺跡調査報告書Ⅳ』宮城県文化財調査報告書 80
- 宮城県教育委員会 1981「東山遺跡」『東北自動車道遺跡調査報告書Ⅴ』宮城県文化財調査報告書 81
- 宮城県教育委員会 1989「戸ノ内脇遺跡」『亘理町三十三間堂遺跡ほか』宮城県文化財調査報告書 131
- 宮城県教育委員会 1989「台遺跡」『亘理町三十三間堂遺跡ほか』宮城県文化財調査報告書 131
- 宮城県教育委員会 1990「白山遺跡ほか」『寂光寺跡ほか』宮城県文化財調査報告書 135
- 宮城県教育委員会 1991「中組遺跡ほか」『合戦原遺跡ほか』宮城県文化財調査報告書 140

- 宮城県教育委員会 1992 「諏訪館前遺跡」『下草古城跡ほか』宮城県文化財調査報告書 146
- 宮城県教育委員会 1995 「大畑遺跡」『大畑遺跡ほか』宮城県文化財調査報告書 168
- 宮城県教育委員会 1996 『一本杉窯跡群』宮城県文化財調査報告書 172
- 宮城県教育委員会 2002 「窪田遺跡・都遺跡・新城館跡」『名生館遺跡ほか』宮城県文化財調査報告書 188
- 宮城県教育委員会 2003 「十郎田遺跡ほか」『壇の越遺跡ほか』宮城県文化財調査報告書 195
- 宮城県教育委員会 2003 「大畑遺跡」『壇の越遺跡ほか』宮城県文化財調査報告書 195
- 宮城県教育委員会 2006 『中野高柳遺跡Ⅳ』宮城県文化財調査報告書 204
- 宮城県教育委員会 2010 『鍛冶沢遺跡ほか』宮城県文化財調査報告書 222
- 村田晃一 2000 「飛鳥・奈良時代の陸奥北辺―移民の時代―」宮城考古学 2 宮城県考古学会
- 村田晃一 2007 「宮城県中部から南部」「東北・北海道における6～8世紀の土器変遷と地域の相互関係」『古代東北・北海道におけるモノ・ヒト・文化交流の研究』（研究代表者：辻秀人）東北学院大学文学部
- 村田晃一 2009 「律令国家形成期の陸奥北辺経営と坂東―在地土師器・関東系土師器・困郭集落の検討から―」『古代社会と地域間交流―土師器からみた関東と東北の様相―』国土館大学考古学会編 六一書房
- 吉井宏 1994 「蔵王町の中世城館」『蔵王町史 通史編』蔵王町史編纂委員会
- 吉沢幹夫 1985 「9世紀の陸奥出羽政策について」研究紀要 11 東北歴史資料館

蔵王町文化財調査報告書

- 蔵王町文化財調査報告書 (1990) 『堀ノ内遺跡』
- 蔵王町文化財調査報告書 1 (1997) 『堀の内遺跡』
- 蔵王町文化財調査報告書 2 (2002) 『諏訪館前遺跡』
- 蔵王町文化財調査報告書 3 (2005) 『都遺跡ほか（都遺跡・窪田遺跡・新城館跡）』
- 蔵王町文化財調査報告書 4 (2006) 『車地藏遺跡・鍛冶屋敷遺跡ほか』
- 蔵王町文化財調査報告書 5 (2007) 『中沢A遺跡』
- 蔵王町文化財調査報告書 6 (2008) 『六角遺跡―経営体育成基盤整備事業（県営ほ場整備事業）に伴う緊急発掘調査―』
- 蔵王町文化財調査報告書 8 (2009) 『戸ノ内遺跡―経営体育成基盤整備事業（県営ほ場整備事業）に伴う緊急発掘調査―』
- 蔵王町文化財調査報告書 9 (2009) 『青竹遺跡』
- 蔵王町文化財調査報告書 10 (2011) 『西浦B遺跡―商業施設出店計画に伴う緊急発掘調査―』
- 蔵王町文化財調査報告書 11 (2011) 『窪田遺跡―経営体育成基盤整備事業（県営ほ場整備事業）に伴う緊急発掘調査―』
- 蔵王町文化財調査報告書 12 (2011) 『小原遺跡―特別養護老人ホーム増床事業に伴う緊急発掘調査―』
- 蔵王町文化財調査報告書 13 (2011) 『十郎田遺跡1―経営体育成基盤整備事業（県営ほ場整備事業）に伴う緊急発掘調査―』
- 蔵王町文化財調査報告書 14 (2011) 『十郎田遺跡2―経営体育成基盤整備事業（県営ほ場整備事業）に伴う緊急発掘調査―
SE66 井戸跡出土木製遺物編 附 十郎田遺跡出土木製遺物に関する自然科学的分析』
- 蔵王町文化財調査報告書 15 (2012) 『西屋敷遺跡―経営体育成基盤整備事業（県営ほ場整備事業）に伴う緊急発掘調査―』
- 蔵王町文化財調査報告書 16 (2013) 『前戸内遺跡―経営体育成基盤整備事業（県営ほ場整備事業）に伴う緊急発掘調査―』
- 蔵王町文化財調査報告書 17 (2014) 『磯ヶ坂遺跡―経営体育成基盤整備事業（県営ほ場整備事業）に伴う緊急発掘調査―』
- 蔵王町文化財調査報告書 18 (2014) 『蔵王町内遺跡発掘調査報告書1（平成18～24年度）』

報 告 書 抄 録

ふりがな	えんだぼんちのいせきぐん 1							
書名	円田盆地の遺跡群 1							
副書名	経営体育成基盤整備事業（県営ほ場整備事業）に伴う緊急発掘調査＜総括編＞							
巻・次								
シリーズ名	蔵王町文化財調査報告書							
シリーズ番号	第 19 集							
編著者名	鈴木 雅							
編集機関	蔵王町教育委員会							
所在地	〒 989-0892 宮城県刈田郡蔵王町大字円田字西浦北 10 TEL 0224-33-3008 FAX 0224-33-3831							
発行年月日	西暦 2014 年（平成 26 年）3 月 31 日							
ふりがな	ふりがな	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
所収遺跡	所在地	市町村	遺跡番号	° ' "	° ' "			
みやこいせき 都遺跡	蔵王町大字平 沢字都	43010	05015	38° 07' 06"	140° 41' 36"	2003.05.12 } 2003.07.31	4,420㎡	経営体育成基盤 整備事業（県営 ほ場整備事業）
しんじょうたてあと 新城館跡	蔵王町大字平 沢字扇田	43010	05049	38° 07' 53"	140° 41' 43"	2003.05.12 } 2003.07.31	1,890㎡	経営体育成基盤 整備事業（県営 ほ場整備事業）
くぼたいせき 窪田遺跡	蔵王町大字平 沢字窪田・田 中	43010	05193	38° 07' 22"	140° 41' 09"	2003.11.25 } 2003.12.10 2004.03.10 } 2004.03.17 2008.05.21 } 2008.09.19	6,209㎡	経営体育成基盤 整備事業（県営 ほ場整備事業）
じゅうろうだいせき 十郎田遺跡	蔵王町大字小 村崎字十郎 田・宮前	43010	05105	38° 07' 27"	140° 41' 16"	2007.08.24 } 2008.01.15 2008.07.07 } 2008.11.07	9,099㎡	経営体育成基盤 整備事業（県営 ほ場整備事業）
にしごやたてあと 西小屋館跡	蔵王町大字小 村崎字西屋敷	43010	05048	38° 07' 31"	140° 41' 22"	2010.12.16 } 2010.12.24	165㎡	経営体育成基盤 整備事業（県営 ほ場整備事業）
にしゃしきいせき 西屋敷遺跡	蔵王町大字小 村崎字西屋 敷・宮前	43010	05196	38° 07' 33"	140° 41' 19"	2009.04.16 } 2009.09.30	6,216㎡	経営体育成基盤 整備事業（県営 ほ場整備事業）
まえとうちいせき 前戸内遺跡	蔵王町大字小 村崎字前戸内	43010	05108	38° 07' 37"	140° 41' 09"	2008.11.10 } 2008.12.19 2009.06.01 } 2009.09.30	3,557㎡	経営体育成基盤 整備事業（県営 ほ場整備事業）
とのうちいせき 戸ノ内遺跡	蔵王町大字小 村崎字戸ノ内	43010	05197	38° 07' 43"	140° 41' 23"	2007.05.15 } 2007.09.28 2008.11.12 } 2008.11.18	10,135㎡	経営体育成基盤 整備事業（県営 ほ場整備事業）

ろっかくいせき 六角遺跡	蔵王町大字小 村崎字六角地 蔵	43010	05112	38° 07' 31"	140° 41' 38"	2006.05.15 } 2006.11.24 2007.08.21 } 2007.09.24 2011.10.01 } 2011.11.25	27,428㎡	経営体育成基盤 整備事業（県営 ほ場整備事業）
はらいせき 原遺跡	蔵王町大字小 村崎字戸ノ 内・原	43010	05111	38° 07' 43"	140° 41' 40"	2005.10.17 } 2005.11.25 2011.10.01 } 2011.11.25	2,886㎡	経営体育成基盤 整備事業（県営 ほ場整備事業）
いそがさかいせき 磯ヶ坂遺跡	蔵王町大字小 村崎字磯ヶ坂	43010	05189	38° 08' 04"	140° 41' 22"	2005.11.23 } 2005.12.02 2009.04.02 } 2009.05.30 2009.10.01 } 2009.11.30	9,240㎡	経営体育成基盤 整備事業（県営 ほ場整備事業）
くるまじぞういせき 車地蔵遺跡	蔵王町大字小 村崎字車地 蔵・三ノ輪	43010	05198	38° 07' 41"	140° 41' 50"	2005.05.09 } 2005.05.26 2005.10.17 } 2005.11.21	2,500㎡	経営体育成基盤 整備事業（県営 ほ場整備事業）
かじやしきいせき 鍛冶屋敷遺跡	蔵王町大字小 村崎字鍛冶屋 敷	43010	05144	38° 07' 33"	140° 41' 49"	2005.05.09 } 2005.07.06	4,700㎡	経営体育成基盤 整備事業（県営 ほ場整備事業）
かみはのきさわいせき 上葉の木沢遺跡	蔵王町大字小 村崎字上葉の 木沢	43010	05143	38° 07' 23"	140° 41' 53"	2005.07.06 } 2005.07.20	1,700㎡	経営体育成基盤 整備事業（県営 ほ場整備事業）
なかはのきさわいせき 中葉の木沢遺跡	蔵王町大字小 村崎字中葉の 木沢	43010	05144	38° 07' 17"	140° 41' 54"	2005.07.13 } 2005.07.20	650㎡	経営体育成基盤 整備事業（県営 ほ場整備事業）
要約	<p>本書は、宮城県南部の刈田郡蔵王町北東部に位置する円田盆地で計画された経営体育成基盤整備事業（県営ほ場整備事業・円田2期地区）に伴う発掘調査の総括編である。発掘調査は事業対象区域となった盆地北部の16遺跡を対象として平成13～23年度にかけて実施し、遺構確認調査・事前調査を含めた総発掘面積は108,424㎡に及ぶ。本書では、これまでに報告してきた各遺跡の調査成果の概要を整理し、各遺跡で確認した活動痕跡の性格および相互の関係性について、盆地全体の各遺跡のこれまでの調査成果も含めて検討した。盆地内の遺跡で確認されている活動痕跡は縄文時代から近世にかけてのものがあり、縄文時代の落とし穴猟の狩猟場、弥生時代の集落の一部と見られる貯蔵域、古墳時代の集落、飛鳥～奈良時代の集落および城柵・官衙とみられる特殊集落、平安時代の集落および豪族居宅を含む拠点集落、中世の集落（屋敷）および城館、近世の集落（屋敷）および墓域などきわめて多岐におよんでいる。</p> <p>特筆されるのは飛鳥～奈良時代の特殊集落群であり、関東系土師器や関東型カマドを持つ住居の存在から関東系移民の関与が濃厚である。7世紀後半に都遺跡・十郎田遺跡に突如として移民集落が出現する。このうち十郎田遺跡の集落は柴田評の建評に伴って設置された城柵（推定「柴田柵」）の可能性もある。さらに、7世紀末～8世紀初頭には都遺跡北部・窪田遺跡に正方位の区画と建物群が展開し、大宝元年（701年）の郡制の施行に伴って官衙（推定「柴田郡衙」）が造営された可能性がある。また、この頃から8世紀中頃にかけて盆地内各所に移民集落群が展開する。保有する関東系土師器の特徴から、これらの移民集落群の構成員は福島県域に移配された関東系移民の再移民と評価でき、養老5年（721年）の柴田郡の分割（刈田郡の建郡）に合わせて移民による地域再編が行なわれたと考えられる。</p> <p>また、平安時代初頭の8世紀末～9世紀初頭には前代との継続性を持たない中小の集落が盆地内各所に出現し、陸奥・出羽両国に対して行なわれた公民の集住・定着策との関連が考えられる。これらは9世紀前葉～中葉には前戸内遺跡の豪族居宅を伴った拠点集落に集約されて発展を遂げるが、その後の集落形成は極めて低調となった。平安時代末期の11世紀末～12世紀には奥州藤原氏の支配下であり、丈六阿弥陀堂などが建立されたとみられるが、集落の様相は未解明である。中世前半の13世紀中頃～14世紀後半には再び集落形成が活発化し、奥州藤原氏滅亡後の関東御家人の移住に伴う地域再編との関連が考えられる。これらは15世紀には国人領主層の居館（西小屋館跡）周辺に集住化が進んだとみられる。近世には平沢要害に居住した高野家などによる地域開発が進められ、庶民層の安定的な生活が営まれた。</p> <p>以上の検討から、円田盆地の遺跡群の動態には幾度かの空白期（低調期）と活発な集落形成期があることが判明した。こうした動態の背景には、当時の中央政権による東北地方支配という政治的要因が大きく関与したと考えられる。</p>							

印刷製本仕様

製 本：A4 判(縦)、無線(あじろ)綴じ、並製本

ページ数：96 ページ

印 刷：表 紙 オフセット印刷、片面 4 色刷り、210 線

本文等 オフセット印刷、両面 4 色刷り、210 線

用 紙：表 紙 コート 225kg (PP 貼加工)

(四六判換算) 見返し 上質 135kg

本文等 マットコート 110kg

原稿形式：Adobe® InDesign® CS4 (6.06) PDF /X-1a:2001

(OS：Microsoft® Windows® 7 Professional)

ISSN 2188-2525

蔵王町文化財調査報告書 第 19 集

円田盆地の遺跡群 1

経営体育成基盤整備事業（県営ほ場整備事業）に伴う緊急発掘調査

<総括編>

都遺跡・新城館跡・窪田遺跡・十郎田遺跡・西小屋館跡

西屋敷遺跡・前戸内遺跡・戸ノ内遺跡・六角遺跡・原遺跡

磯ヶ坂遺跡・車地藏遺跡・鍛冶屋敷遺跡・上葉の木沢遺跡

2014年（平成26年）3月31日 印刷・発行

編集・発行 蔵王町教育委員会

〒989-0892 宮城県刈田郡蔵王町円田字西浦北10

T E L 0224-33-3008 F A X 0224-33-3831

印刷・製本 株式会社 グラフィック



写真：円田盆地の藪川から見た青麻山と蔵王連峰 図：十郎田遺跡出土土器（飛鳥時代）